

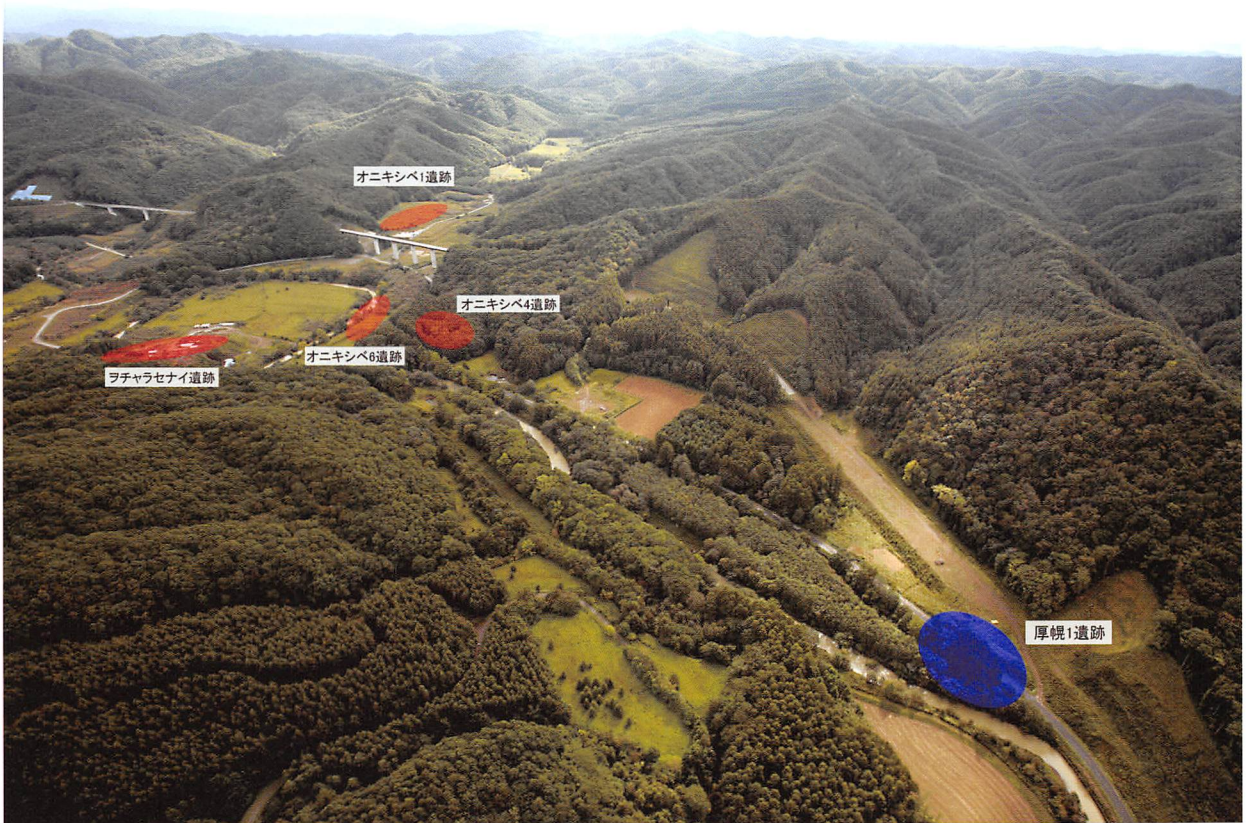
厚幌1遺跡(3)

-厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7-

2014.3

厚真町教育委員会

カラー1



1. 遺跡周辺空撮 NW→

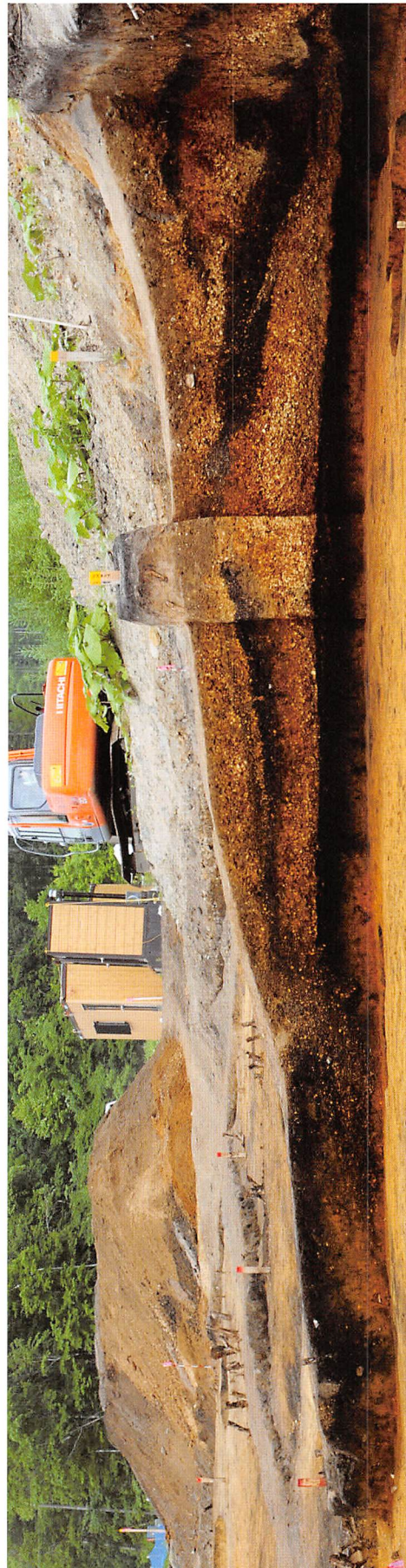


2. 遺跡近景 W→

カラー2



1. 地滑り堆積断面Bライン E→



2. 地滑り堆積断面Dライン W→

カラー3



1. 道跡検出(二股地点) E→



2. TP-104断面 W→



3. TP-105断面 E→

カラー4



1. VPB-05出土状態(地滑り堆積物下位) S→



2. B1地区 土坑及びピット検出 SW→

序 文

厚真町は、胆振・日高地区屈指の豊かな水田地帯を有する大いなる田園都市であります。この穀倉地帯を潤す厚真川は夕張山地の南端を源として流れ、農作物への恩恵を授ける大切な河川でもあります。この豊かな厚真川と豊かな“ふるさと厚真”を更なる発展へと進めるために、農業用水確保と治水対策を主な柱とした多目的ダム「厚幌ダム」が、平成7年度に本格着工されました。

さて本書はこの厚幌ダム建設に先駆けて沈み行く地域に残された埋蔵文化財の記録保存を目的として発掘調査された厚幌1遺跡の調査報告書であります。本書は平成24年度の発掘成果を記載するもので、約500年前のアイヌの人たちが残した道跡や、約5,500から4,000年前の土器や石器のほかシカの落とし穴も多数見つかっています。

厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、今後も数年にわたり継続される予定でございますが、このような貴重な埋蔵文化財を地域の教育的資源、文化的財産として普及活用を推し進めてまいりたいと思っております。また本書が広く埋蔵文化財の保護並びに調査・研究の一助となれば幸いに存じます。

最後となりましたが、調査・整理・報告にあたり御指導、御支援を賜りました関係諸氏ならびに関係機関に、誠に厚く、感謝申し上げます。

厚真町教育委員会
教育長 兵頭 利彦

例言

1. 本書は、平成24年度に行った厚幌ダム建設事業に伴い発掘調査された厚幌1遺跡（登録番号：J-13-25）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部（旧北海道室蘭土木現業所）の委託を厚真町教育委員会が受託した。
3. 調査・整理は以下の体制で行った。
調査担当者：奈良 智法・乾 哲也
調査員：岩橋 由久
調査補助員：服部 一雄
測量技能作業員：大山 真由美 海津 孝之 写図工：畑嶋 朝江 整備技能作業員：日野 修 畑嶋 雄樹
発掘作業員22名 整理作業員11名
奈良：遺構写真図版作成、遺構図作成、土器・礫石器・剥片石器実測
乾：統括・渉外
4. 本書の編集は乾の協力を得て奈良が行い、各節の執筆は、奈良以外の執筆について文末に記す。
5. 遺物の写真撮影：有限会社スタジオクリーク 佐藤雅彦
6. 剥片石器実測・写真、復元土器実測の一部：株式会社 トラスト技研に委託
7. 地形測量委託・礫石器実測委託写真撮影：株式会社 シン技術コンサルに委託
8. 本調査によって得られた資料等は、厚真町教育委員会で保管している。
9. 調査・報告にあたって下記の機関および個人より御指導御協力を頂き、記して感謝申し上げます。

北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、北海道胆振支庁、胆振総合振興局室蘭建設管理部 厚幌ダム建設事務所、苫小牧駒澤大学、札幌学院大学人文学部、公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター、地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所、千歳市埋蔵文化財センター、苫小牧市美術博物館、平取町沙流川歴史館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、浦河町立郷土博物館、恵庭市教育委員会、新ひだか町教育委員会、日高町教育委員会、富良野市教育委員会、星の降る里百年記念館、厚真町幌内自治会、(有)講神組

青野友哉、赤石慎三、阿部明義、天方博章、伊藤昭和、臼杵 勲、右代啓視、小野哲也、小野寺 聡、長田佳宏、柏木大延、川内谷修、工藤研治、熊谷仁志、小山卓臣、斉藤大朋、佐藤一夫、澤田 健、杉浦重信、鈴木琢也、鈴木 信、高橋 理、高橋和樹、田口 尚、田才雅彦、田近 淳、田中哲朗、種市幸生、鶴丸俊明、土肥研晶、中田裕香、長沼 孝、長町章弘、西脇対名夫、長谷山隆博、畑 宏明、広田良成、福井淳一、藤原秀樹、丸山浩治、三浦正人、宗像公司、森岡健治、藪中剛司、山田 央、吉田正明

凡例

1. 本書の遺構・遺物等について下記の略号を用いた。なお、層位がこれらの略号に付加している。

〔遺構〕土坑：P Tピット：TP 焼土：F

〔遺物〕土器：P 縄文土器：JP 続縄文土器：ZP 剥片石器：FT 礫石器：ST 礫：S フレイク・チップ^o（黒曜石頁岩製）：FC フレイク・チップ^o（緑色泥岩・片岩製）：SFC 石製品：SP 炭化種子：SD

〔遺物等集中〕土器片集中：PB 礫集中：SB 炭化物集中：CB 獣骨集中：BB フレイク・チップ^o集中：FCB

2. 地層等について下記の略号を用いた。

〔堆積土〕樽前 a 砂質降下火山灰：Ta-a 駒ヶ岳 c2 砂質降下火山灰：Ko-c2 樽前 b 降下軽石：Ta-b
有珠 b 降下火山灰：Us-b 白頭山-苫小牧火山灰：B-Tm 樽前 c 砂質降下軽石：Ta-c
樽前 d1 細礫質降下スコリア：Ta-d1 樽前 d2 中礫質降下軽石：Ta-d2. p 恵庭岳 a 降下軽石：En-a
黄褐色粘土質シルト（いわゆるローム）：L 攪乱：KR

〔色調〕小山・竹原編著（1994）『新版 標準土色帳』に従った。

〔注記〕土層注記は下記の略号を用いて、左側より混合比率の順列をつけている。また、混入土については（ ）内に粒径（単位：mm）、状態を記載した。

混入土の比率

A + B：A と B が同量比混じる A-B：A を主体に B が多量に混じる

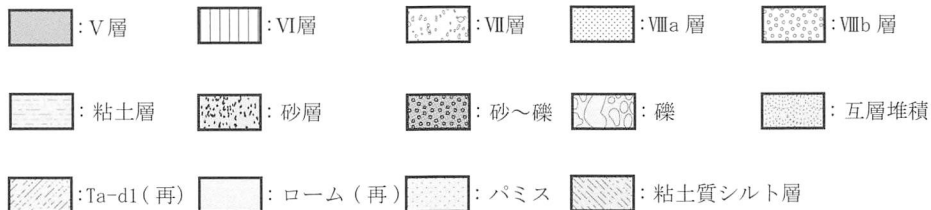
A = B：A を主体に B が少量 A≡B：A を主体に B が微量

φ：粒径（単位：mm） ↓：以下 （状態）：斑状に混じる・均一に混じる

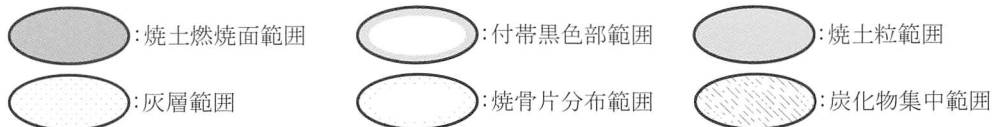
〔層位〕標準堆積層はローマ数字を用い、遺構覆土や風倒木攪乱などの二次的に堆積したものにはアラビア数字を用いた。また、一覧表中には下記の略号を用いている。

U：上位 M：中位 L：下位

〔Tピット〕第三章第3節のTピット堆積図には以下のトーンを用いた。



〔焼土・獣骨集中〕被熱による土壌赤色化の度合い等の表現に以下のトーンを用いた。



3. 挿図は基本的に次のように縮尺を統一したが、異なるものについては図中スケールに縮尺を明記している。

基本土層：1/40 遺構配置図：1/800 1/200 土坑：1/20 Tピット：1/40 焼土・灰集中：1/20

集中遺物出土状態：1/10 1/20 1/50

土器実測図：1/3 土器拓影図：1/3 剥片石器・石製品実測図：1/2 礫石器実測図：1/3 1/4

4. 遺構実測図中に以下の線種・トーンを用いている。

〔線種〕-----：オーバーハング ————：トレンチ - - - - -：攪乱・トレンチによる遺構推定

〔柱穴〕 住居跡柱穴の断面図において、しまりの強い壁面に斜線を用いている。

〔断面〕  : 柱穴の壁面周辺が強くしまる部分

5. 土器・石器の挿図および写真図版の番号に後続する枝番号は同一個体表記である。

6. 遺物実測図中に以下の略号を用いている。

〔断面〕  : たたき痕 | ————— | : 剥片石器 微細剥離 / 礫石器 擦り痕・滑沢面

〔平面〕  : 滑沢面範囲  : 被熱による赤色化/付着物範囲

7. 一覧表中の材質については、奈良が肉眼観察で分類し、下記の略号を用いた。緑泥片岩は緑色泥岩に含めている。

また、頁岩・泥岩の分類については、粒度による基準ではなく、破断面等の肉眼観察によるものである。

Aga. : メノウ Aga-Sh. : メノウ質頁岩 Amp. : 角閃岩 And. : 安山岩 Bl-Sch. : 青色片岩

Cha. : チャート Con. : 礫岩 Dio. : 閃緑岩 Gra. : 花崗岩 Gr-Mud. : 緑色泥岩 Mud. : 泥岩

Obs. : 黒曜石 Qu. : 石英 Qua. : 珪岩 Sch. : 片岩 Sa. : 砂岩 Ser. : 蛇紋岩 Sh. : 頁岩 Tu. : 凝灰岩

Tu-Sa. : 凝灰質砂岩 Rod. : ロジン岩

本文目次

巻頭カラー

1-1 遺跡周辺空撮

1-2 遺跡近景

2-1 地滑り堆積断面 B ライン

2-2 地滑り堆積断面 D ライン

3-1 道跡検出(二股地点)

3-2 TP-104 断面

3-3 TP-105 断面

4-1 VPB-05 出土状態(地滑り堆積物下位)

4-2 B1 地区 土坑及び T ピット検出

序 文

例 言

凡 例

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査要項と体制	1
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
第 2 節 調査に至る経緯	1
1. 厚幌ダム建設事業	1
2. 発掘調査までの経緯	2
第 3 節 調査の方法	8
1. 調査区の設定	8
2. 包含層及び遺構の調査方法	8
3. 整理作業	12
第 4 節 遺物の分類	12
1. 土器	12
2. 剥片石器	13
3. 礫石器	14
第 5 節 調査結果の概要	15
1. アイヌ文化期から続縄文文化期	15
2. 縄文時代	15
第 6 節 遺跡の位置と周辺環境	17
1. 厚真町の概要	17

2. 遺跡の位置と周辺環境

3. 調査区内の地形と地質

第 II 章 アイヌ文化期から

続縄文文化期の調査

第 1 節 道跡	31
第 2 節 集中遺物	34
1. 土器集中	34
2. 礫集中	34

第 III 章 縄文時代の調査

第 1 節 土坑	36
第 2 節 焼土	46
第 3 節 T ピット	46
第 4 節 遺物集中	56
1. 土器集中・フレイク・チップ集中	56
2. 礫集中	58
第 5 節 包含層出土遺物	62
1. 土器	62
2. 剥片石器	64
3. 礫石器	69

第 IV 章 まとめ

1. 胎土に滑石を含む土器について	76
2. 厚真川上流域の地滑り	76
引用・参考文献	78
報告書抄録	107
奥 付	

写真図版

図版	81~105
----	--------

ix

挿 図 目 次

第 I 章

図 I-1	厚真町内遺跡分布図	3
図 I-2	厚幌ダム建設事業関連 埋蔵文化財包蔵地位置図	7
図 I-3	グリッド模式図	9
図 I-4	グリッド設定図及び試掘坑位置図	10
図 I-5	周辺の地形及びグリッド配置図	11
図 I-6	年度別調査範囲及びV層遺構分布図	16
図 I-7	V層地滑り分布図	24
図 I-8	基本土層柱状図	26
図 I-9	南北断面図及び 地滑り断面図A・Bライン	27
図 I-10	地滑り断面図Cライン	28
図 I-11	地滑り断面図D・Eライン	29

第 II 章

図 II-1	III層遺構分布図	32
図 II-2	道跡断面図	33
図 II-3	III PB-02・III SB-09 平面図	33
図 II-4	III PB-02・III SB-09 出土土器	35

第 III 章

図 III-1	V層遺構配置図	38
図 III-2	V P-13~18 平面及び断面図	40
図 III-3	V P-19・22~28 平面及び断面図	41
図 III-4	V P-29~31・33~38 平面及び断面図	42

図 III-5	V P-39・40・42~48 平面及び断面図	43
図 III-6	V P-49~52 平面及び断面図	44
図 III-7	V F-21 平面及び断面図	46
図 III-8	T P-104・105 平面及び断面図	48
図 III-9	T P-106・107 平面及び断面図	49
図 III-10	T P-108・110 平面及び断面図	50
図 III-11	T P-111~113 平面及び断面図	51
図 III-12	T P-114・116 平面及び断面図	52
図 III-13	T P-117~119 平面及び断面図	53
図 III-14	T P-120・121 平面及び断面図	54
図 III-15	Tピット出土遺物	57
図 III-16	V PB-04・05 平面・断面・垂直分布図	59
図 III-17	V PB-04・05 出土土器	59
図 III-18	V PB-06・V FCB-10・V SB-11 平面図	60
図 III-19	V PB-06・V FCB-10・V SB-11 出土遺物	61
図 III-20	包含層出土土器	65
図 III-21	土器接合線図	66
図 III-22	包含層出土剥片石器	68
図 III-23	包含層出土礫石器 (1)	71
図 III-24	包含層出土礫石器 (2)	72
図 III-25	包含層出土礫石器 (3)	73
図 III-26	包含層出土礫石器 (4)	74

挿 表 目 次

第 I 章

表 I-1	厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表 (1)	4
表 I-2	厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表 (2)	5
表 I-3	厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表 (3)	6
表 I-4	グリッド設定関係杭座標値一覧表	9
表 I-5	厚幌 1 遺跡概要一覧表	15
表 I-6	厚幌 1 遺跡出土遺物一覧表	15

第 II 章

表 II-1	III層遺構群一覧表	31
表 II-2	III PB-02 出土土器属性表	34
表 II-3	III SB-09 礫属性表	34

第 III 章

表 III-1	縄文時代遺構群一覧表	37
---------	------------	----

表Ⅲ-2	VP 属性表	45	表Ⅲ-8	VPB-04~06 出土土器属性表	62
表Ⅲ-3	VF-21 属性表	46	表Ⅲ-9	VPB-06・VFCB-10 出土石器属性表	62
表Ⅲ-4	Tピット属性表	55	表Ⅲ-10	VSB-11 礫属性表	63
表Ⅲ-5	Tピット逆茂木跡属性表	55	表Ⅲ-11	縄文時代包含層出土土器属性表	67
表Ⅲ-6	Tピット出土土器属性表	55	表Ⅲ-12	包含層出土剥片石器属性表	69
表Ⅲ-7	Tピット出土石器属性表	56	表Ⅲ-13	包含層出土礫石器属性表	75

写真図版目次

図版 1-1	厚幌1 遺跡遠景	81	図版 5-3	VP-26 断面	85
図版 1-2	B1 地区V層調査完了	81	図版 5-4	VP-27 完掘	85
図版 1-3	B1 地区西壁基本土層 (Tピット掘り上げ土有)	81	図版 5-5	VP-27 断面	85
図版 2-1	道跡検出1	82	図版 5-6	VP-28 完掘	85
図版 2-2	道跡検出2	82	図版 5-7	VP-28 断面	85
図版 2-3	道跡断面1	82	図版 5-8	VP-29 完掘	85
図版 2-4	道跡断面2	82	図版 6-1	VP-29 断面	86
図版 2-5	ⅢPB-02 検出	82	図版 6-2	VP-30 完掘	86
図版 2-6	ⅢSB-09 検出	82	図版 6-3	VP-30 断面	86
図版 3-1	VP-13 完掘	83	図版 6-4	VP-31 完掘	86
図版 3-2	VP-13 断面	83	図版 6-5	VP-31 断面	86
図版 3-3	VP-14 完掘	83	図版 6-6	VP-33 完掘	86
図版 3-4	VP-14 断面	83	図版 6-7	VP-33 断面	86
図版 3-5	VP-15 断面	83	図版 6-8	VP-34 断面	86
図版 3-6	VP-16 断面	83	図版 7-1	VP-35 断面	87
図版 3-7	VP-17 断面	83	図版 7-2	VP-36 断面	87
図版 3-8	VP-18 断面	83	図版 7-3	VP-37 断面	87
図版 4-1	VP-19 断面	84	図版 7-4	VP-34~37 完掘	87
図版 4-2	VP-15~19 完掘	84	図版 7-5	VP-38 完掘	87
図版 4-3	VP-22 断面	84	図版 7-6	VP-38 断面	87
図版 4-4	VP-23 断面	84	図版 7-7	VP-39 完掘	87
図版 4-5	VP-22 (左)・23 (右) 完掘	84	図版 7-8	VP-39 断面	87
図版 4-6	VP-24 完掘	84	図版 8-1	VP-40 完掘	88
図版 4-7	VP-24 断面	84	図版 8-2	VP-40 断面	88
図版 4-8	VP-25 完掘	84	図版 8-3	VP-42 完掘	88
図版 5-1	VP-25 断面	85	図版 8-4	VP-42 断面	88
図版 5-2	VP-26 完掘	85	図版 8-5	VP-43 完掘	88
			図版 8-6	VP-43 断面	88

図版 8-7	V P-44 完掘	88	図版 14-5	T P-113 完掘	94
図版 8-8	V P-44 断面	88	図版 14-6	T P-113 断面	94
図版 9-1	V P-45 完掘	89	図版 15-1	T P-114 完掘	95
図版 9-2	V P-45 断面	89	図版 15-2	T P-114 断面	95
図版 9-3	V P-46 完掘	89	図版 15-3	T P-116 完掘	95
図版 9-4	V P-46 断面	89	図版 15-4	T P-116 断面	95
図版 9-5	V P-47 完掘	89	図版 15-5	T P-117 完掘	95
図版 9-6	V P-47 断面	89	図版 15-6	T P-117 断面	95
図版 9-7	V P-48 完掘	89	図版 16-1	T P-118 完掘	96
図版 9-8	V P-48 断面	89	図版 16-2	T P-118 断面	96
図版 10-1	V P-49 完掘	90	図版 16-3	T P-119 完掘	96
図版 10-2	V P-49・51 断面	90	図版 16-4	T P-119 断面	96
図版 10-3	V P-50 完掘	90	図版 16-5	T P-120 完掘	96
図版 10-4	V P-50 断面	90	図版 16-6	T P-120 断面	96
図版 10-5	V P-51 被熱礫出土状態	90	図版 17-1	T P-121 完掘	97
図版 10-6	V P-51 完掘	90	図版 17-2	T P-121 断面	97
図版 10-7	V P-52 完掘	90	図版 17-3	T P-120・121 完掘	97
図版 10-8	V P-52 断面	90	図版 17-4	V PB-04 検出	97
図版 11-1	V P-24~39 小ピット群	91	図版 17-5	V PB-05 検出 1	97
図版 11-1	V F-21 検出	91	図版 17-6	V PB-05 検出 2	97
図版 11-2	V F-21 断面	91	図版 17-7	V PB-06 検出	97
図版 12-1	T P-104 完掘	92	図版 17-8	V SB-11 検出	97
図版 12-2	T P-104 断面	92	図版 17-9	V FCB-10 検出	97
図版 12-3	T P-105 完掘	92	図版 18-1	B1 地区側 Vb1 層遺物出土状態	98
図版 12-4	T P-105 断面	92	図版 18-2	B1 地区 N-51 区 石皿出土状態	98
図版 12-5	T P-106 完掘	92	図版 18-3	B1 地区西側 Vc 層遺物出土状態	98
図版 12-6	T P-106 断面	92	図版 19-1	作業風景 1 (B1 地区)	99
図版 13-1	T P-107 完掘	93	図版 19-2	作業風景 2 (B1 地区)	99
図版 13-2	T P-107 断面 (掘り上げ土有)	93	図版 19-3	作業風景 3 (B1 地区)	99
図版 13-3	T P-108 完掘	93	図版 20-1	III PB-02 出土土器	100
図版 13-4	T P-108 断面	93	図版 20-2	III SB-09 出土棒状礫	100
図版 13-5	T P-110 完掘	93	図版 21	T ピット・V PB 出土遺物	101
図版 13-6	T P-110 断面	93	図版 22-1	V FCB-10・V SB-11 出土遺物	102
図版 14-1	T P-111 完掘	94	図版 22-2	包含層出土土器	102
図版 14-2	T P-111 断面	94	図版 23	包含層出土剥片石器	103
図版 14-3	T P-112 完掘	94	図版 24	包含層出土礫石器 (1)	104
図版 14-4	T P-112 断面	94	図版 25	包含層出土礫石器 (2)	105

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査要項と体制

1. 調査要項

事業名：厚幌ダム建設事業 埋蔵文化財発掘調査 その 2

委託者：北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部（旧北海道室蘭土木現業所）

受託者：厚真町教育委員会

遺跡名：厚幌 1 遺跡（J-13-25）

調査面積：2,070 m²

所在地：北海道勇払郡厚真町字幌内 487-6・8・9・15・18 二級河川厚真川河川敷

受託期間：平成 24 年 4 月 13 日～平成 25 年 3 月 26 日

発掘期間：（発掘）平成 24 年 5 月 9 日～平成 24 年 7 月 20 日

（整理）平成 24 年 11 月 1 日～平成 25 年 3 月 15 日

2. 調査体制

厚真町教育委員会 教育長 兵頭 利彦

生涯学習課 参事 佐藤 照美（平成 24 年 9 月 30 日まで） 長谷川 栄治（平成 24 年 10 月 1 より）

主幹 上田 敦子 主査 乾 哲也（調査担当者 学芸員） 主任 奈良 智法（調査担当者 学芸員）

嘱託職員 岩橋 由久（調査員）・服部 一雄（調査補助員）・鈴木 直樹 脇田 幹王（事務員）

臨時職員 海津 孝之・畑嶋 朝江（測量技能作業員および写図工）

〃 大山 眞由美（測量技能作業員）日野 修・畑嶋 雄樹（整備技能作業員）

〃 発掘作業員 22 名 整理作業員 11 名

第 2 節 調査に至る経緯

1. 厚幌ダム建設事業

町内を縦貫する厚真川中下流域には約 3,000ha もの水田地帯が広がっている。このため、春の灌漑用水の確保は勿論のこと、融雪や豪雨による洪水への治水対策が開拓期以来の課題とされていた。

昭和 45（1970）年に現河口より 38km 地点に、農業用ダムである「厚真ダム」が完成した。しかし、このダムは洪水調整機能が不十分で、昭和 45 年には洪水と渇水、昭和 48・50・56 年にも洪水が発生し、近年においても、平成 12 年春の融雪期と平成 13 年秋に、家屋や農地に被害をおよぼす洪水、平成 18 年にも一部がオーバーフローする事態が発生している。また、昭和 59・60・63 年には深刻な水不足にも見舞われており、平成 19 年は、幼穂形成期の水不足により深水灌漑が行えなかったため低温障害を受け、作況指数が極端に低い年でもあった。特に田植え時期における農業用水の確保は農業者にとっては勿論、厚真町民にとっても関心事であり、厚真町の基幹産業である農業、豊かな穀倉地帯を築くうえで、治水や農業灌漑などを目的とする新たなダム建設が陳情されていた。また、市街地への人口集中の進行による住宅街や苫小牧東港への水道用水の需要が急増し、取水可能量は限界に達していることから、新たな上水道水源確保が急務となっている。

これらの状況の抜本的な治水等の改善策として、昭和 52 年に北海道士木現業所により厚幌ダム建設事業の予備調査が着手されている。その後、昭和 61 年に実施設計である「厚真川総合開発事業計

画調査」の着手が決まり、平成 7 (1995) 年に北海道と厚真町との間で「厚真川総合開発事業厚幌ダム建設工事に関する基本協定」が結ばれ、洪水調整、灌漑用水、水道水の確保、流水の正常な機能維持の多目的ダムとして、現厚真ダム下流に「厚幌ダム」の建設着工が決定された。また、同年には地元厚真町内に厚幌ダム建設事務所が開設され、その後、沿岸漁業団体への説明会や環境アセスメントも実施されている。近年ではダム事業に関連して、道道切替工事や町内各地区の農業経営体育成基盤整備事業、農業用水路再編対策事業(厚幌導水路建設)が展開され、営農の効率化が促進されている。厚幌ダムの本格着工として、平成 14 年度からの水没地域内用地買収とともに、一般道道上幌内早来停車場線の切替工事に着手し、北進平取線としてむかわ町穂別まで延長開通の計画である。厚幌ダム本体(堤体)は、平成 20 年に建設費節減のため最新工法での設計変更がなされ、堤体長 516m、高さ 47.2m、台形CSGダムで、ヲチャラセナイ遺跡より約 450m 下流に堤体を建設する計画である。貯水は常時湛水面標高 85.4m、最深湛水面標高 88.1m であり、総貯水量は 47,400 千 m^3 、現在の厚真ダムのおおよそ 4.7 倍の貯水量となり、多方面にわたって絶大な効果波及が想定され、早期完成が望まれていた。

しかし、北海道内の複数のダム事業との関係からダム堤体着手の予算確保が困難な状況が続き、当初計画の平成 24 年完成から平成 27 年秋に試験湛水、28 年に春に供用を開始する計画となり工期が延長された。その後、平成 20 年 11 月に公共事業再評価を受け、多目的ダムの必要において A 評価を受け事業継続となっていた。ところが、平成 20 年 7 月の政権交代によって、全国の公共事業、とりわけダム事業の否定的見直しが進められ、厚幌ダムもその対象となっている(苫小牧民報社 2009.10.7)。その後平成 23 年 8 月に国土交通省は事業継続を決定し、平成 24 年度からは完成に向けて、埋蔵文化財発掘調査費用も予算が配当され、道埋文センターも調査に参入している。なお、厚幌ダムは国費 54%、道費 44.6%等のいわゆる「補助ダム」と称されるダムである。(乾)

2. 発掘調査までの経緯

A 厚幌ダム建設事業の埋蔵文化財事前調査(図 I-2)

厚幌ダム建設事業の本格化を踏まえて、平成 12 年 7 月 6 日に北海道室蘭土木現業所厚幌ダム建設事務所(以下、ダム事務所)より、ダム事業全体に係わる埋蔵文化財事前協議書(室土厚幌第 158 号)が厚真町教育委員会(以下、町教委)を経て北海道教育委員会(以下、道教委)へ提出された。協議区域は最深湛水面標高 88.1m 以下の区域と道道上幌内早来停車場線(以下、道道)切替路線幅の合計約 235,500 m^2 に及ぶ。まず、平成 13 年 6 月に道教委により試掘調査が行われ、約 8,250 m^2 の「要発掘調査」面積となり、厚幌 1 遺跡(J-13-25)として新規登録された(平成 13 年 7 月 18 日付 教文第 4265 号)。これを受け、厚幌ダム関連の埋蔵文化財発掘調査について道教委と町教委で協議した結果、ダム関連の試掘調査までは道教委が行い、発掘調査は厚幌ダム建設に係わる受益者が厚真町 1 町であることから、町教委と北海道室蘭土木現業所で委託契約を結び、町教委が行うこととなった。翌平成 14・15 年度の 2 ヶ年で厚幌 1 遺跡の発掘調査を行った(厚真町教育委員会 2004)。

湛水地域内は平成 13 年 10 月に所在確認調査(A 調査)が行われ、周知の遺跡(オニキシベ 1 遺跡、上幌内 1 遺跡)を含め 16 ヶ所、面積 235,500 m^2 の要試掘調査の回答がされた(平成 13 年 11 月 16 日付け教文第 4532 号)。以後、追加箇所や範囲拡張も含め平成 19 年度までに 8 回、18 地点の試掘調査が実施され、14 遺跡、約 143,000 m^2 の要発掘・要遺構確認調査地点が確認されていた。

しかし、これまでの発掘調査成果から河岸段丘の低位面にも埋蔵文化財包蔵地が広がること等、こ

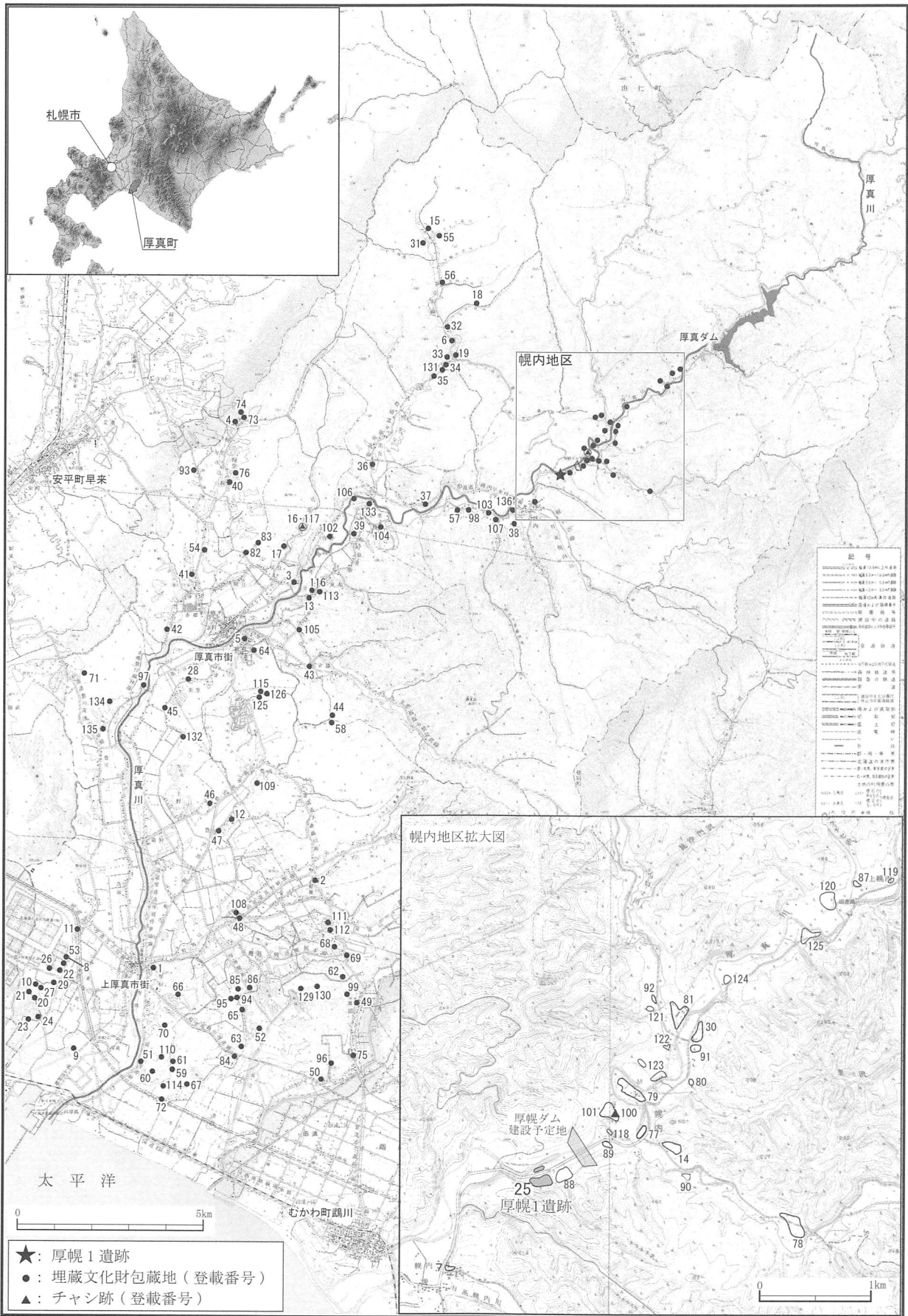


表 I -1 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1)

登載 番号	種 別	名 称	時 代	文献等
1	遺物包含地	上厚真遺跡	縄文中～後期・続縄文・擦文	1
2	遺物包含地	軽舞遺跡	縄文中期・続縄文	1
3	遺物包含地	朝日遺跡(文献1:振老)	縄文後～晩期・続縄文・擦文	1,2,31
4	遺物包含地	幌里1遺跡(文献1:仁達幌)	縄文中・晩期・続縄文	1
5	遺物包含地	新町遺跡(文献1:上振内)	縄文中期・続縄文・擦文・アイヌ期	1,4,6
6	遺物包含地	高丘1遺跡(文献1:頗美宇)	縄文中期・続縄文	1
7	遺物包含地	幌内1遺跡	縄文中期・続縄文	1
8	集落跡	共和遺跡(文献1:西周文)	縄文晩期・擦文	1,8
9	遺物包含地	浜厚真遺跡	縄文?	
10	溝穴遺構	厚真10遺跡	縄文中・晩期	3,8
11	遺物包含地	厚真11遺跡	縄文晩期	
12	遺物包含地	豊沢1遺跡(文献1:当麻内)	続縄文	1
13	遺物包含地	東和遺跡(文献1:東老軽舞)	縄文・続縄文	1
14	集落跡	オニキシベ1遺跡(文献1:オニキシベ)	縄文中～後期・アイヌ期?	1
15	遺物包含地	高丘3遺跡	縄文中期	
16	チャシ跡	桜丘チャシ跡	中世アイヌ期	4,6
17	遺物包含地	桜丘1遺跡	縄文晩期	
18	遺物包含地	高丘2遺跡	縄文?	
19	集落跡	高丘10遺跡	縄文?	
20	集落跡	厚真1遺跡	縄文中期	8,13
21	溝穴遺構	厚真2遺跡	縄文中期?	8
22	溝穴遺構	厚真3遺跡	縄文早・中～晩期・続縄文	10
23	集落跡	厚真4遺跡	縄文	
24	遺物包含地	厚真5遺跡	縄文前～晩期・続縄文・擦文	
25	集落跡	厚幌1遺跡	縄文早～晩期・続縄文・擦文・アイヌ期	18
26	集落跡	厚真7遺跡	縄文早・中～晩期・続縄文・擦文	9
27	集落跡	厚真8遺跡	縄文中～晩期	8
28	遺物包含地	美里2遺跡	縄文早・中期	
29	墳墓	厚真12遺跡	縄文中・晩期・擦文	10
30	遺物包含地	上幌内1遺跡(旧幌内3遺跡)	縄文中期	
31	遺物包含地	高丘4遺跡	縄文	
32	遺物包含地	高丘5遺跡	縄文?	
33	遺物包含地	高丘6遺跡	縄文?	
34	遺物包含地	高丘7遺跡	縄文?	
35	遺物包含地	高丘8遺跡	縄文?	
36	遺物包含地	高丘9遺跡	続縄文	
37	遺物包含地	富里1遺跡(文献1:檜山)	縄文中～晩期	1
38	遺物包含地	幌内4遺跡	縄文中期?	
39	遺物包含地	チコマナイ遺跡	縄文?	
40	遺物包含地	幌里2遺跡	縄文中期	
41	遺物包含地	本郷1遺跡	縄文中・晩期	
42	遺物包含地	本郷2遺跡	縄文後期	
43	遺物包含地	宇隆1遺跡	縄文・中世アイヌ期	16
44	遺物包含地	宇隆2遺跡	続縄文	
45	遺物包含地	美里1遺跡(文献1:振内)	縄文中期	1
46	遺物包含地	豊沢2遺跡	擦文	
47	遺物包含地	豊沢3遺跡	続縄文	
48	遺物包含地	鯉沼1遺跡(文献1:上周文?)	縄文	1
49	遺物包含地	鹿沼2遺跡(文献5:鹿沼B)	縄文中期	5
50	遺物包含地	鹿沼1遺跡(文献5:鹿沼A)	縄文	5
51	遺物包含地	厚和1遺跡(文献5:周文)	縄文中期・アイヌ期	1,4,6
52	遺物包含地	鹿沼3遺跡	縄文中・晩期	
53	溝穴遺構	厚真13遺跡	縄文早～中・晩期・続縄文・擦文	10
54	遺物包含地	本郷3遺跡	縄文?	
55	遺物包含地	高丘11遺跡	縄文晩期	
56	遺物包含地	高丘12遺跡	縄文	
57	墳墓	幌内5遺跡	縄文前・後期・アイヌ期	32
58	溝穴遺構	豊沢4遺跡	縄文早・中～後期	
59	遺物包含地	厚和2遺跡	縄文中期	
60	遺物包含地	厚和3遺跡	縄文後期	

表 I-2 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(2)

掲載 番号	種 別	名 称	時 代	文献等
61	遺物包含地	厚和4遺跡	縄文中期	
62	遺物包含地	鹿沼4遺跡	縄文	
63	遺物包含地	厚和5遺跡	縄文	
64	遺物包含地	新町2遺跡	縄文中期	
65	遺物包含地	鹿沼5遺跡	縄文後期	
66	遺物包含地	厚和6遺跡	縄文前期	
67	遺物包含地	浜厚真2遺跡	縄文早期	
68	溝穴遺構	鯉沼2遺跡	縄文中期	14
69	遺物包含地	豊丘遺跡	縄文中期	
70	集落跡	厚和7遺跡	縄文後期	
71	集落跡	豊川1遺跡	縄文前・後～晩期	15
72	遺物包含地	浜厚真3遺跡	縄文早・後期	17
73	遺物包含地	ニタツポロ沢遺跡	縄文後・晩期	
74	遺物包含地	幌里神社遺跡	縄文早・後期	
75	溝穴遺構	入鹿別沼遺跡	縄文中期?	
76	溝穴遺構	幌里3遺跡	縄文	
77	遺物包含地	オニキシベ2遺跡	縄文中～後期・続縄文・擦文・中世アイヌ期	
78	遺物包含地	オニキシベ3遺跡	縄文後期	
79	集落跡 ・墳墓	上幌内モイ遺跡	旧石器・縄文早・中～後期・続縄文・擦文 ・中近世アイヌ	19,21,22,2 4,26,27,28
80	遺物包含地	一里沢遺跡	縄文前～中期・アイヌ期	4,5,21
81	集落跡	シヨロマ1遺跡	縄文前・後期	
82	遺物包含地	東ニタツポロ1遺跡	縄文中・晩期	
83	遺物包含地	東ニタツポロ2遺跡	縄文中・晩期	
84	遺物包含地	浜厚真4遺跡	縄文中期	
85	溝穴遺構	鯉沼3遺跡	縄文前～後期	20,23,25
86	溝穴遺構	鯉沼4遺跡	縄文後期	
87	遺物包含地	イクバンドユクチセ遺跡	縄文後期	
88	遺物包含地	厚幌2遺跡	縄文前期	
89	遺物包含地	オニキシベ4遺跡	縄文	
90	遺物包含地	オニキシベ5遺跡	縄文中期～後期	
91	溝穴遺構	上幌内2遺跡	縄文・アイヌ期	
92	遺物包含地	シヨロマ2遺跡	縄文中期	
93	溝穴遺構	幌里4遺跡	縄文	
94	集落跡	厚和8遺跡	縄文中～後期	
95	遺物包含地	厚和9遺跡	縄文中期	
96	遺物包含地	鹿沼6遺跡	縄文	
97	遺物包含地	豊川2遺跡	続縄文・擦文	
98	遺物包含地	幌内6遺跡	縄文後期	
99	溝穴遺構	鹿沼7遺跡	縄文早～晩期	
100	チャシ跡	ヲチャラセナイチャシ跡	中世アイヌ期	
101	遺物包含地	ヲチャラセナイ遺跡	縄文早～後期・続縄文・擦文・中世アイヌ期	
102	遺物包含地	吉野1遺跡	縄文中・晩期	
103	遺物包含地	幌内7遺跡	縄文晩期・擦文	
104	集落跡	ニタツナイ遺跡	縄文前～後期・続縄文・擦文・近世アイヌ期	29,32
105	遺物包含地	宇隆3遺跡	縄文中期	
106	遺物包蔵地	富里2遺跡	縄文後・晩期・続縄文・擦文・中近世アイヌ期	32
107	遺物包蔵地	オコッコ1遺跡	縄文前・中・後期・擦文	
108	遺物包蔵地	軽舞2遺跡	縄文前期・続縄文	
109	遺物包蔵地	豊沢5遺跡	縄文後期	
110	溝穴遺構	厚和10遺跡	縄文早・中・後期	
111	遺物包含地	豊丘2遺跡	縄文早期	
112	遺物包蔵地	豊丘3遺跡	縄文中期	
113	遺物包蔵地	東和2遺跡	縄文晩期	
114	遺物包含地	浜厚真5遺跡	縄文後期	
115	遺物包蔵地	豊沢6遺跡	縄文早・中・後期	
116	遺物包蔵地	東和3遺跡	縄文早期	
117	遺物包含地	桜丘2遺跡	縄文中・後期	
118	遺物包含地	オニキシベ6遺跡	縄文後期	
119	溝穴遺構	イクバンドユクチセ2遺跡	縄文後期	

表 I-3 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(3)

登載番号	種別	名称	時代	文献等
120	遺物包含地	イクバンドユクチセ3遺跡	縄文中・後期・続縄文期	
121	遺物包含地	シヨロマ3遺跡	続縄文期	
122	遺物包含地	シヨロマ4遺跡	縄文	
123	遺物包含地	上幌内3遺跡	縄文中・後期	
124	遺物包含地	上幌内4遺跡	縄文中期	
125	溝穴遺構	上幌内5遺跡	縄文	
126	遺物包含地	豊沢7遺跡	縄文中・後期	
127	遺物包含地	豊沢8遺跡	縄文後期	
128	遺物包含地	ライカルマイ遺跡	続縄文・擦文・中世アイヌ期・明治期	
129	遺物包含地	長沼1遺跡	縄文早期	
130	溝穴遺構	長沼2遺跡	縄文	
131	遺物包含地	高丘13遺跡	縄文前期・擦文期	
132	遺物包含地	上野1遺跡	縄文中期	
133	遺物包含地	富里3遺跡	縄文中・晩期	
134	遺物包含地	豊川3遺跡	縄文晩期	
135	遺物包含地	三ヶ月沼遺跡	縄文晩期	
136	遺物包含地	幌内8遺跡	縄文前・中期	

関連文献

1: 厚真村郷土研究会 1956『厚真村古代史』 2: 亀井喜久太郎 1957「厚真出土の土偶」『先史時代3』 3: 苫小牧市教育委員会 1974『苫小牧東部工業地帯内埋蔵文化財分布調査報告書』 4: 亀井喜久太郎・池田実 1976『厚真の旧地名を尋ねて』 5: 鶴川町教育委員会 1977『鶴川町遺跡分布報告』 6: 亀井喜久太郎・池田実 1978『続厚真の旧地名を尋ねて』 7: 松浦武四郎(高倉新一郎校訂) 1985『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』 8: 苫小牧市教育委員会 1986『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』 9: 苫小牧市教育委員会 1987『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』 10: 苫小牧市教育委員会 1990『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』 11: 苫小牧市教育委員会 1992『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』 12: 苫小牧市教育委員会 1995『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』 13: 赤石慎三 1999「苫小牧地方の円筒上層式について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報1』 14: 厚真町教育委員会 2001『鯉沼2遺跡』 15: 厚真町教育委員会 2001『豊川1遺跡』 16: 鈴木 信 2001「IV-4 北海道の中世陶磁器」『千歳市ユカンボンC15遺跡(4)』(財)北海道埋蔵文化財センター159 17: (財)北海道埋蔵文化財センター 2003『厚真町浜厚真3遺跡』 18: 厚真町教育委員会 2004『厚幌1遺跡』 19: 厚真町教育委員会 2005『上幌内モイ遺跡発掘調査概要報告書』 20: 厚真町教育委員会 2005『鯉沼3遺跡』 21: 養島栄紀 2005「松浦武四郎の旅からみた胆振東部・日高西部の古交通路」『前近代アイヌ民族における交通路の研究(胆振・日高Ⅰ)』 22: 厚真町教育委員会 2006『上幌内モイ遺跡(1)』 23: 厚真町教育委員会 2006『鯉沼3遺跡(2)』 24: 厚真町教育委員会 2007『上幌内モイ遺跡(2)』 25: 厚真町教育委員会 2008『鯉沼3遺跡(3)』 26: 出穂雅実他 2008『論集忍路子Ⅱ』 27: 関根達人 2008「平泉文化と北方交易2-擦文期の銅鏡をめぐって-」『平泉文化研究年報8』 28: 厚真町教育委員会 2009『上幌内モイ遺跡』発掘調査報告書(3)』 29: 厚真町教育委員会 2009『ニタツナイ遺跡(1)』 30: 厚真町教育委員会 2010a『厚幌1遺跡(2)・幌内7遺跡(1)』 31: 北海道大学附属図書館HP北方資料データベース 32: 厚真町教育委員会 2010b『幌内5遺跡(1)・富里2遺跡・ニタツナイ遺跡(2)』 33: 厚真町教育委員会2011『オニキンベ2遺跡』 34: 苫小牧民報社 2011.3.3 新聞記事

の地区における遺跡の立地パターンが判明してきており、建設中工事の発見を避けるため新たな視点での再試掘調査の必要性が生じていた。これを受け道教委は平成21年5月に湛水地域内の所在確認踏査を行い、要試掘調査地点10ヶ所を回答した(平成21年6月11日付け教文ス第928号)。このうち8地点については7、8月に試掘踏査が実施され6ヶ所の包蔵地が発見された(平成21年9月10日付け教文ス第1940号)。更に平成21年12月にも試掘調査が実施され新たに1ヶ所が追加された(平成22年1月5日付け教文ス第3145号)。既に発掘調査が終了した面積と遺構確認調査を含め、平成24年12月現在の要発掘調査地点は24ヶ所に及び、要発掘面積150,495㎡、要遺構確認調査47,344㎡で合計197,839㎡となった。平成25年12月現在で発掘調査終了面積が111,779㎡(56.4%厚幌1遺跡導水路調査含む)となっている(図I-2)。

B 厚幌1遺跡の発見経緯

厚幌1遺跡は室蘭建設管理部が事業者となる厚幌ダム建設事業に係わる一般道道上幌内早来停車場線切替工事の所在確認、試掘調査で道教委により発見、登載された(事前協議:平成12年7月

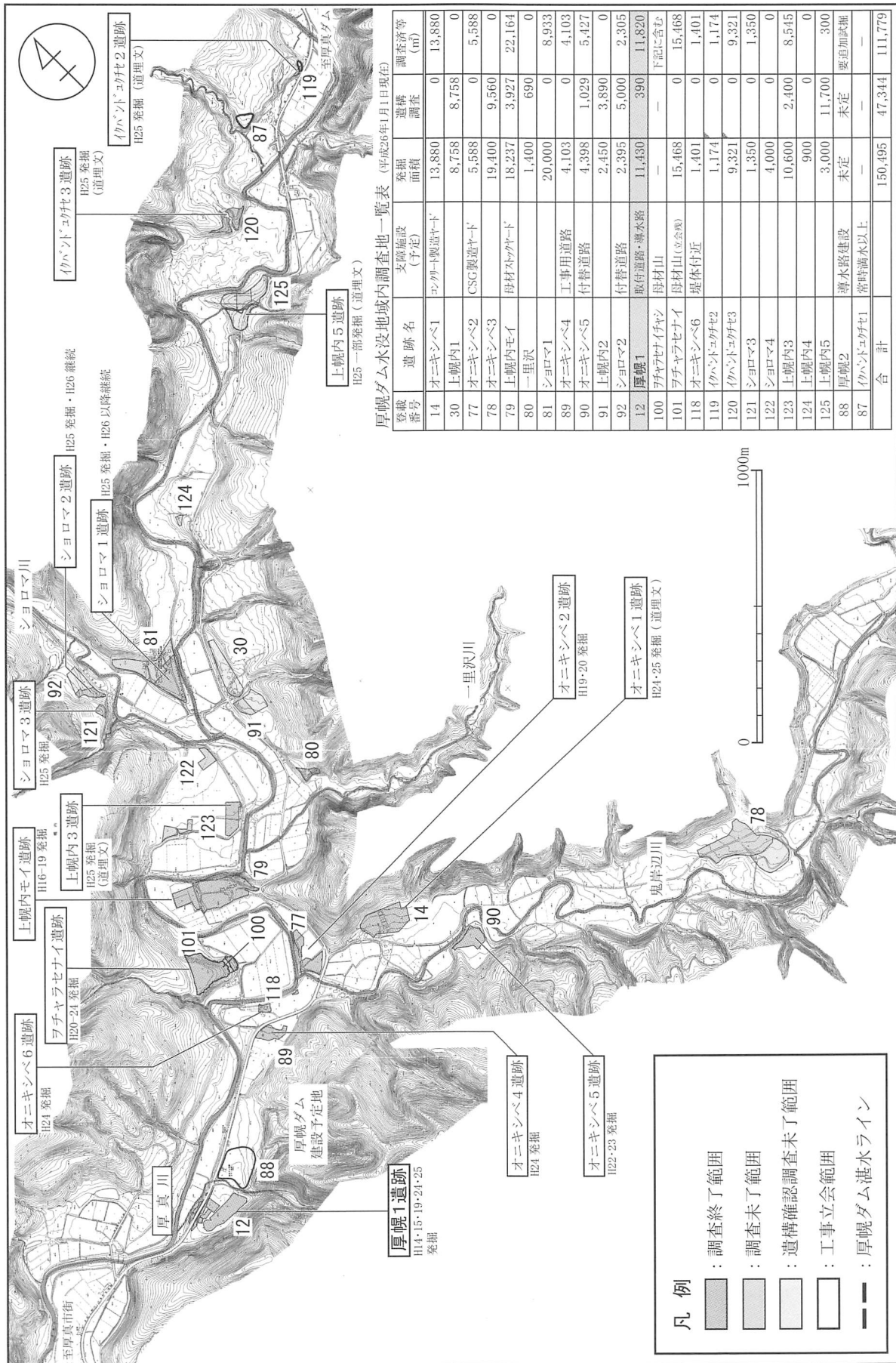


図 I-2 厚幌ダム建設事業関連埋蔵文化財包蔵地位置図

18日付 室土厚幌 158号 要試掘調査：平成15年12月17日付 教文第4779号 要発掘調査：平成13年7月18日付 教文第4265号)。このことから、平成14・15年度の2ヶ年で9,360㎡の発掘調査を行った(厚真町教育委員会)。

また、北海道開発局室蘭開発建設部が事業者となる厚幌道水路建設工事事業で、道教委により平成17年4月の所在確認で要試掘調査の回答(平成17年6月13日付 教文第78号)がなされる。その後、道道切替との関係で設計路線の変更が生じ1回目の協議変更(平成18年11月24日付 室建企第86号)で道教委の試掘調査が行われ(平成19年5月)、要発掘調査が回答された(平成19年6月8日付 教文第1082号)。しかし、施工関係により2回目の協議変更(平成19年11月29日付 室建企第95号)が生じ、平成20年度の調査区の確定については道道切替工事による素掘り側溝の法面から遺物を採取出来なかったこと、平成14・15年度の遺物分布と照合し、側溝より西側を「工事立会」とする道教委の回答がなされた(平成19年12月17日付 教文第3771号)。このことから平成20年度に1,098㎡(うち工事立会371㎡)の発掘調査を行った。

今回報告対象となった平成24年度の発掘調査範囲は、室蘭建設管理部が事業者となる厚幌ダム建設事業に係わる一般道道上幌内早来停車場線取付道路工事の所在確認から始まり、平成23年11月の試掘調査結果、河岸段丘縁辺部を含む約2,100㎡の要発掘回答がなされた(平成24年1月13日付教文第2885号)。この他、一般道道上幌内早来停車場線から発掘現場への仮設進入路敷設のため道道の側溝にコルゲート管を埋設することから、ダム事務所を通じて室蘭建設管理部苫小牧出張所から道路工事(維持)施工承認の申請と占用許可を頂いている。

第3節 調査の方法

1. 調査区の設定

厚幌1遺跡の発掘調査範囲は、一般道道上幌内早来停車場線を挟んで取付道路工事で掘削される道教委の試掘調査によって回答された「要発掘範囲」をもとに、発掘境界杭設定を有限会社幅田測量に委託した。厚幌1遺跡は平成14・15・20年度に発掘調査を行っており、初年度のグリッド設定では日本測地系公共座標に従い、本遺跡の立地する河岸段丘面全体を網羅する形で設定されている。基点は北東コーナーにA-0杭として図上で設定している。平成20年度からは基点を同一としながらも、世界測地系公共座標(世界測地系 平成15年十勝沖地震対応)に変換しているため基点杭(A-0杭)に端数が生じている(A-0杭：X=-137230.0 Y=-212830.0)。このためグリッド設定は250m×150mで設定されており、5m四方のメッシュで区分し、南北のX軸をA・B・C・・・のアルファベット列で、東西のY軸ラインを1・2・3・・・のアラビア数字列とした。各グリッドの呼称も北東コーナーの杭とし、A-1区、A-2区・・・とした。現地での調査区設定方法は、平成24年度に調査区境界杭12点、グリッド設定基準杭9点の設置を(有)幅田測量に委託し、測量技能作業員が光波式トータルステーションを用いて調査区全面のグリッド杭を設置した(図I-4)。絶対高は、(有)幅田測量によって設定したTA1、TA2杭より各グリッド杭へ移設した。絶対高算出の基準杭は、平成20年度調査区内にある1級基準点(国土地理院 No.H-17-1)から導いている。

2. 包含層及び遺構の調査方法

調査区内はカラマツの植林及び一部林地となっており、切株を残した伐採及び搬出を教育委員会で行った。その後、調査の準備段階として、調査員立会のもとバックホーにより表土や耕作土、盛土とTa-b

火山灰の除去を行った。火山灰除去においては排土置き場の関係で A1 地区（40 ラインより西側）、B 地区（26 ラインより西側）、C 地区を先行して調査した。残りの調査区は V 層調査終了地点を排土捨て場として利用できる状態になってから同様の調査を行っている。なお、B2 地区の 26 ラインから東側は重機が入れない狭小な範囲のため表土除去から全て人力で行っている。Ⅲ層の調査は火山灰を 3cm 程度残し、ジョレンを用いてⅢ層上面まで火山灰除去、精査を行っている。同時にチェーンソーを用いて樹根の枝根除去も行っている。作業終了後にⅢ層上面で遺跡近景撮影と調査補助員、技能作業員で地形測量委託のための単点記録（50cm メッシュ）、調査区、攪乱範囲を記録している。包含層は調査区西側から 25%でⅢa～Ⅲb 層にかけて移植で掘り下げ、遺物の濃淡を把握しながら調査を進めている。この時、A1 地区段丘縁辺部のⅢ層上面で Ta-b 火山灰が落ち窪む道跡を検出しているため、範囲内はトレンチや平面図の記録を別途行っている。25%調査で遺物が少ないもしくは出土していない範囲はジョレンによってⅢc 層まで掘り下げ、A1 地区以外は 25%で調査終了している。Ⅲ層調査終了後、Ⅲ層の残り と Ta-c 火山灰をバックホーで除去し、再度グリッド杭の打設を行った。なお、グリッド呼称は同一であるが Z 座標が異なるため杭名の末尾に「B」を記入して区別している。V 層包含層はⅢ層同様西側から 25%調査を行い、5cm ごとの層厚で掘り下げ遺構、遺物確認をしている。V 層は B1 地区で遺構、遺物共に濃い分布を示していたので、1 回目の掘り下げ後面的な調査に切り替えている。調査区南北断面図については B1 地区が 48 ライン、A1 地区が 44 ラインで、東西断面は南側壁面を利用して記録している。なお、地滑り堆積については開析方向に合わせた断面 C-D ラインで記録している。フローテーションについて今回は対象土壌がないため採取していないが、微細遺物が認められる遺構（VFCB-10、VPB-05、06）については土壌ごと採取し、後にウォーターセパレーションで遺物回収を行っている。記録図化については光波式トータルステーションを用いて平面形およびエレベーションを記録し、堆積状態については調査担当者が分層と土層注記を行い、測量技能作業員が堆積図作成の実測を行った。各調査経過は 35mm 一眼レフカメラでデジタル画像とモノクロで写真記録撮影を行った。

表 I-4 グリッド設定関係杭座標値一覧表

基準点成果

杭名	X 座標	Y 座標	Z 座標
TA1	-137282.817	-21486.730	54.335
TA2	-137262.703	-21382.495	57.299
H17-A1-1	-137283.276	-21424.508	56.180

グリッド杭成果

杭名	X 座標	Y 座標	Z 座標
AP1-13 (J-33)	-137275.000	-21395.000	57.163
AP1-14 (J-36)	-137275.000	-21410.000	56.631
AP1-15 (K-36)	-137280.000	-21410.000	56.693
AP1-16 (M-48)	-137290.000	-21470.000	54.163
AP1-17 (O-48)	-137300.000	-21470.000	55.429
AP1-18 (O-51)	-137300.000	-21485.000	54.525
AP1-19 (I-47)	-137270.000	-21465.000	54.399
AP1-20 (I-44)	-137270.000	-21450.000	54.677
AP1-21 (G-44)	-137260.000	-21450.000	54.758

※ 世界測地系公共座標 (平成15年度 十勝沖地震補正值済)

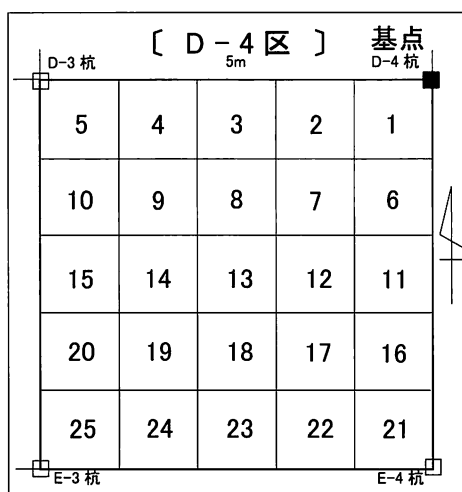


図 I-3 グリッド模式図

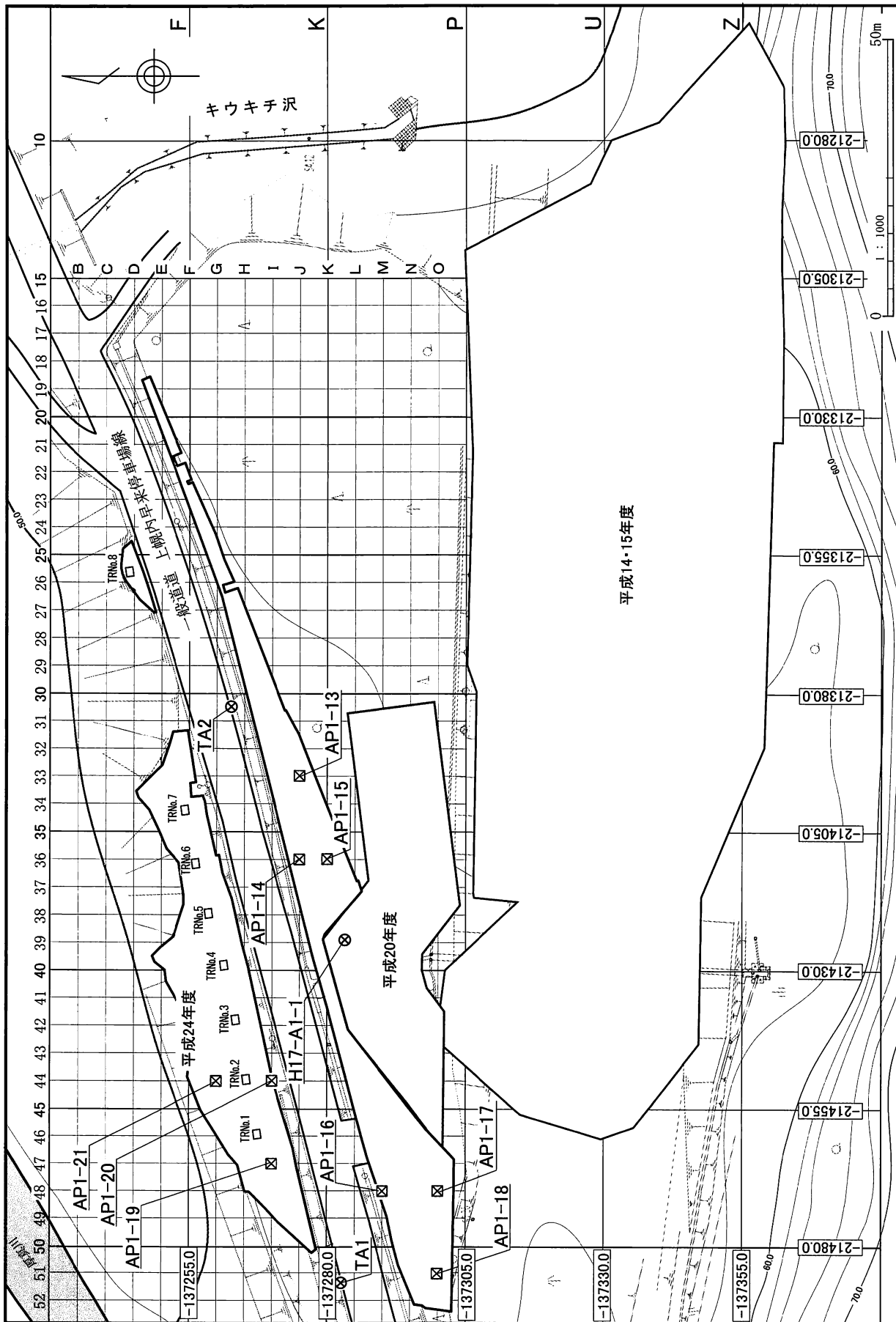


図 I-4 グリッド設定図及び試掘杭位置図



図 I-5 周辺の地形及びグリッド配置図

遺物の取り上げについては調査員による層位確認と段丘堆積物中の自然礫とを認定区分したうえで、光波式トータルステーションによるXYZ座標（公共座標世界測地系）をデジタル記録している。この時、手簿（日付・グリッド・層位・遺物名等）の記載も行い、データ入力ミスの補完を行っている。なお、調査終了後の現地については事業者と合意の下、30cm填圧で0.9m埋め戻している。

3. 整理作業

出土遺物の整理、分類、データ入力、遺構図の第2原図を作成し、遺物はトレース、写真撮影、遺構図はトレースと配置を行い編集と校正の報告業務を行った。

一次整理は、一部現場段階から水洗、注記作業を行い、整理業務に入ってから各担当の調査員が調査区遺構名や層位、種別、細分類、分類等の台帳確認作業を行った。

二次整理は、各種遺物の接合・復元・実測・拓本等の作業を行い、復元土器の一部や剥片石器の実測は(株)トラスト技研へ委託した。また、礫石器実測用写真撮影を㈱シン技術コンサルへ委託した。

実測遺構図等の第二原図の作成やトレース作業・編集は、パソコンWindows(0sAdobeIllustratorCS)で行った。遺物の写真撮影は(有)写真事務所クリークの佐藤雅彦氏へ委託し、撮影データをパソコン(0s Windows Adobe Photoshop CS)で切り抜きやレイアウトを行っている。報告書掲載図や写真図版などの版組み、一覧表の編集も上記のソフトで行い、本文のWord文書と合わせて印刷所へデジタル入稿した。

遺物の保管は、報告書掲載のものは図版毎に行い、それ以外のものは、分類及び調査区毎にコンテナに収納し町内の廃校舎に収蔵している。(乾)

第4節 遺物の分類

1. 土器

縄文時代早期から擦文文化期までの土器をローマ数字に群別し、アルファベットで型式、時期等の細分をした。

第I群土器 縄文時代早期に属する土器。

当するもの。

本遺跡では出土していない。

B類 中期後半から末葉の土器群。

第II群土器 縄文時代前期に属する土器。

B1類 萩ヶ岡1・2式、天神山式に相当するもの。

A類 縄文丸底・尖底時群

B2類 柏木川式に相当するもの。

A1類 美沢3式、網文式に相当するもの

B3類 a 北筒式に相当するもの。

A2類 トビノ式、静内中野式に相当するもの

B3類 b 煉瓦台式に相当するもの。

A2類 a 胎土に滑石を含むもの

第IV群土器 縄文時代後期に属する土器。

A2類 b 胎土に繊維を多量に含み厚手でもろい

A類 後期初頭の土器群。

B類 円筒下層式系土器群

A1類 a 古手の余市式土器。円形刺突文の有無に関わらず、貼付帯や地文縄文が多段の羽状構成の土器。

本遺跡では出土していない。

第III群土器 縄文時代中期に属する土器。

A類 中期前半の円筒上層式系土器群。

A1類 b IV群A1類a土器に併存する沈線文系の土器。非在地系。

A1類 円筒上層a式またはb式に相当するもの。

A2類 円筒上層c式またはd式、厚真1式に相

A1類 c 天祐寺式に相当するもの。IV群A1類a

土器に併存する。非在地系。

- A1 類 d 北筒Ⅲ式に相当するもの。肥厚帯が顕著で円形刺突文を有する土器。
- A2 類 新しい段階の余市式。古手のタプロコ式。階段状の器表面や斜め下方からの刺突文や縄端圧痕文が施される土器。
- B 類 後期前葉の土器群。
- B1 類 新手のタプロコ式。縦位の棒状貼付帯縄線文または地文縄文のみが施されているもの。

- B2 類 手稲砂山式に相当するもの。
- B3 類 入江式、大津 7 群、白坂 3 式土器。
- C 類 後期中葉の土器群。
- 本遺跡では出土していない。

第 V 群 縄文時代晩期に属する土器群。

本遺跡では出土していない。

第 VI 群土器 続縄文文化期に属する土器群。

- A 類 続縄文前半の土器に相当するもの。

2. 剥片石器

ポイント類

長軸 4 cm を境に石鏃と石槍・石銛とを区分した。

A 「石鏃」

- 1 細身で薄手のもの。
- 2 無茎のもの。
- 3 明瞭な茎部をもつもの。
- 4 不明瞭な茎部を持つもの。
- 5 片岩製で周縁のみに調整加工を施すもの。
続縄文時代に特徴的なもの。

B 「石槍」・「石銛」

- 1 明瞭な茎部をもつもの。
a 茎部端が平ら。b 茎部端が尖る。c 抉りがある。
- 2 不明瞭な茎部をもつもの。
a 茎部端が平ら。b 茎部端が尖る。c 抉りがある。

C 欠損品・未製品

石 錐

- A 剥片の一部に機能部を作出したもの。
- B 柄と機能部の区別が明瞭なもの。
- C 柄と機能部の区別が不明瞭で幅広なもの。
- D 柄と機能部の区別が不明瞭で棒状のもの。
- E 他石器からの転用品と思われるもの。

ナイフ・スクレイパー類

縁辺に刃部が作出されたもののうち、素材の

1 辺に対し半分以上の範囲で刃部が形成されているもの。

A 「つまみ付きナイフ」

- 1 素材の周縁にのみ加工を施したもの。

- 2 素材の片面全体に加工を施したもの。

- 3 素材の両面全体に加工を施したもの。

B 素材端部に刃部が形成されているもの。

- 1 「ラウンド・スクレイパー」

- 2 「エンド・スクレイパー」

C 素材端部に刃部が形成されていないもの。

- 1 「サイド・スクレイパー」

- a 原石・転石面無。 b 原石・転石面有。

- 2 「コンケイブ・スクレイパー」

- a 原石・転石面無。 b 原石・転石面有。

- 3 「抉入石器」

D 続縄文時代に伴う「ナイフ状石器」

E 欠損品

- a 原石・転石面無。 b 原石・転石面有。

RF・UF

縁辺部に刃部が作出されたもののうち、素材の 1 辺に対し半分未満の連続的剥離のあるものを RF、使用によると思われる微細剥離のあるものを UF として扱っている。

ピース・エスキーユ

石 核

3. 礫石器

石 斧

A 磨製石斧

撥形1(薄手a 厚手b)

短冊形2(薄手a 厚手b)

円形もしくは不整形3(薄手a 厚手b)

B 未製品1:剥離敲打により完成品に近い大きさまで整形されているもの。

C 未製品2:礫皮を残すが、擦り切り・剥離・敲打調整により素材礫形状が不明瞭なもの。

D 未製品3:剥離・敲打調整が部分的に施され素材礫の形状を大きく残すもの。

たたき石

敲打痕が面状に形成されるもので、素材礫の形状で細分類を行った。

I 平面形が縦長のもの。

A 扁平のもの。

- 1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3 1・2を並存するもの。

B 棒状または角柱状のもの。

- 1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3 1・2が並存するもの。

II 平面形が方形～不整形で幅広のもの。

A 扁平のもの。

- 1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3 1・2を並存するもの。

B 厚さがあるもの。

- 1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3 1・2が並存するもの。

III 平面形が円～楕円形のもの。

A 扁平のもの。

B 球形または棒状のもの。

IV 破片のため上記に分類不可のもの。

V 礫片を素材としているもの。

すり石

A 断面三角形の礫の稜に擦り面のあるもの。

B 断面楕円形の礫の側縁に擦り面のあるもの。

C 扁平礫の側縁にすり面があるもの。

D 北海道式石冠

E その他

砥 石

滑沢面のある礫

素材礫の形状を変えず、平滑な面を有するもの。線条痕はほとんど観察できない。

線条痕のある礫

肉眼観察において、明瞭な線条痕があるもの。

石皿・台石

便宜的に素材礫の重量が900g以上で、素材礫の平坦面に擦痕・敲打痕があるもの。

滑沢面と敲打痕のある大型礫

- I 表裏面にそれぞれが単独で認められるもの。
- II 一面に両方の痕跡が認められるもの。
- III 素材礫の形状が変形する研磨面を有するもの。

加工痕のある礫

加工目的の剥離があるもので、剥離加圧(打点)部分に潰打面が形成されず、側面観が稜線状となるもの。

第5節 調査結果の概要

1. アイヌ文化期から続縄文文化期

樽前bテフラ（1667年降下）と樽前cテフラ（約2500年前降下）の間に狹在する黒色腐植土層としているⅢ層からは続縄文時代の土器集中1ヶ所、擦文～アイヌ文化期の礫集中1ヶ所、アイヌ文化期の道跡1条を検出している。Ⅲ層の黒色腐植土については調査区B1、B2、Cは全面樽前bテフラに覆われている状態であり保存状態は良好であった。調査区A1、A2については現道の法面やA2地区の大部分が後世の攪乱を受けているため保存状態は悪く、東西に延びる道跡についても東側は不明瞭である。

2. 縄文時代

樽前cテフラ下位の黒色腐植土層であるV層からは縄文時代前期前半、中期中葉、後期初頭の土器が出土している。先述したように調査区は道道早来停車場線を挟んで南北A・B・Cの3ブロックに分かれている。調査区A・Cは厚真川左岸の河岸段丘上約54.5mの平坦部であるが、縄文時代の遺構はTピット3基を確認したのみで遺物は415点と段丘縁辺部についてはあまり利用されていなかったことがわかる。調査区Bでは過年度において住居跡（3軒）やTピット等の遺構が多数検出されていることから、主体となる地点は段丘縁辺よりやや山側であり、特に調査区B1は遺構、遺物が集中して出土している。遺構はTピット16基、土坑36基、焼土1ヶ所、土器集中3ヶ所、礫集中1ヶ所、フレイクチップ集中1ヶ所を確認している。時期については出土土器から縄文時代前期前葉・中期中葉・後期初頭が出土しているが主体となるのは後期初頭の余市式土器期である。前期の土器については集中があるものの、文様構成や器形がわかるまで接合が及ばず小破片の掲載になっているが、個体数は8点、集中の土器片の残片は合計で658.3gあり、残存する口縁部径や破片数からも比較的大型の深鉢であった可能性が考えられる。

また、特筆する点として、平成14・15年度から続く地滑り地形の縁辺部を確認している。地滑り

堆積物は樽前cテフラ、Va層を被覆しており、Vb層上～中位にかけて南東方向からマウンド状にせり出している。この地滑り堆積については次節の環境及び地形で詳細を記すが、この地滑り堆積物直下に余市式の土器集中（VPB-05）が出土しており、地滑りが余市式土器の直後に発生したことが明らかとなり、厚幌ダム周辺のイベントを考慮するうえで貴重な出土例となっている。

表 I-5 厚幌1遺跡 概要一覧表

項目	Ⅲ層	V層
	アイヌ文化期～ 続縄文文化期	縄文時代
発掘調査面積(m ²)	2,070	
道跡	1	-
土坑	-	36
焼土	-	1
Tピット	-	16
礫集中	1	1
土器集中	1	3
フレイク・チップ集中	-	1
遺物総点数	378	7,196

表 I-6 厚幌1遺跡 出土遺物一覧表

層位	細分類						計
	土器	礫石器	剥片石器	石製品	礫	剥片類	
Ⅲ層	194	-	1	-	183	-	378
V層	2,376	183	159	1	3,117	1,360	7,196
合計	2,570	183	160	1	3,300	1,360	7,574

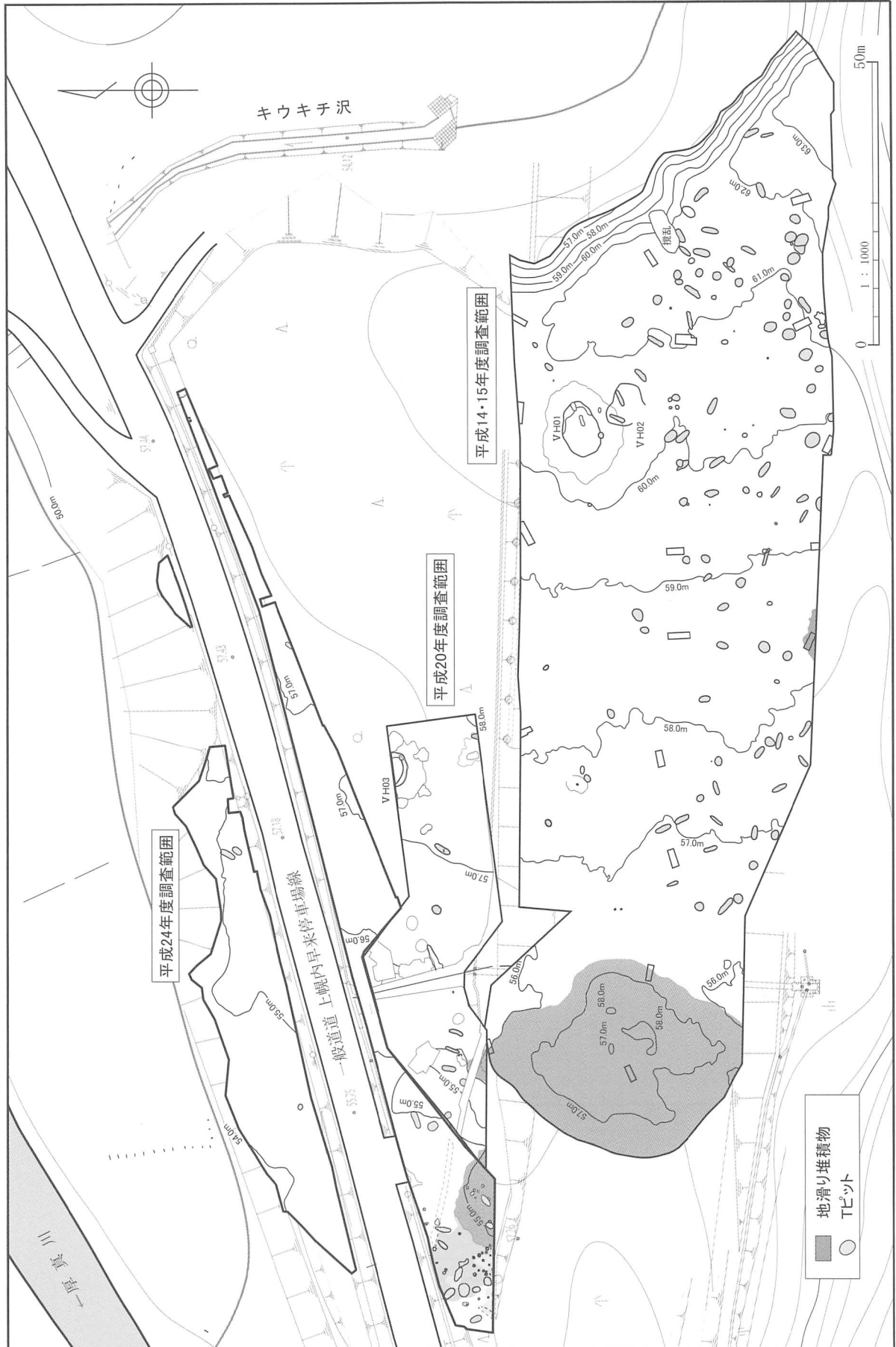


図 I-6 年度別調査範囲及びV層遺構分布図

第6節 遺跡の位置と周辺的环境

1. 厚真町の概要

A 地理的環境

厚真町は、石狩低地帯南部の東縁、北海道胆振支庁の東部に位置し、夕張山地南部から太平洋に注ぐ二級河川厚真川水系に水田地帯が広がる、人口 4,777 人（平成 24 年 2 月末日現在）の農業の町である。町域の総面積は 404.56 千㎡で、流路 52.3km の二級河川厚真川流域に広がり南北 32.5km、東西 17.3km と細長く、南部は約 6.5km にわたって太平洋に面し、勇払平野の東端に位置している。北海道の空の玄関口である新千歳空港から車で 35 分、海上物流の拠点である苫小牧港からは 40 分と現代社会において利便性に恵まれた位置でもある。町域を縦貫する厚真川は源流部から河口までの 1 河川流域で厚真町域のみを流下し、全国において 1 河川流域を有する自治体は数少ない。行政区域の北部は夕張市や由仁町と接し、夕張山地南部の標高 200～600m の山地が続き、総面積の約 70% を山林が占める。東は夕張山地から続く低い山地を挟んで、むかわ町と接し、北西は標高 100 m 前後の山地性丘陵を挟んで安平町、西は厚真町域を含む苫小牧東部工業地帯（以下、苫東地区）内で苫小牧市と接している。厚真の語源は 3 説ほどあるが、最も有力な説として「アットマム」（at-to-mam 「向こうの湿地帯」）で、南部に広がる湿地帯に付けられたものが転訛したという（厚真村 1956）。

町内は、大きく 4 つの地区に分かれ、厚真川沿いに下流域の浜厚真・上厚真地区、中流域の厚真市街地周辺、中流から上流域の幌内地区、むかわ町と接する入鹿別川流域の鹿沼地区がある。ここでは厚真川流域を中心に概略を述べる。

南部は砂浜が続き、明治期以前より地引網での鰯漁が盛んであったが、現在では、苫小牧沿岸にかけてホッキ貝（ウバガイ）の全国一の漁場となっている。かつては標高 10m 前後の砂丘列が発達し、背後には勇払原野の湿地帯が広がっていたが、現在は苫東地区の一部で、苫小牧東港や道内最大の火力発電所、石油備蓄タンク群等の工業用地となっている。また国道や高規格道路、鉄道があり、札幌圏から日高方面への主要幹線路ともなっている。地形的には、苫東地区の静川・源武台地と同じ様相を示し、樹枝状に開折された標高 10～20m 前後の支笏火山・樽前山の火山灰で構成される低平な台地と縄文海進期の海跡湖群、湿地が見られる。特に厚真川左岸から入鹿別川右岸にかけての厚和地区は静川台地と全く同じ地形・地質様相を呈している（仮称厚和台地・鯉沼台地）。中部には厚真町の中心市街があり、鶴川、平取・穂別、早来、浜厚真方面への道道交差点に官公署や住宅地が形成されている。かつては、町内の石油資源や林産資源、農産物の集散地として発展していた。地形的には厚真川本流と比較的大きな支流である知決辺川、ウクル川などの合流点に形成された平野部に位置し、夕張山地系と馬追山地南端部の山地性丘陵に挟まれた地域となる。中部以北では、厚真川は頗美宇川との合流点付近において流路方向を変え、左岸には河岸段丘が発達する。北部の幌内地区は、厚真川流域沿いの沖積地の最奥部で、本流とシュルク川、幌内川の 3 河川の合流点でもある。この地区は上流域の山間部より産出される豊富な林産資源の集積地として発展し、昭和 5 年から 24 年まで早来駅とを結ぶガソリン機関車軌道が敷設されていた。これより上流域は、新第三紀の堆積岩を基盤とする山地が続く（松野・石田 1960）。標高 400m 以上の頂部は少ないが、小河川の浸食により比較的急峻な山稜を呈している。厚真川は夕張市、由仁町との 1 市 2 町の境界線付近、標高 500m 付近の夕張山地南域に源流部がある。

B 歴史的環境

(1) 埋蔵文化財包蔵地の概要

厚真町内には平成24年1月現在で136ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、後期旧石器時代から近世アイヌ文化期に至るまでである(図I-5、表I-4~6)。遺跡の分布傾向として、開発行為の多寡に左右されるが、南部の苫東地区や厚真川下流域左岸から入鹿別川流域右岸にかけての仮称厚和台地や仮称鯉沼台地、厚真川中流域の支流河川沿い、北部の高丘地区及び幌内地区にやや集中する傾向がある。遺跡の立地は、南部において湿地と隣接する台地縁辺部や湧水地付近、中部では厚真川沿いや小河川との合流点付近の河岸段丘縁辺部に多い。北部の山間部では、頗美宇(はびう)川流域の高丘地区や厚幌ダム水没地域内に多く分布する。これらは安平町安平地区や夕張市滝之上地区、むかわ町穂別・豊田地区へ抜ける山越えのルート上の遺跡と考えられる。

時期的には、町内最古の遺跡として上幌内モイ遺跡で札滑型細石刃核を伴う石器集中が1ヶ所検出されており、AMS法炭素年代測定の結果、補正年代3点の平均で14,591.69±60yrB.P.が得られている(厚真町教育委員会2006a)。縄文時代の最も古いものでは豊沢4遺跡の試掘調査で早期前半の物見台系貝殻文土器片1点が出土し、時期が下って浜厚真3遺跡で東釧路Ⅱ式土器がややまとまって出土している(北海道埋蔵文化財センター2003)。遺跡数の増加や規模の拡大は縄文時代前期前半の縄文尖底土器群の時期と考えられ、多量の被熱礫や哺乳網の焼骨片が出土する遺跡が厚真町南部から北部に至るまで多数確認されている。これ以降、漸移的に遺跡数が増加し、中期末葉から後期初頭の北筒・余市式期の遺跡数でピークを迎える。縄文時代後期中葉から後葉にかけて遺跡数が激減し、晩期前葉以降、続縄文文化期に再び増加し、擦文文化期前期は遺跡数が再び減少する。この様な各時期における遺跡数の偏りは苫小牧市の傾向と概ね一致している。苫小牧市との差異として擦文文化期中期から中世アイヌ文化期にかけては遺跡数が増加する傾向がある。

(2) 町内における埋蔵文化財調査の概要

町内における埋蔵文化財の調査・研究は、最初の記録として、大正5(1916)年に現在の朝日遺跡から出土した縄文土器を教材として、学校に保管する許可書が発行されたことである(厚真村郷土研究会1956)。遺物の多くは縄文晩期初頭の土器片と思われ、数点の土偶片も出土している(厚真村郷土研究会1956、亀井1956、古井1961、北海道大学附属図書館HP 北方資料データベース)。以後、厚真町での埋蔵文化財に係る流れは大きく3期に分けることが可能である。

a. 厚真村郷土史研究会・埋蔵文化財の地域自主的研究(昭和20年代後半から40年代中頃)

元厚真村長で名誉町民の亀井喜久太郎氏の熱心な働きかけで昭和27年に八幡一郎氏、30年に大場利夫氏等が来村し、町内の遺跡・遺物を実見している。また、亀井氏は昭和28年に厚真村郷土研究会を発足させ、遺物の収集や会報『郷土研究』で遺物の紹介を行い、昭和31年には『厚真村古代史』を刊行している(厚真村郷土研究会1956)。現在、埋蔵文化財保護の基礎資料である埋蔵文化財包蔵地カードの「調査・文献」には「昭和31年7月 厚真村郷土研究会『厚真村古代史』」や「昭和47年12月 厚真町郷土史研究会 踏査」の記載で始まるものが32遺跡もあり、厚真町の文化財保護・研究に大きな功績を残し、礎となっている。町内で初めての組織的な発掘調査は、昭和37年に厚真村郷土史研究会によって朝日遺跡と共和遺跡で行われた。調査に関する詳細は不明だが、縄文時代晩期初頭の土器片を中心とした出土遺物がコンテナにして5箱分、厚真町教育委員会に保管されている。また、昭和34年に宇隆地区公民館建設工事現場からの遺物出土の連絡を受け、道内

で初めての出土となる愛知県常滑産と推定される 12 世紀中葉の広口壺を回収している。当初は、須恵器と判断されていたが、平成 23 年に常滑市民俗資料館 中野晴久氏によって確認された。

b. 苫小牧市埋蔵文化財調査センター・大規模な行政発掘「苫東調査」(昭和 48 年から昭和 54 年)

昭和 48 年から苫小牧市埋蔵文化財調査センターによる苫東地区の試掘・発掘調査が開始され、昭和 59 年までの 12 年間で厚真町域にかかるもので新規登録 14 遺跡、調査着手 11 遺跡があり、縄文時代早期～擦文文化期までの資料が得られている。調査成果として、昭和 51 年調査の厚真 1 遺跡(苫小牧市教育委員会 1986)では、この地域で初めての T ピットが確認され、縄文時代中期中葉の「厚真 1 式土器」(赤石 1999)の標識遺跡でもある。厚真 7 遺跡では縄文時代中期末葉と後期前葉の住居跡 8 軒の検出と、石狩川中流域で数多く出土する「丸のみ形石斧」も出土している(苫小牧市教育委員会 1987)。また、共和遺跡では苫東地区内で唯一の擦文文化期前期の竪穴式住居跡 2 軒が調査されている(苫小牧市教育委員会 1987)。これらの成果は苫小牧市教育委員会により『苫小牧東部工業地帯の遺跡群』として報告書が刊行されている(苫小牧市教育委員会 1986・1987・1990・1992)。整理・報告後の出土遺物等は平成 13 年度に町教委へ返却・保管されている。

なお、厚真町域における町教委による「埋蔵文化財包蔵地資料整備の一般分布調査」は、昭和 54 年 9 月行われ、52 遺跡の包蔵地カードが作成されている。

c. 開発に伴う調査の増加と厚幌ダム・厚幌導水路事業の開始(平成 10 年以降)

近年は火山灰採取などの開発に伴う試掘調査や工事立会調査が増加し、町教委による豊川 1 遺跡(厚真町教育委員会 2001)、鯉沼 2 遺跡(厚真町教育委員会 2001)、鯉沼 3 遺跡(厚真町教育委員会 2005・2006b・2008)などの調査が行われた。高規格道路日高自動車道の建設に伴う(財)北海道埋蔵文化財センターによる浜厚真 3 遺跡の調査では、187 基の T ピットが検出されている(北海道埋蔵文化財センター 2003)。これらの調査結果では、縄文時代中期後葉以前に T ピットが数多く構築されていることが分かり、周囲には比較的規模の大きい集落跡の存在が想定できる。

平成 12 年には北海道室蘭土木現業所より厚幌ダム建設事業に係る埋蔵文化財保護の事前協議書が提出され所在踏査や試掘調査が開始された。発掘調査は平成 14 年から町教委により継続的に行われ、厚幌 1 遺跡(厚真町教育委員会 2004・本書)、上幌内モイ遺跡(厚真町教育委員会 2006a・2007・2009)、オニキシベ 5 遺跡(厚真町教育委員会 2013b)、ヲチャラセナイ遺跡・ヲチャラセナイチャシ跡(厚真町教育委員会 2013a)、オニキシベ 4 遺跡(厚真町教育委員会 印刷中)、オニキシベ 6 遺跡(厚真町教育委員会 印刷中)、オニキシベ 1 遺跡(北海道埋蔵文化財センター 整理中)の調査を行い、平成 25 年度まで 12 年間の調査終了面積は約 111,779 m²である。

平成 15 年には総延長 24.5km に及ぶ厚幌導水路建設事業の事前協議書が提出され、所在確認踏査や試掘調査が行われている。試掘調査等は未了の箇所があるものの、現在 11 遺跡での要発掘・工事立会調査地点が確認され、平成 19 年度には厚真川中流域富里地区のニタツナイ遺跡、20 年度は厚幌 1 遺跡と幌内 7 遺跡(厚真町教育委員会 2010a)、21 年度は幌内 5 遺跡と富里 2 遺跡の発掘調査を行った(厚真町教育委員会 2010b)。これらの大規模開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成 27 年度まで継続される予定であったが、平成 22 年度に厚幌ダム事業の再検証が行われたため、厚幌導水路に係る発掘事業は一時中止となり当初計画からのずれ込みが危惧されている。

これらの厚幌ダム、導水路事業以外にも平成 22・23 年度には厚真川中流域において道道上幌内早来停車場線改良事業に伴うライカルマイ遺跡や町宅地造成事業での豊沢 6 遺跡、民間業者の火山灰

採取に伴う東和3遺跡の発掘調査が実施された。近年の傾向として全町的に埋蔵文化財の発掘調査が進みつつあり、先史時代における厚真川流域の様相が解明されつつある。

(3) 歴史時代

厚真周辺の記録として、1643年に編纂された北海道最古の文書とされる『新羅之記録』(松前1643)によると、「松前以東は厩川西は奥依地迄人間往古する事、右大将頼朝卿進発して奥州の泰衡を追討し御ひし節、糠部津軽より人多く此国に逃げ渡って居住す。」とあり12世紀末葉には東北北部の和人が厚真周辺域まで進出していた可能性がある。厚真町とほぼ特定できる最初の記述は1692年に書かれた『蝦夷記』(野澤1692)で、シャクシャインの戦い(1669年)に関連し「於多久見具印住處阿津摩ニテ討取ル」とある。厚真町中部に位置する桜丘チャシ跡との関連性が想定されていたが、平成21年度のトレンチ調査で樽前bテフラと生活硬化面との間に1~2cm程度黒色土が堆積し、より古い中世アイヌ文化期のチャシ跡であることが判明している。この時期の遺跡は厚真川上中流域のダムや導水路建設関連の発掘調査で多数の遺跡が確認されており、今後も増加するものと思われる。

これ以降の記録として、1700年の『松前家臣支配所持名前帳』には鳥屋支配所として「志古津ノ阿津満」と記され、2ヶ所の鷹打場が設けられている。シャクシャインの戦いに係わる『津軽一統志』(相坂兵右衛門1731)の中で、「あつまへつ〜川有、戸田義兵衛 商場」と記されているが、産物や周辺のコタンについてなどの記述は見られない。1739年頃に成立した『蝦夷商賣聞書』には義経伝説を交えた記述の中に「右之山奥ニアツマト申所ニ城跡ト申而松柏之古木沢山ニ繁リテアリ〜」や1785年の「三国通覧図説蝦夷国全図」に「アヅマ」と記載があり、注記に「鬼ヒンノ出処」と記されている(林子平1785)。しかし、寛政から文化年間(18世紀末~19世紀初)の『東蝦夷地道中記』(1791)や『蝦夷記行』(谷元旦1799)、『拾遺北日本地図全図蝦夷地出産交通略図』などの紀行文や古地図では僅かな記述にすぎず、1800年に八王子千人同心等、数名の和人が浜厚真に移り住むが定住することはない。近世アツマ場所の産物として干鮭や椎茸、シナ縄、鹿皮が挙げられているが詳述はなく、以降の紀行文や測量日誌にも交通路であった勇払と鶴川間の厚真川河口周辺の簡単な記述に留まっている。なお本町の和人定住者としては明治3(1870)年に新潟県人の青木与八が厚真川河口に渡船場を開業したことが始めとされている(厚真村1956)。

内陸部までの詳述は、松浦武四郎による『戊午安都麻日誌』(松浦・吉田1962、松浦・秋葉他1985)で、1857(安政5)年6月に苫小牧市勇払から厚真川河口を経てトンニカ(現富里)にて2泊している。蝦夷地探検の6回目で、町内には6ヶ所のコタンが記録されている。この中で比較的規模の大きいコタンでは、粟、稗、隠元、蕪などの畑作が盛んに行われているが、直前に襲った厚真川の洪水によって畑地のほとんどが冠水したことも記され、かつてより氾濫の多い河川であったことが伺える。宿泊したトンニカコタンのイカシユ(乙名板蔵)の家中について「西同所の土人等とは大に違ひ、凡行器の三十も有、耳盥の七ツ八ツ、筐の式ツ計、蝦夷太刀の二十五六振も懸、また此余短刀の七八本も有るよし語りけるなり。」(松浦・秋葉他1985)とあり漆器や刀剣類の宝物が多く、その裕福さに驚いている。上流域に関しては聞き取りによる記述で、3穴の吊耳鉄鍋の残置伝承があるカニシユウ(現幌内・一里沢遺跡)も記述されている。苫小牧駒澤大学 蓑島栄紀氏は、これらの松浦武四郎の記録から古交通路について論じており、トンニカコタンの記述や上幌内モイ遺跡の搬入系遺物の出土量から鶴川水系や夕張水系へのルートが存在について述べている(蓑島2005)。

これらの記録以前のアイヌ文化期については、厚幌ダム建設に係わる発掘調査で確認された厚幌

1 遺跡（厚真町教育委員会 2004）、上幌内モイ遺跡（厚真町教育委員会 2007a・2009a）、の他、試掘調査でも上幌内 2 遺跡、一里沢遺跡があり、厚幌導水路建設事業関連でのニタップナイ遺跡（厚真町教育委員会 2009b）や幌内 7 遺跡（厚真町教育委員会 2010a）、富里 2 遺跡（厚真町教育委員会 2010b）がある。その他、試掘調査で層位的確認がされた新町遺跡のほか、厚和 1 遺跡、幌内 5 遺跡では近世アイヌ墓が単独で発見されている。近年、発掘調査によってアイヌ文化期の遺跡が新たに発見されており、今後も資料の増加が期待される。

明治維新後、廃藩置県までは高知藩所管の時代があり、1873（明治 6）年以降に開拓使苫小牧出張所や勇払郡役所の所管となる。現在の厚真町が行政単位としての始まりは 1897（明治 30）年に苫小牧外 6 ヶ村から分離独立し、厚真村戸長役場が桜丘地区（現専厚寺境内）に設置されたことによる。内陸部の和人開拓は明治 10 年代からで、手掘りによる石油掘削も始められ、明治 21 年には開拓使から農事指導員が派遣され西老軽舞（現吉野）へ集住させられたアイヌ民族への勸農政策も実施されている。1892（明治 25）年には鉄道室蘭線が開通し、近隣である厚真の内陸部も開拓移住者が増加した。これは明治 19 年の国有未開地の開放で北海道開拓の促進を図る「北海道土地払下規則」が制定されたことによる。以後、開拓移住者の増加が続き現在の農業の町厚真の礎が確立されていく。

（乾）

2. 遺跡の位置と周辺的环境

A 自然地理的環境

厚幌 1 遺跡周辺は谷状地形となっていることから、遺跡の立地も限られており、東側を開析するキウキチ沢の対岸約 40m の位置にある厚幌 2 遺跡のみが登載されている。厚真川本流の対岸にも河岸段丘が発達しているが、埋蔵文化財包蔵地の有無は現在のところ確認されていない。厚幌 2 遺跡は平成 15 年に道道切替工事の調整池掘削土より遺物が回収されたことによって発見、登載された。平成 20 年度の厚幌導水路建設に係わる発掘調査で縄文時代後期初頭の余市式期の竪穴式住居跡や縄文前期前葉の縄文尖底土器と多量の被熱破砕礫が出土している。平成 25 年度以降にキウキチ沢付近の発掘調査を予定しており、小河川を挟んで対岸にある本遺跡との関係等に留意したい。

B 歴史的環境

和人による文字資料としての幌内地区の最初の記録は、先述の 1857（安政 5）年 6 月に厚真を訪れた松浦武四郎によるものである。しかし、武四郎は厚幌 1 遺跡周辺の厚真川上流域までの踏査は行っておらず、聞き取りによって上流域の沢の名前等を記述している。厚幌 1 遺跡東岸のキウキチ川は「ヘンケマカヲシ」に相当するものと思われる。なお、同じ厚真川左岸の下流に「マカヲシ」（「藪の臺の・群生している・所」の義 厚真村 1956）が記されており、現在のマッカウシ川に相当する。武四郎が訪れた幕末期には現在の幌内地区にはコタンが存在していなかったようで、いわゆる「フシココタン」の記録が残るのみである。厚真を離れるにあたり、厚真川左岸のシュルク川の分水嶺を越えて鶴川筋ニワン（現栄地区）へ抜けている。

幌内地区の市街地形成の始まりは 1895（明治 28）年に遡り 20 数戸が開拓入地している。畑作を中心に水田の開墾も行われた。明治 34 年には振老（現厚真町市街）・幌内間道路が開通し、1911（明治 44）年に室蘭本線早来駅からの馬車軌道が敷設されたことにより、周辺山間部から産出される豊富な林産資源の集積地として発展した。明治 30 年代には三井物産などの木材業者によってオニキシベ川やショロマ川流域に牧場が開かれ、澱粉工場や簡易教育所、国から割譲された地方林を管理する

幌内監護員駐在所も設置され、古くから林業が盛んな地域であった。大正10年の地形図(厚真町教育委員会2010a p23 図I-4)で厚幌1遺跡が立地する河岸段丘には家屋1軒が記されている。幌内地区の古老からの聞き取り調査では藤根キウキチ氏がここに開拓に入り、現在の河川名「キウキチ沢」と名付けられたとのことであった。なお、近現代の遺構として平成14・15年度の調査では表土層の耕作痕と約80mにわたって構築目的不明の柵列跡が確認されている。

3. 調査区内の地形と地質

A 段丘面全体の概要

調査区の基盤層は平成20年度の地形部分で触れているが、新第三紀の砂岩泥岩層の「振老層」でより表層の地質については「5万分の1地質図幅早来」で「第四紀更新世河岸段丘堆積層 tr」に区分されている(松野・石田)。厚真川流域の河岸段丘については、「上幌内モイ遺跡(1)」に報告(出穂 2006)されている。本遺跡では過年度も含め樽前 d1・d2 テフラ(VIII層 Ta-d 約8000年前降下)より下位の堆積層を確認していないため、厳密な河岸段丘形成時期の検証は不可能であるが、樽前 d テフラの堆積状態と現河床面との比高差から上幌内モイ遺跡の T₂面に相当すると思われる。調査区の微地形は樽前 b テフラ(II d 層 Ta-b 1667年降下)除去後の III 層上面における等高線図で平成20年度は4面に分けていたが、今回の調査では沢地形を追加した5面としている。この他に樽前 c テフラ(IV層 Ta-c 約2500年前降下)降下以前の地滑り堆積物も確認されており、表層地形形成に関連する堆積物も含めて記述する。

B 微地形と堆積状態

1. 傾斜部

調査区東側はキウキチ沢に面していることから沖積錐地形を形成する際の侵食、再堆積作用が激しく樽前 d1、d2 テフラの再堆積互層が顕著に発達している。TP-108 壁面では沖積錐堆積物は砂質及び亜角礫シルト岩が主体を占め、150cm 以上堆積している。それに比べより北側の TP-120、121 ではVIII層上位に80cm程度の堆積のため、より供給源に近い部分は厚い堆積を示している。

2. 平坦部

平成20年度に標高55.5m以下の範囲としていたが、55.0m付近のTP-107、114は樽前 d テフラの二次堆積が認められない、もしくは30cm程度であることから、平坦部は54.8m以下の範囲と考えられる。堆積物の粒度淘汰は比較的良く、安定的な堆積状態を示し、VII層の層厚も60cm前後で傾斜部より薄い(TP-104~106、110~113、115~119)。

3. 微高地

平成20年度に微高地とした北東-南西軸からTP-107、114までを含めたK-42からM-45までの範囲で、直線状の微高地となっている。キウキチ川からの沖積物堆積物が堆積しておらず、標準堆積の様相を示している。そのため、樽前 d テフラ降下以前から微高地であった可能性が高く、約10mしか離れていない西側のTピットの壁面には樽前 d テフラの二次堆積が60cm前後認められることから、僅かな高低差で環境が異なっていたと思われる。

4. 沢地形

31から34ラインにかけてA2からB2地区で南北方向に認められる沢状地形で、等高線からも明瞭に確認することができる。沢地形の最深部についてはVI層下位をトレンチ掘りしたところ、VII層二次堆積層を掘り抜いていないが、VI層下位から径30~50mmのシルト岩や亜角礫を多量に含む段丘

堆積物が厚さ約 5 cm で認められる。堆積状態を見ると、樽前 d テフラの二次堆積後、一時的に流路が形成され、上流の段丘堆積物を押し流したと思われる。この流路は坑底面が幅 20 cm 程度で狭く溝状になるため旧河川ではなく、降雨などによって地表に走った水路が日常的に深く地表を開析した可能性も考えられる。

5. マウンド地形

B1 地区の 46 から 49 ラインにおいて標高 54.5m から 55.5m においてマウンド地形の縁辺部が認められ、高低差も 1m 以上あり現地表面からも明瞭に確認できる地形である。このマウンド堆積物は樽前 c テフラを被覆し、V 層黒色土中の上位に狭在する。構成土壌は成層の樽前 d テフラを主体とし、間層に黒色土層が帯状に確認できる。この堆積物は平成 14・15・20 年度の調査で検出されており、地震を起因とする地滑り堆積物と報告されている（田近・大津 2004）。地滑り堆積物については次に詳述する。

C 調査区の微地形と厚真川上流域の自然災害イベント

厚幌 1 遺跡における地滑り堆積物については先述の通り、平成 14・15 年度で報告されている。今回検出した地滑り堆積物は、B1 地区の 46～49 ラインで最大幅約 17m、高低差 1.2m のマウンド地形である（図 I-7）。また、北西方向に「地滑り範囲（淡）」とした地点には樽前 d パミスと Vb 層が斑状に広がり、「地滑り範囲（シルト岩）」と示した地点にはシルト岩を多量に含む段丘堆積物がブロック状に点在している。

地滑り堆積物の断面を観察すると（図 I-9～11）、樽前 c テフラ下位にシルト岩を多量に含む 1 層が全体を被覆している。B ラインでは大きく分類すると、1 層下位に樽前 d テフラ主体層（8 層）、V 層黒色土主体層（11～13 層）、樽前 d テフラ（15 層）とほぼ混入物のない基本土層がプライマリーな Vb 層上位に堆積している。縁辺部では V、VI、樽前 d テフラが混在した堆積物が認められるが、この地滑り堆積物は基本的に順層を成して堆積していることがわかる。また、より西側の C ラインでは、シルト岩を多く取り込む粘土質シルト層（C・D ライン 21 層）や V 層、シルト岩、樽前 d テフラの混土（C・D ライン 24・25 層）が樽前 c テフラ下位に認められる。地滑り堆積物が調査区に移動した過程については B・C ラインの堆積を元に下記を想定できる。

- ① 地震（震度不明）
- ② 遺跡南側の地滑り
- ③ 北西側へプライマリーの樽前 d テフラ（Ta-d）が表層移動（B ライン 15 層、C ライン 14 層）
- ④ 移動中、崩れた面に露出した黒色土層を取り込む（B ライン 11～13 層）
- ⑤ 別方向から Ta-d が移動し重なり合う（B ライン 8 層）
- ⑥ Ta-d が露出した基盤層が土石流のように流出する（B ライン 1・5 層、C ライン 1・2・24・25 層）
- ⑦ シルト岩を主体とした粘土質シルト層が、平坦面にブロック状の分布を示す
- ⑧ 樽前 c テフラが降下する

※②、③、④の間には各層が混じりあった堆積物が認められる（B ライン 9・14・16～20 層）

※⑦の分布はブロック間に繋がりががないため、山側から勢いよく滑り落ち、衝撃により散逸した可能性が考えられる。

時期については樽前 c テフラを被覆しており、Vb 層上位を開削していること、後期初頭の余市式土器集中（VPB-05）の直上に⑦が被覆していることから約 4,000 年前に引き起こった災害であっ

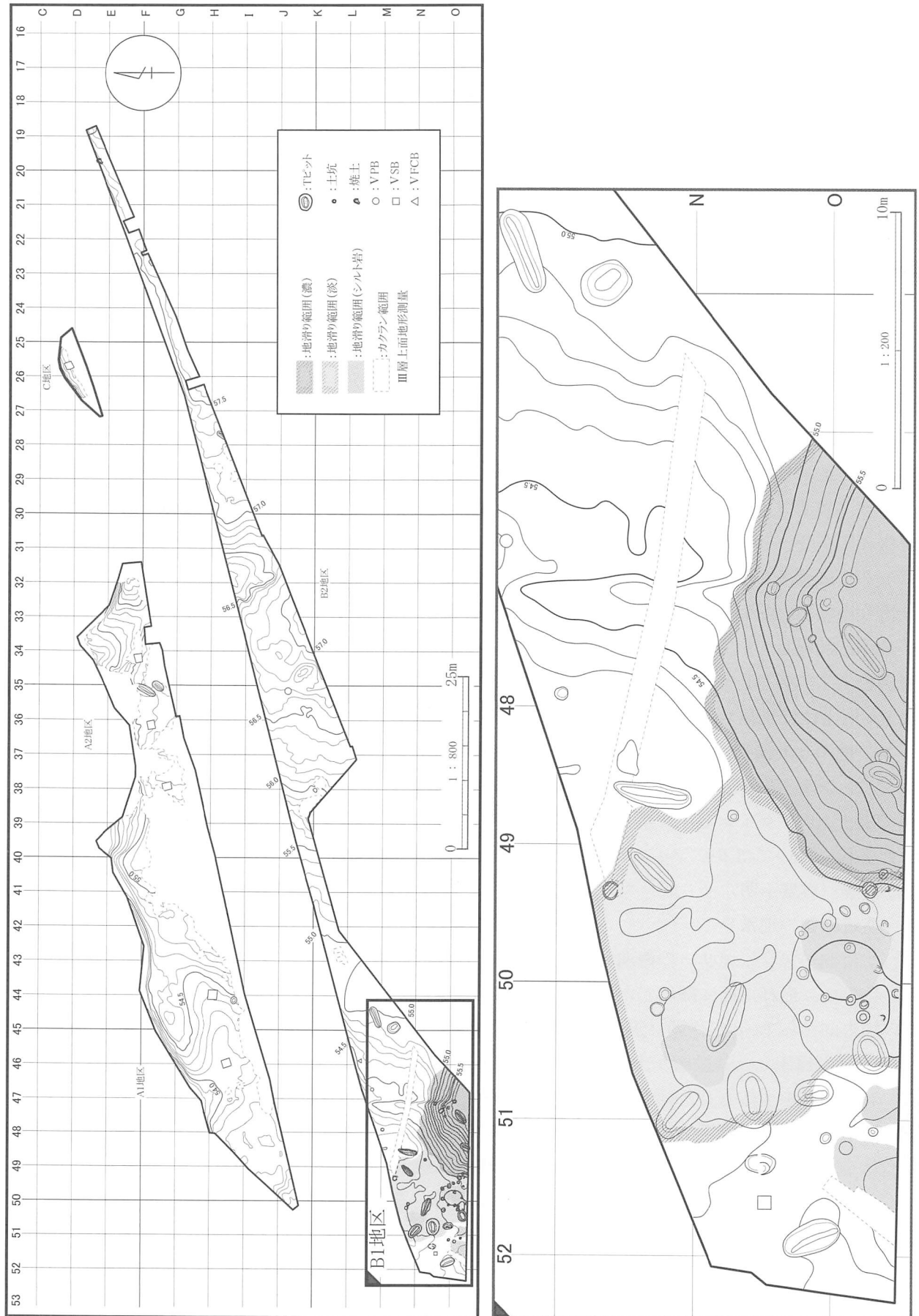


図 I-7 V層地滑り分布図

たことが判明している。また、地滑り堆積物基底面から黒色土 4cm 挟んで下位に Tピットの掘り上げ土が認められることから、Tピットも黒色土が堆積するまでの時期差があることが判明している。

D 調査区基本土層

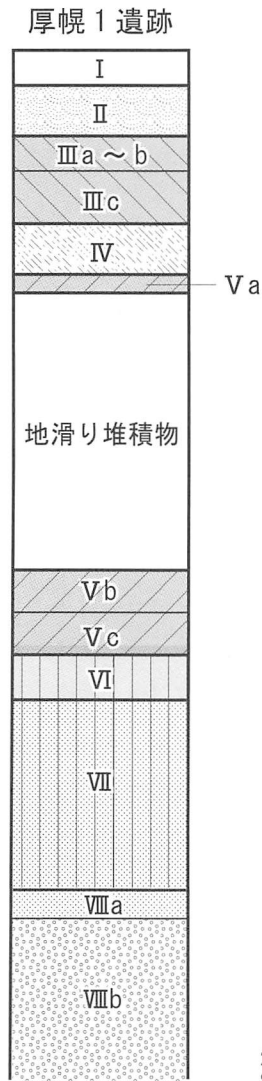
本遺跡の形成時期は縄文時代からアイヌ文化期までで、前節で記述したキウキチ沢から供給された沖積錐堆積物（Ⅶ層）より上層のテフラ、遺物包含層の堆積状態について記述する。

調査区は樽前 b テフラ上位まで近現代の耕作や伐採植林に伴う砂質の攪乱層（0 層）と笹根等の表土層（Ⅰ層）があり、その下位に礫質降下軽石の樽前 b テフラ（Ⅱd 層、Ta-b、1667 年降下）が調査区内ほぼ全体に堆積している。平成 14・15・20 年度の調査では、本来の基本土層として樽前 a テフラ（Ⅱa 層、Ta-a、1739 年降下）や駒ヶ岳 c2 テフラ（Ⅱc 層、Ko-c2、1694 年降下）の堆積を部分的に確認しているが、今回の調査では B1 地区の南側壁面に一部確認している。樽前 b テフラ直下には砂質降下火山灰の有珠 b テフラ（Ⅱb 層、Us-b、1663 年降下）が層厚 3mm 以下で部分的に堆積している。なお、樽前 a テフラと樽前 b テフラの間層に黒色砂質土層（0B 相当層）が堆積している。

縄文時代晩期後葉から近世アイヌ文化期にかけての遺物包含層であるⅢ層は樽前 b テフラと樽前 c テフラ（Ⅳ層、Ta-c、約 2500 年前降下）に狭在する黒色腐食土層で、平均層厚は約 12 cm 前後である。色調や土質によって a～c 層に細分可能で、主体層を成すⅢb 層はやや粘性を有する黒色土層で、Ⅲc 層は均質にⅣ層を多量に含む黒褐色から暗褐色の砂質土層である。Ⅲb 層とⅢc 層との境界には白頭山苦小牧火山灰（B-Tm、10 世紀前半降下）が倒木痕の窪みや沢状地形に堆積している。概ねⅢb 層上位から中位にかけてはアイヌ文化期、Ⅲb 層下位からⅢc 層上位は擦文文化期、Ⅲc 層中位から下位にかけては続縄文文化期から縄文時代晩期後葉の遺物包含層である。Ⅳ層の樽前 c テフラは均質で 1 つのフォールユニットから成る。

縄文時代早期から晩期中葉にかけての遺物包含層であるⅤ層黒色腐食土も a～c の 3 層に分した。Ⅴa 層はⅣ層と斑状に堆積し、Ⅴb 層は粘性が強い黒色土層である。Ⅴc 層はⅦまたはⅧ層起源の樽前 d テフラが均質に混じり、泥岩などの混入物もⅤb 層より多く含む。Ⅵ層はⅤ層とⅦ層が植物痕跡等により斑状に堆積する漸位層である。概ねⅤa 層は縄文時代晩期、Ⅴb 層は縄文時代中期・後期、Ⅴc 層は縄文時代前期、Ⅵ層は縄文時代早期の遺物包含層と考えられる。これまでの厚幌ダム建設や厚幌道水路建設に係わる発掘調査の結果矛盾しない。

〔厚幌1遺跡基本土層〕



- 0層：攪乱・耕作土
- I層：近現代表土 7.5YR3/1 黒褐色砂質土
- II層：近世火山噴出物及び黒色砂質腐植土
 a；樽前 a テフラ (Ta-a) 10YR6/4 にぶい黄橙色 砂質降下火山灰 1739 年降下。耕作により部分的に堆積。層厚 8cm 前後。
 b；黒色砂質腐植土層 10YR2/1 黒色 新千歳空港（美沢川流域の遺跡群）の調査における 0 黒層相当。
 c；駒ヶ岳 c2 テフラ (Ko-c2) 10YR8/3 浅黄橙色 砂質降下火山灰 1694 年降下。II b 層中において部分的に堆積している。
 d；樽前 b テフラ (Ta-b) 2.5YR7/3 浅黄色 細礫質降下軽石 1667 年降下。層厚 20 ～ 30cm 前後。
 e；有珠 b テフラ (Us-b) 2.5YR6/1 黄灰色 シルト質降下火山灰 1663 年降下。層厚数 mm。III a 層上面に堆積。
- III層：黒色腐植土
 a；砂質シルト 7.5YR2/1 黒色 II d・e 層を斑状に含む。層厚 1 cm 前後。やや赤味あり。近世初頭遺物包含層。
 b；シルト 10YR1.7/1 黒色 やや粘性あり。層厚 10cm 前後。上位から中位が中近世アイヌ文化期遺物包含層。下位が擦文文化期包含層。III b 層と III c 層との層境に白頭山苦小牧火山灰（B-Tm シルト質降下火山灰 10c 前半降下）が部分的に堆積する。
 c；砂質シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 10cm 前後。続縄文～縄文晩期後半の包含層。
- IV層：樽前 c テフラ (Ta-c) 10YR6/6 明黄褐色 砂質降下軽石 B. P. 2,500 年前後降下。層厚 10cm 前後。1 層のフォル・ユニット。
- V層：黒色腐植土
 a；シルト 10YR3/2 黒褐色 層厚 2cm 前後。縄文晩期前半の遺物包含層。
- 地滑り堆積物； Va から Vb 層の間にマウンド状に堆積
- b；シルト 10YR1.7/1 黒色 層厚 25cm 前後。縄文中・後期の遺物包含層。
 c；シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 15cm 前後。縄文前・中期の遺物包含層。
- VI層：漸移層 2.5YR4/6 褐色 暗褐色シルト。層厚 10cm 前後。縄文早期の遺物包含層。
- VII層：樽前 d テフラ再堆積層（沖積錐堆積物で厚幌 1 遺跡に堆積）
 a；VII a 層起源の砂層と VII b 層の互層堆積層。調査区東側に堆積。
 b；シルト 10YR4/4 褐色 層厚 25cm 前後。上層に少量の角礫シルト岩（φ30↓）を含む。
- VIII層：樽前 d テフラ B. P. 8,000 年前後降下。
 a；樽前 d1 テフラ (Ta-d1) 5G4/1 暗緑灰色 細礫質降下スコリア（φ5↓）層厚 10cm 前後。幌内 7 遺跡では塊状（φ20↓）で、VI 層中に少量混じる。
 b；樽前 d2 テフラ (Ta-d2) 5YR4/8 赤褐色 中礫質降下スコリア 層厚 100cm 前後。部分的に水成風化による粘土化も有る。

図 I -8 基本土層柱状図

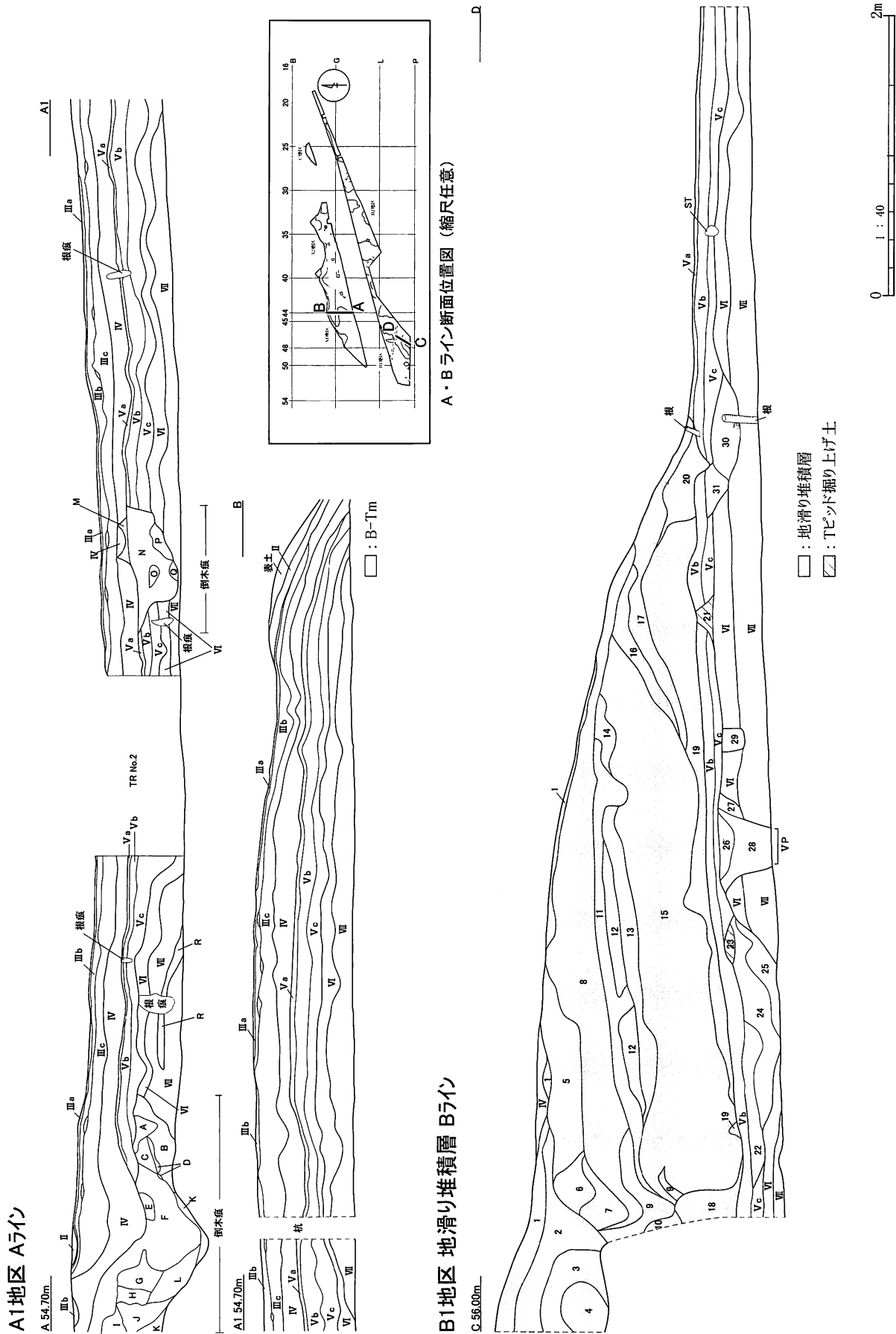
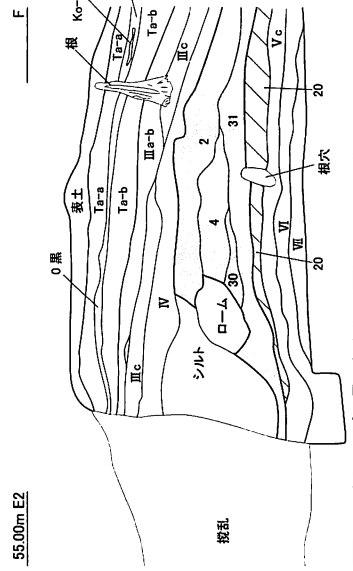
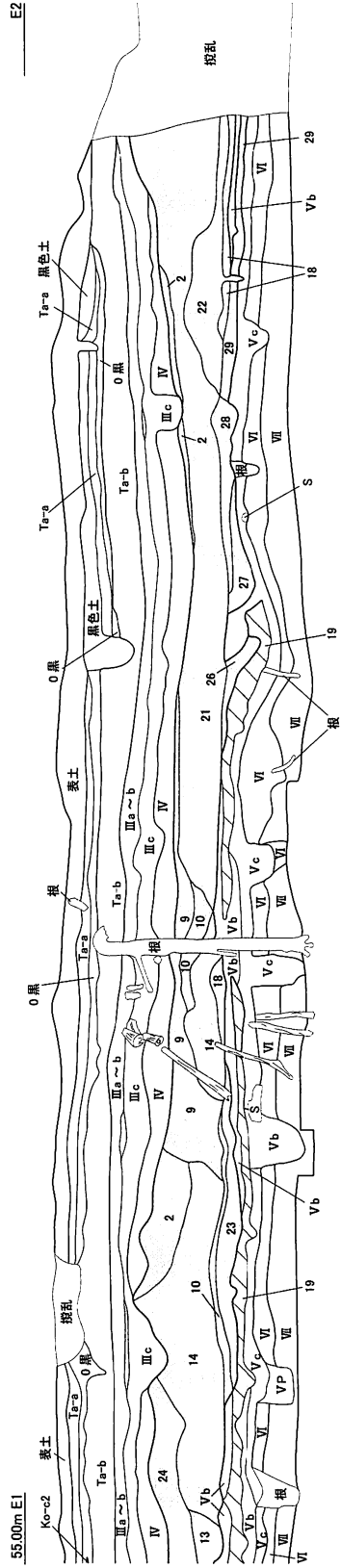
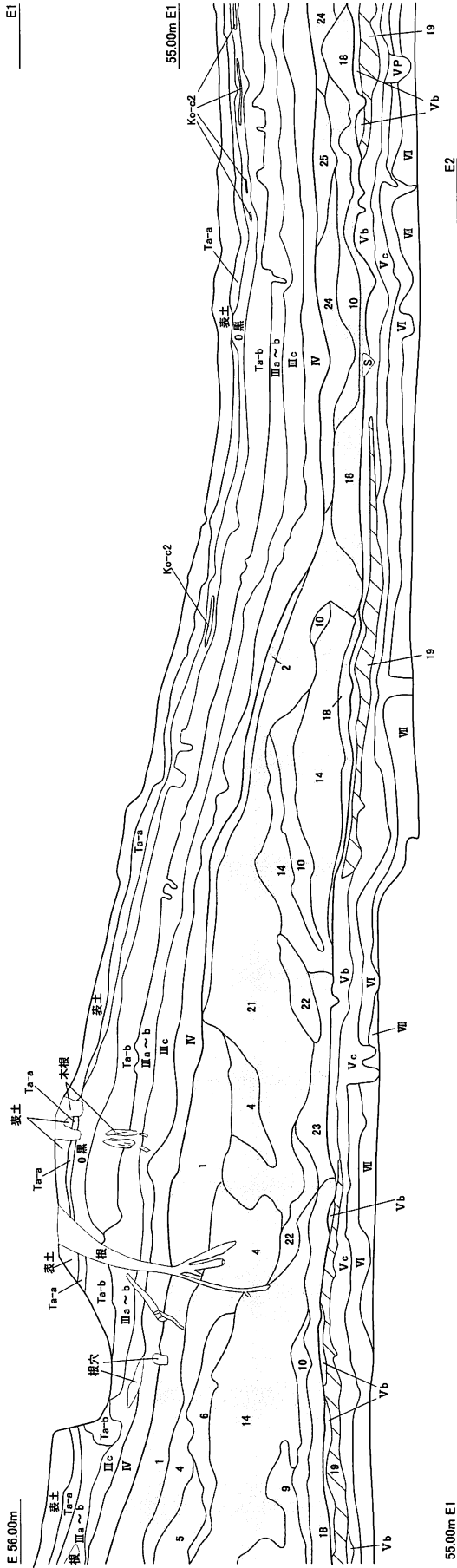


図 I-9 南北断面図及び地滑り断面図A・Bライン

B1地区地滑り堆積物Cライン



- : Tピット掘り上げ土
- : B-Tm
- : 地滑り堆積層

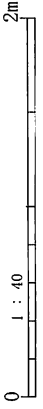
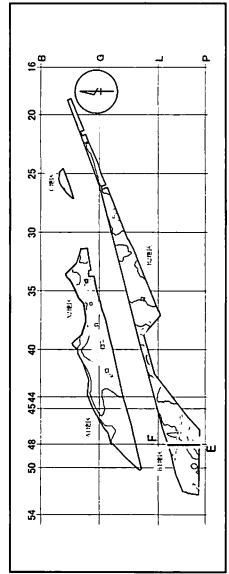
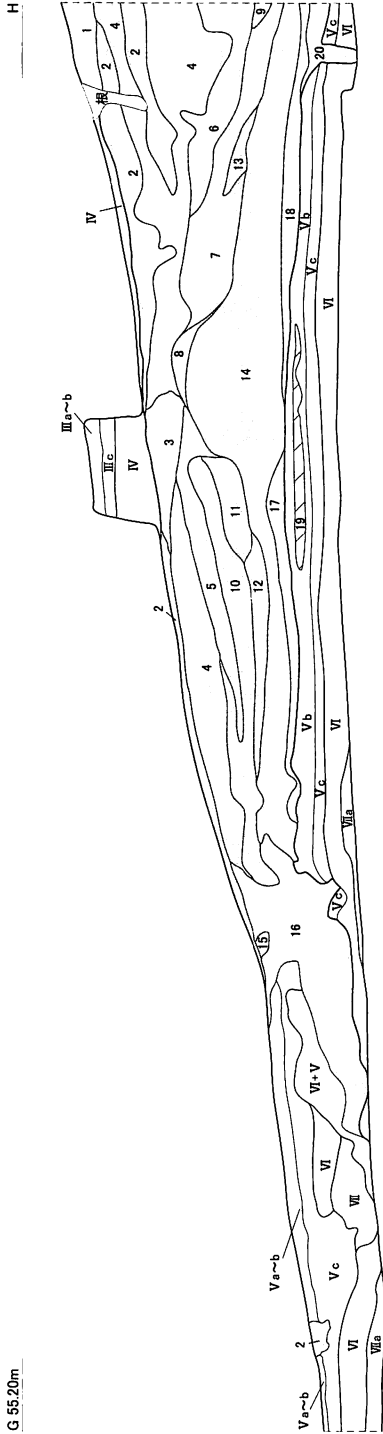


図 I-10 地滑り断面図 Cライン

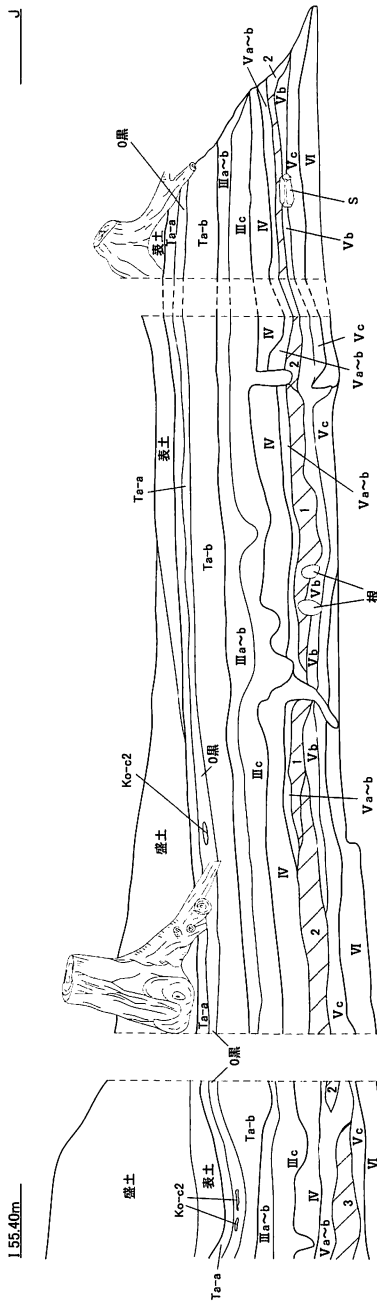
B1地区 東側壁断面図 Dライン

G 55.20m

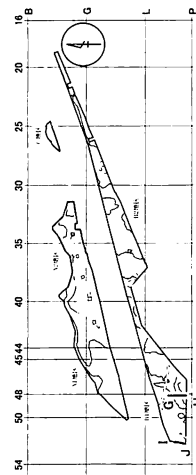


B1地区 西側壁断面図 Eライン

L 55.40m



▨ : Tピッド掘り上げ土
□ : 地滑り堆積層



D・Eライン断面位置図 (縮尺任意)

図 I-11 地滑り断面図 D・Eライン

厚幌1遺跡(3)

A1地区 南北セクション

- A. 10YR2/3 黒褐色 Vc+VII ブロック状
- B. 10YR4/6 褐色 シルト質=Vc・VII(斑状)
- C. 10YR4/4 褐色 VI=Vb≡VII(斑状)
- D. 7.5YR4/6 褐色 VII=VI(斑状)
- E. 10YR2/3 黒褐色 VII+Vc=Ta-dp
- F. 10YR2/1 黒色 Vb≡VII
- G. 7.5YR4/4 褐色 VII+Vb(互層)
- H. 10YR2/3 黒褐色 Vb=VII(斑状)
- I. 7.5YR2/3 極暗褐色 VII+Vb(互層)
- J. 7.5YR4/4 褐色 VII≡Vc(斑状)
- K. 10YR4/6 褐色 シルト≡Ta-dp
- L. 10YR3/2 黒褐色 Vc=VII(互層)
- M. 10YR7/4 にぶい黄褐色 IV=Va
- N. 10YR3/4 暗褐色 Vc=VII(互層)
- O. 10YR5/6 黄褐色 Vc+VII(斑状)
- P. 10YR3/3 暗褐色 VI=VII(互層)
- Q. 7.5YR4/4 褐色 VI=Vc(互層)
- R. 10YR4/3 にぶい黄褐色 VII-VI(均一)

B1地区 地滑り堆積跡セクション図 Bライン

- 1. 10YR4/3 にぶい暗褐色 砂質シルト-シルト岩(φ20↓)
- 2. 7.5YR4/6 褐色 VII=Ta-d(均一) Ta-dp+Ta-dL=V(均一)
- 3. 10YR2/2 黒褐色 Vb≡Ta-dp(φ10↓)
- 4. 10YR3/3 暗褐色 VII-V(均一)
- 5. 10YR4/4 褐色 Ta-d-シルト岩(φ5↓)≡V(互層)
- 6. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Ta-d-シルト岩(φ5↓)
- 7. 10YR6/4 にぶい黄褐色 Ta-d-風化ローム(均一)≡シルト岩(φ3↓)
- 8. 10YR4/6 褐色 VII≡V(φ5↓ 斑状) Ta-dp=Ta-dL(斑状)
- 9. 10YR7/4 にぶい黄褐色 風化ローム
- 10. 10YR4/6 褐色 Ta-d-VI(均一)
- 11. 10YR1.7/1 黒色 Vb=Ta-dp(φ5↓) 地山黒色土
- 12. 10YR3/2 黒褐色 Vc=Vb(φ20↓ 斑状)≡Ta-dp(φ3↓) 地山黒色土(Vc~VII)
- 13. 7.5YR4/6 褐色 Ta-dL≡砂(均一)
- 14. 10YR3/4 暗褐色 Ta-dL=V(均一)
- 15. 7.5YR4/6 褐色 Ta-dp
- 16. 10YR3/4 暗褐色 Ta-dL=V(均一)
- 17. 10YR3/3 暗褐色 V+VI=Ta-dp(φ10↓)
- 18. 10YR3/2 黒褐色 V+風化ローム=Ta-dp(φ20↓)
- 19. 10YR3/3 暗褐色 Ta-dp-シルト岩(φ10↓)
- 20. 10YR2/2 黒褐色 V=Ta-dp(φ10↓)
- 21. 10YR2/2 黒褐色 Vc=Ta-dp(φ10↓) 掘り上げ土
- 22. 10YR2/2 黒褐色 Vc=VI(均一)
- 23. 10YR2/3 黒褐色 Vc≡Ta-dp(φ10↓) 掘り上げ土
- 24. 10YR2/1 黒色 Vb-Vc(均一)≡Ta-dp(φ10↓)
- 25. 10YR4/4 褐色 VI+Vc(均一)≡Ta-dp(φ10↓)
- 26. 10YR3/2 黒褐色 Vc-VI(均一)≡Ta-dp(φ5↓)
- 27. 10YR2/2 黒褐色 VI+V(φ5↓ 斑状)≡Ta-dp(φ10↓)
- 28. 10YR2/1 黒色 Vc+VI(均一)≡Ta-dp(φ10↓)
- 29. 10YR2/2 黒褐色 Vc-VI(均一)≡Ta-dp(φ10↓)
- 30. 10YR4/3 にぶい黄褐色 VI-Vc(φ5 斑状)≡Ta-dp(φ5↓)
- 31. 10YR2/2 黒褐色 Vc+VI(均一)≡Ta-dp(φ10↓)

※ 1~20が地滑り、21~31は掘り上げ土・土坑・乱れ

B1地区 西壁セクション図 Eライン

- 1. 7.5YR4/6 褐色 Ta-dp=V(均一) 掘り上げ土主体部
 - 2. 10YR3/3 暗褐色 V=Ta-dp(φ10 均一)
 - 3. 10YR5/8 黄褐色 V=Ta-dL≡Ta-dp(φ5 均一)
- ※ Tピット掘り上げ土

B1地区 地滑り東側セクション図 C・Dライン

- 1. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト岩-Ta-dp(均一)
- 2. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト=シルト岩(均一)≡Ta-dp(φ20 均一)
- 3. 10YR3/2 黒褐色 V=シルト岩(φ3↓)≡Ta-dp(φ10 均一)
- 4. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d2+Ta-d
- 5. 10YR3/4 暗褐色 Ta-d=V(均一)
- 6. 10YR2/3 黒褐色 VI+Vc-Ta-dp(φ10↓ 均一)
- 7. 10YR2/1 黒色 V=Ta-dp(φ5↓ 均一)
- 8. 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト-シルト岩(φ20 均一)=V(均一)
- 9. 10YR3/4 暗褐色 VI+Vc+Ta-dp(φ5 均一)
- 10. 10YR2/1 黒色 V~VI 基本層ブロック
- 11. 10YR6/4 にぶい黄褐色 Ta-d1=V≡Ta-dp(φ5~10 均一)
- 12. 7.5YR4/6 褐色 汚れたTa-dL
- 13. 10YR3/2 黒褐色 V-Ta-dp(均一)
- 14. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp
- 15. 7.5YR4/8 明褐色 V-Ta-c
- 16. 10YR2/2 黒褐色 V-Ta-dp(φ20 均一)
- 17. 10YR2/3 黒褐色 Ta-dp=V(均一)
- 18. 7.5YR3/8 明褐色 Ta-dp≡V(均一)
- 19. 7.5YR4/4 褐色 V=Ta-dL≡Ta-dp(φ10 均一) Tピット掘り上げ土
- 20. 7.5YR4/4 褐色 V-Ta-dp(φ5~10 均一) Tピット掘り上げ土
- 21. 10YR5/2 灰黄褐色 基盤ブロック=粘土質シルト(アウトバーンブロック)
- 22. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルトブロック
- 23. 10YR5/6 黄褐色 Ta-dLブロック=Ta-dp
- 24. 10YR3/1 黒褐色 V-シルト岩(φ5 均一)
- 25. 10YR5/1 褐灰色 シルト岩(φ10)=VI(均一)
- 26. 10YR3/2 黒褐色 V-VI(均一)≡Ta-dp(φ5 均一)
- 27. 10YR2/1 黒色 V≡Ta-dp(φ5 均一)
- 28. 10YR3/2 黒褐色 V=Ta-dp(φ5 均一)
- 29. 10YR1.7/1 黒色 V≡Ta-dp(φ5)・シルト岩(φ3 均一)
- 30. 10YR7/8 黄褐色 Ta-dL(風化)
- 31. 10YR6/6 明黄褐色 Ta-dL=V・Ta-dp(斑状)

第Ⅱ章 アイヌ文化期から続縄文文化期の調査

本章で取り扱う遺構及び遺物は Ta-b テフラ下層の黒色腐植土層から出土したものである。第Ⅰ章の概要で述べたとおりⅢ層で検出した遺構は道跡1条（アイヌ文化期）、礫集中（擦文～アイヌ文化期）、土器集中（続縄文文化期）の3ヶ所である。

本遺跡については平成14・15・20年の発掘調査でアイヌ文化期の灰層（ⅢAS-01）や擦文・続縄文土器が出土しているが、今年度は遺構、遺物ともに希薄であった。調査は排土捨て場の関係からA地区を40ラインで区切り、西側をA1、東側をA2地区と分けて行っている。遺構検出は北側（厚真川側）のみで、その他の調査区については礫が散在して出土するのみであった。遺物は土器194点（続縄文土器）礫183点、剥片類1点、合計378点出土している。以下に詳細について述べる。

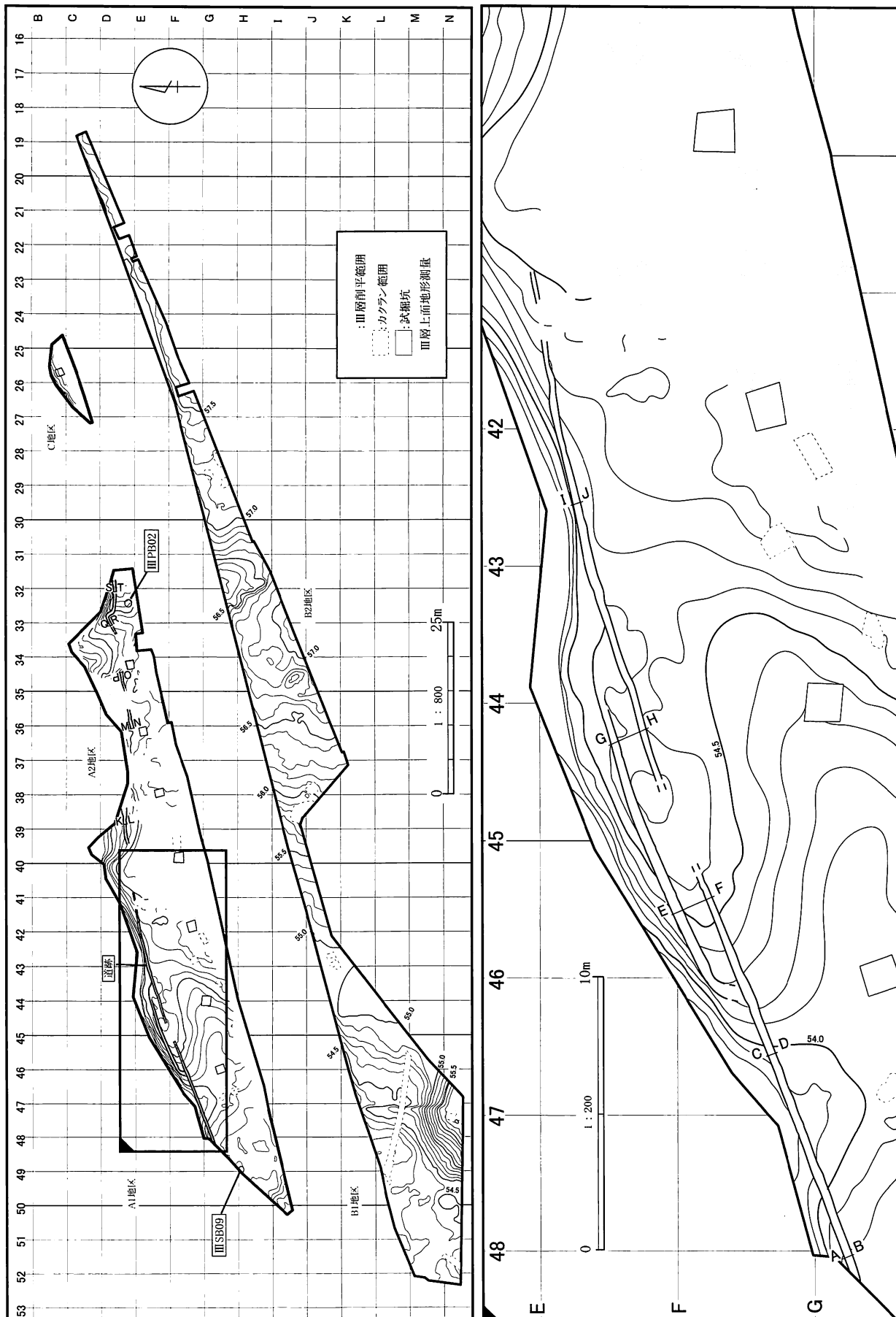
第1節 道跡（図Ⅱ-1・2 図版カラー3-1・2-1～4）

位置：D-32～G-48区 規模：約4100×30cm 層位：Ⅲb上位

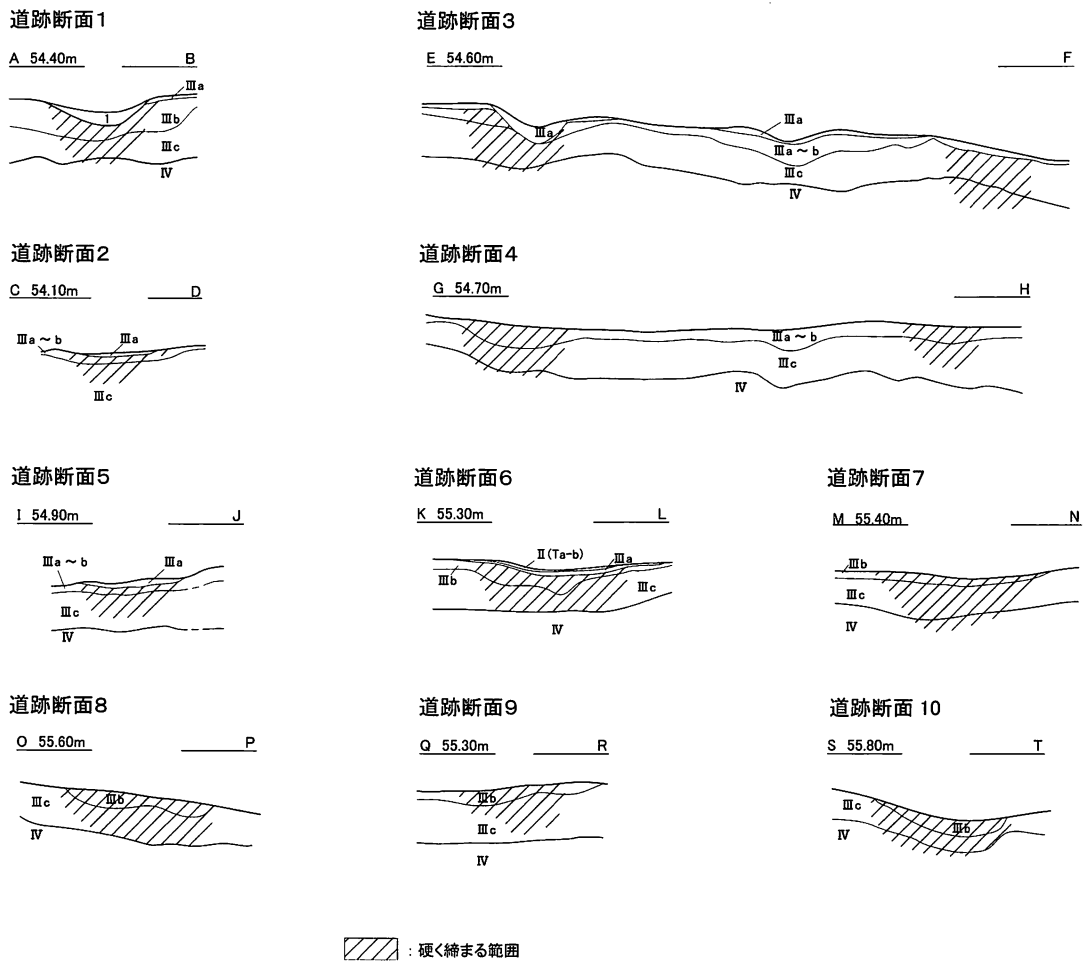
確認・調査：Ta-b 火山灰を地形に合わせて除去すると、段丘北側（厚真川側）縁辺部に沿って Ta-b が溝状に認められた。最初に A1 地区で溝状のラインが確認できたため、A2 地区に続くものと判断したが、工程上半分ごとに調査することとなった。A1 地区の調査は窪みに溜まる Ta-b テフラを残しながら周辺をⅢa層まで精査し、写真撮影を行った。精査の際に E-43 区で道跡が二股となり、F-46 区で1本の道跡に収束していることを確認しているが、二股の結合部分に切り株があったために明確な分岐点は確認できていない。断面観察については9ヶ所で行い、土層の締まり具合からⅢb層上位に帰属すると考えられる。また、A2地区の調査については予想以上にⅢ層が削平されていたため、明瞭なプランを検出できなかったが、Ⅲb～c層にかけての締まり具合や幅などで道跡のラインと推定した。道跡はおそらく集落（コタン）から集落（コタン）、もしくは厚真川へ降りる道を想定したが、現段階では確認できていない。

表Ⅱ-1 Ⅲ層遺構群一覧表

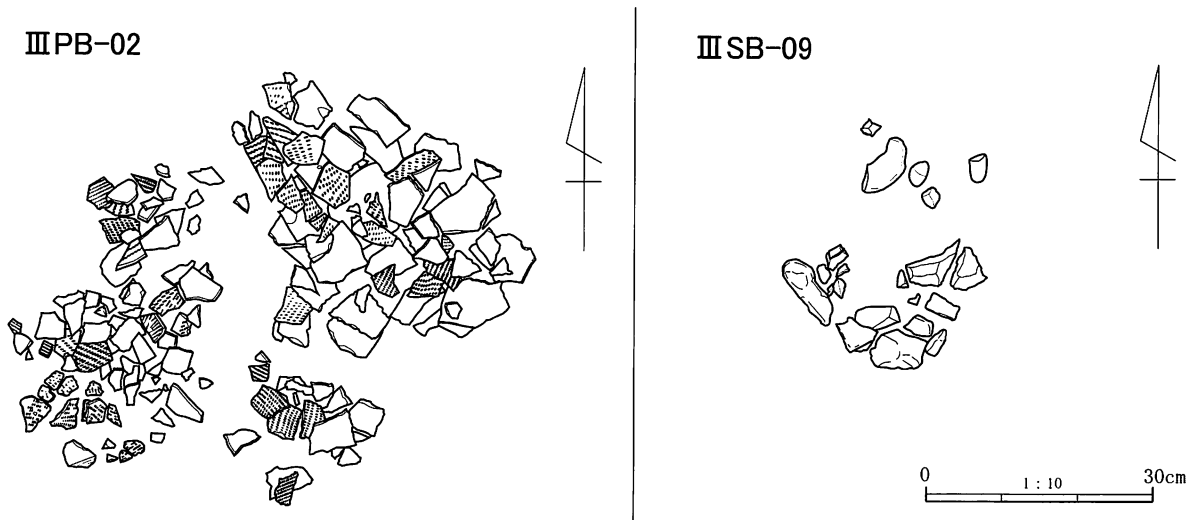
挿図番号	図版番号	遺構名	時代	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
				長軸	短軸				
Ⅱ-2	2-1	道跡	アイヌ文化期	8400	30	A地区D～Gライン	ⅢbU	-	東側削平
Ⅱ-3	2-5	ⅢPB-02	続縄文文化期	70	50	D-32	Ⅲc	-	
Ⅱ-3	2-6	ⅢSB-09	擦文～アイヌ文化期	33	27	H-48・49	ⅢbL	-	



図Ⅱ-1 Ⅲ層遺構分布図



図II-2 道跡断面図



図II-3 III PB-02・III SB-09 平面図

第2節 集中遺物

1. 土器集中

ⅢPB-02 (図Ⅱ-3・4-1 図版2・20-1)

位置：D-32区 層位：Ⅲc層

確認・調査：Ⅲ層は遺物が殆ど出土していないため、ジョレンを併用して掘り下げを行っていたところD-32区で土器がまとまって出土した。出土層位と土器文様から続縄文土器とわかり、周辺の精査を行い写真撮影、微細図の記録をして遺物を取り上げた。土器は沢地形の緩斜面東側で出土しているが傾斜上の平坦面は切り株による攪乱が著しく掘り下げた結果遺物は出土していない。

出土遺物：1は口縁部から胴部にかけての復元個体で底部は出土していない。緩やかな波状口縁で5ヶ所の突起を有し、口唇部は中空工具の外側で連続した刻みが認められる。地文は横走気味の縄文が隙間なく施文され、器体は6mmと薄く製作されている。器形や文様構成から続縄文初頭の大狩部式土器に比定される。

2. 礫集中

ⅢSB-09 (図Ⅱ-3・4-2.3 図版2・20-2)

位置：H-48・49区 層位：Ⅲb層下位

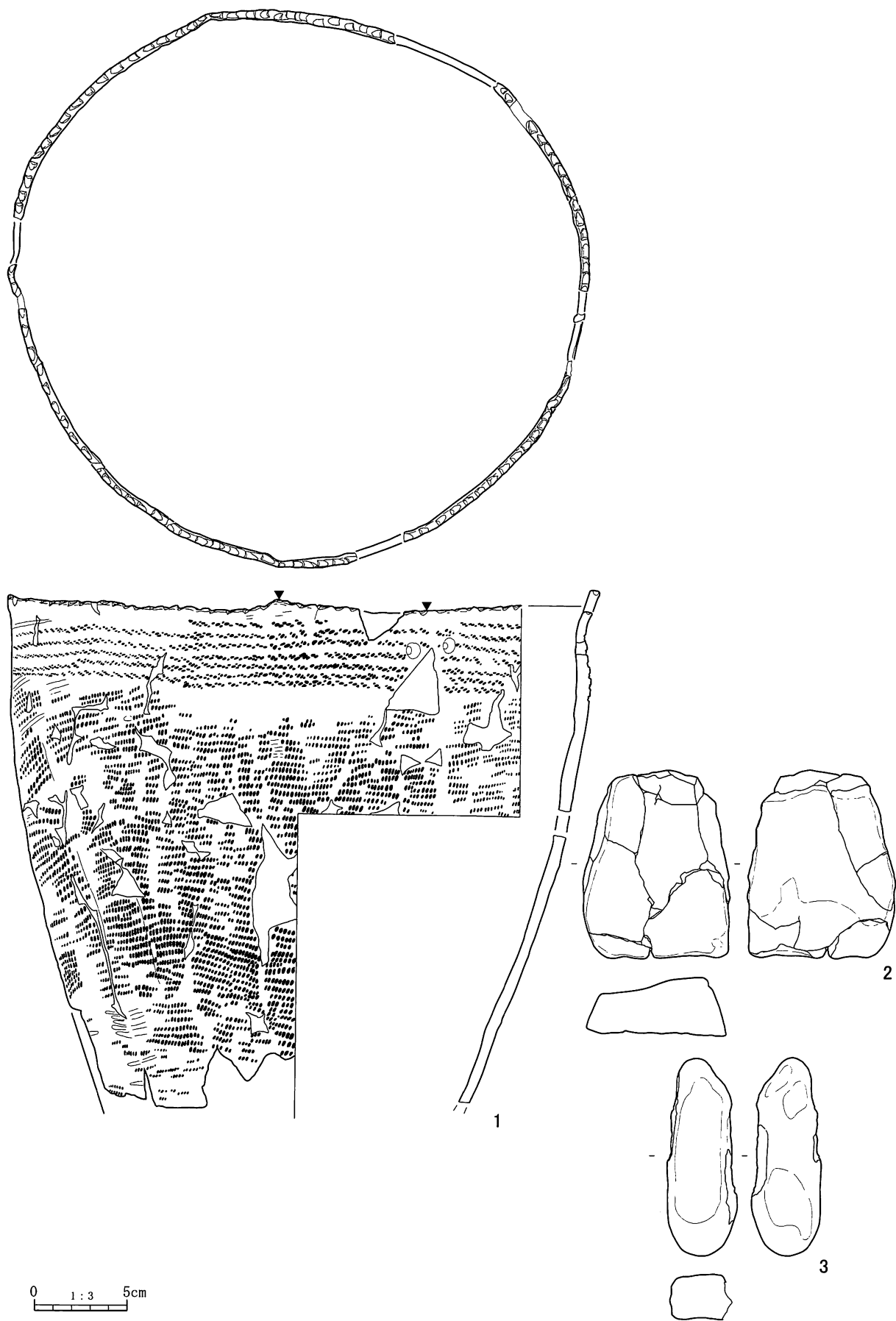
確認・調査：道跡調査後に掘り下げを行ったところ、Ⅲb層下位から礫集中を検出した。集中の規模は小さく、破片から接合資料であることも予想されたが、調査区境界にあり西側に続く可能性もあることから礫集中として取り扱っている。礫については完形、略完形が4点で殆どが接合している。形状は棒状から不整形と統一性がなく被熱も認められない。帰属時期については出土層位からⅢb層下位で擦文文化期と考えられるが、周辺に土器などが出土していないため擦文～アイヌ文化期としている。

表Ⅱ-2 ⅢPB-02出土土器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	分類	部位	遺物番号/調査区/層位	器形等	文様	胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/底側面-底面-内面		
Ⅱ-4-1	20-1	ZP02	VIA1	口縁~胴部	50528・50529ほか/ⅢPB-02・D-32/Ⅲc	小突起・やや外傾(突起:外反)-隅丸角状/やや外傾	刻み-LR縄線文(5~7条)/LR縄文(横走気味)	砂粒少量	

表Ⅱ-3 ⅢSB-09礫属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比	長短比標準偏差	重量(g)	被熱	材質	備考
						長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差						
-	20-2	ⅢS03	45213	ⅢbL	完形	86.65	-12.74	55.24	17.15	30.54	-2.79	1.57	-0.27	173.98		Mud.	
Ⅱ-4-3	20-2	-	45197	ⅢbL	略完形	107.38	7.99	(39.45)	1.36	25.86	-7.47	2.72	0.88	(139.40)		Mud.	
Ⅱ-4-2	20-2	ⅢS01	45201	ⅢbL	完形	101.67	2.28	79.84	41.75	35.14	1.81	1.27	-0.57	380.00		Mud.	
-	20-2	ⅢS02	45211	ⅢbL	完形	101.84	2.45	56.72	18.63	41.76	8.43	1.80	-0.04	198.51		Mud.	
完形合計						397.54		152.35		133.30		7.36		613.09			
完形平均値						99.39		38.09		33.33		1.84		153.27			
遺物総重量												613.09					



図II-4 ⅢPB-02・ⅢSB-09 出土遺物

第三章 縄文時代の調査

本章で取り扱う遺構及び遺物は Ta-c テフラ下層の黒色腐植土及び漸移層から出土したものである。遺構は山側の B1 地区に密な分布を示しており、道路を挟んだ北側には Tピット 3 基検出したのみである。B1 地区には過年度に調査した地滑り堆積物の続きがマウンド状に認められている。地滑り堆積層は Ta-c テフラを被覆しており、VbU から Vb1 層の上位に Ta-d テフラと V層黒色土が順層を成して堆積している。地滑り堆積の時期については、今年度地滑り堆積物直下から余市式土器 (V PB-05) が出土しているため、約 4,000 年前に起きたイベントであることが明らかとなった。遺構は地滑り堆積物が分布する範囲内では全て下位より検出している。竪穴式住居跡については平成 20 年度に約半分調査しているため、掘り上げ土に注意して調査を行ったが検出していない。しかし、57.0m の等高線が掘り上げ土の範囲であった可能性も考えられる (図 I-6)。Tピットについては溝状と楕円形状を検出し、楕円形状の方がより多く地滑り堆積物が含まれていることから時期が異なる要素に成りうると考えられたが、形状によって崩落速度が異なるため一概に断定はできない。また、これら Tピットと重複しない形で小型の円形から不整形な土坑が多数検出している。検出面は Vc~VI層で特に南側に多く、深さも統一性がなく配列も認めらず、過年度に検出した楕円形で浅い土坑とは明らかに趣が異なるため、別遺構と判断している。

本遺跡においては出土土器から主体となる時期は縄文時代後期初頭の余市式土器期で、次いで前期前葉と考えられる胎土に多量の繊維と一部滑石を含む土器、中期末葉の北筒式土器が出土している。遺物の分布範囲も遺構と同様 B1 地区に集中しているが、B2 地区の東側に本遺跡では初めてとなる円筒上層式土器が 2 点出土し、キウキチ沢方面には中期前半の遺構群が存在する可能性が考えられる。遺物は土器 2,376 点、剥片石器 159 点、礫石器 183 点、石製品 1 点、その他礫、フレイクチップ等 4,477 点の合計 7,196 点が出土している。

第 1 節 土 坑

土坑は VP-52 を除いて全て西側の B1 地区で検出している。この西側のまとまった土坑群は 34 基で、いずれも地滑り堆積層の下位で Vc~VI層上位にかけて検出している。規模については開口部で最大 110×76 cm、深さ 43 cm が最大値で、円形から楕円形の形状をしている。今回検出した土坑については直径が 50 cm 程度の小規模なものが多く、立ち上がりや坑底面の形状など規格的ではない。土坑については平成 14・15 年に調査した際、坑底面長軸 30~90 cm、短軸 30~40cm 前後の楕円形状土坑が配列を成して検出されているが (図 I-6)、形状や配列の有無などからこれらの遺構群とは異なる性格の土坑群と考えられる。以下に調査状況、堆積状態、遺物出土状態などをまとめて記載する。規模については属性表に記載しているため省略する。

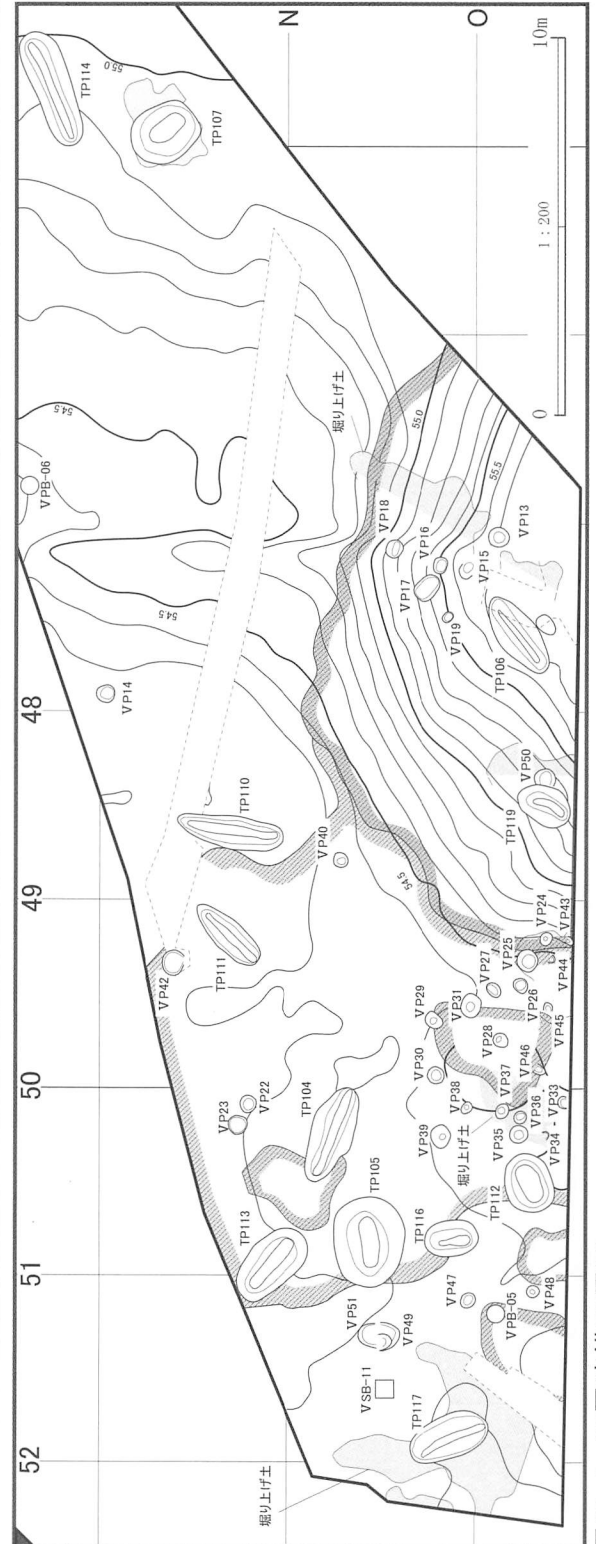
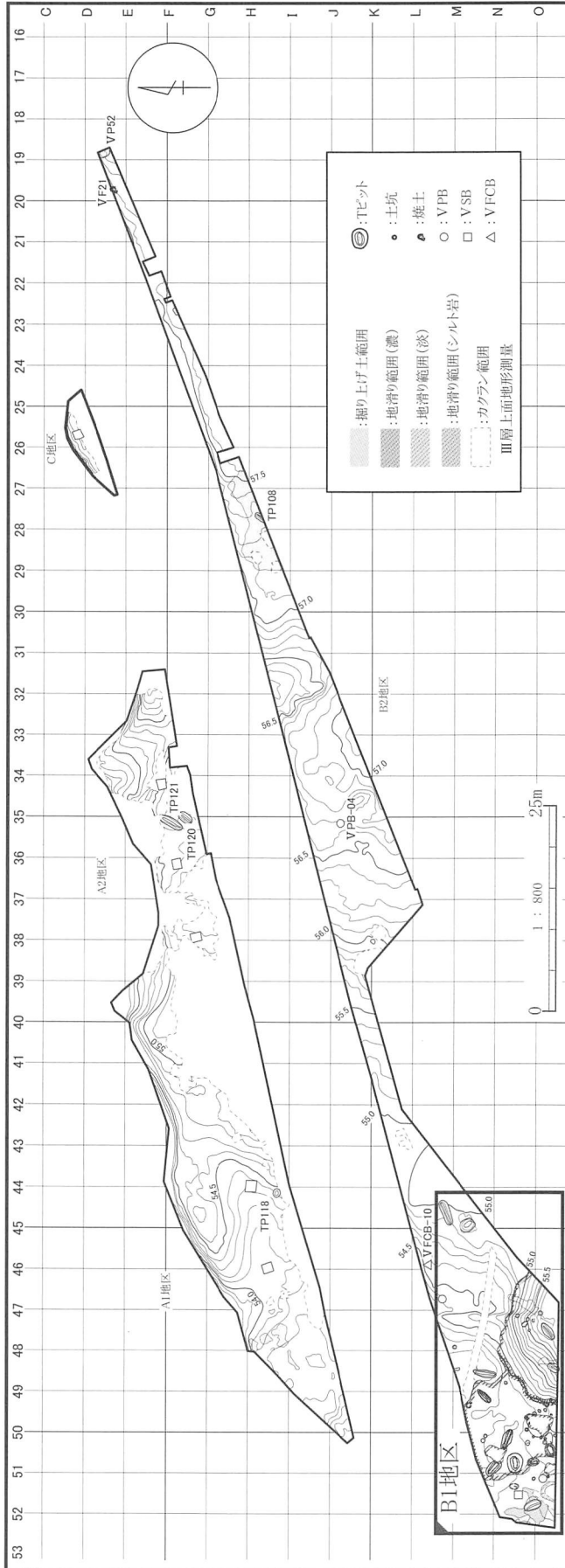
VP-13~52 (図 III-2~6 図版 3~11-2)

確認・調査：土坑はメインセクショントレンチ掘削及び壁面精査の際、断面に黒色土の落ち込みが認められたため、Vc~VI層で検出できることが想定できた。調査は包含層を Vc~VI層まで掘り下げ黒色プランを確認した。黒色プラン範囲内には Ta-d パミスが斑状に認められることが多かったため、Ta-d の分布も参考にして検出に努めた。検出した土坑は必要に応じて検出写真を撮り、短軸方向で半截して断面確認を行なった。土坑と認定する条件として①坑底面が水平であること②立ち

表Ⅲ-1 縄文時代遺構群一覧表

遺構名	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
	長軸	短軸				
VP-13	55	52	O-47	VI	-	
VP-14	50	46	L・M-47	VI	-	
VP-15	(25)	40	N-47	VI	-	
VP-16	49	36	N-47	VI	-	
VP-17	77	51	N-47	VI	-	
VP-18	48	45	N-47	VI	-	
VP-19	30	25	N-47	VI	-	
VP-22	50	42	M-50	VI	-	
VP-23	51	50	M-50	VI	-	
VP-24	36	30	O-49	VI	-	
VP-25	60	55	O-49	VI	-	
VP-26	36	41	O-49	VI	-	
VP-27	44	31	N・O-49	VI	-	
VP-28	42	36	O-49	VI	-	
VP-29	49	37	N-49	VI	-	
VP-30	45	44	N-49	VI	-	
VP-31	61	52	N-49	VI	-	
VP-33	(24)	29	O-50	VI	-	
VP-34	(12)	23	O-50	VI	-	
VP-35	47	46	O-50	VI	-	
VP-36	34	32	O-50	VI	-	
VP-37	41	34	O-50	VI	-	
VP-38	34	26	N-50	VI	-	
VP-39	63	52	N-50	VI	-	
VP-40	38	40	N-48	VI	-	
VP-42	67	50	M-49	VI	-	
VP-43	(20)	(20)	O-49	VI	-	
VP-44	(14)	(21)	O-49	VI	-	
VP-45	(25)	(23)	O-49	VI	-	
VP-46	(29)	(25)	O-49	VI	-	
VP-47	43	37	N-51	VI	-	
VP-48	34	32	O-51	VI	-	
VP-49	32	34	N-51	VI	VP-51と重複	
VP-50	(45)	(57)	O-48	VI	-	
VP-51	220	152	N-51	VI	VP-49と重複	
VP-52	(25)	(70)	D-18	VI	-	
VF-21	(85)	53	D-19	Vc	-	
TP-104	264	112	N-50	VbL	-	
TP-105	240	188	N-50	V	-	
TP-106	236	104	O-47	VI	-	
TP-107	184	136	M-44・45	VbL	-	
TP-108	(164)	(72)	H-27・28	Vc	-	
TP-110	284	88	M-48	VI	-	
TP-111	216	80	M-49	VI	-	
TP-112	160	124	O-50	VI	-	
TP-113	228	128	M-50・51・N-50	VI	-	
TP-114	316	100	L-44	VI	-	
TP-116	140	96	N-50	VI	-	
TP-117	216	116	N-50	VI	-	
TP-118	104	88	H-44	VI	-	
TP-119	152	100	O-48	VI	-	
TP-120	188	108	F-34・35	VI	-	
TP-121	(288)	100	E・F-35	VI	-	
VPB-04	122	68	J-35	VbU	-	
VPB-05	132	88	O-51	VbU	地滑り直下	
VPB-06	96	74	L-46	Vc	VFCB-10	
VSB-11	34	20	N-51	VbU	-	
VFCB-10	565	(270)	L-45・46	Vc	VPB-06	

※VP-20・21・32・41、TP-109・115は欠番



図Ⅲ-1 V層遺構配置図

上がりが明瞭であること③覆土の堆積状態で判断している。土坑としたものは断面確認後、写真、断面図の記録を行って完掘し、完掘写真、平面図の記録をして調査終了としている。なお、VP-51の様に遺物がまとまって出土するものに関しては微細図の記録も合わせて行なっている。

形態：検出した土坑は基本的に形態的な規格は認められず、共通する特徴は小規模で不整形であることが挙げられる。このような中で下記の項目で形態的分類を試みている。

- A. 坑口部の 1/2 以上坑底に平坦面が認められる。
 - 1. 長軸長>深さ（深い） 34
 - 2. 長軸長<深さ（浅い） 13・14・16～19・22・23・25～27・30・36・40・42・44・45・49・50・51
- B. 坑口部の 1/2 以下坑底に平坦面が認められる。
 - 1. 長軸長>深さ（深い） 15
 - 2. 長軸長<深さ（浅い） 31・37～39
- C. 坑底面が丸または尖状を呈する。
 - 1. 長軸長>深さ（深い） 43
 - 2. 長軸長<深さ（浅い） 24・28・29・33・35・46～48・
- D. その他 52

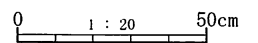
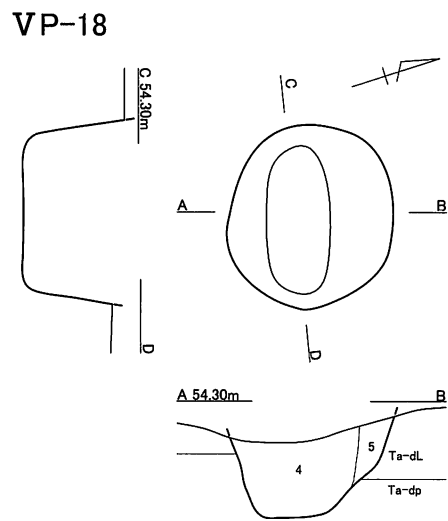
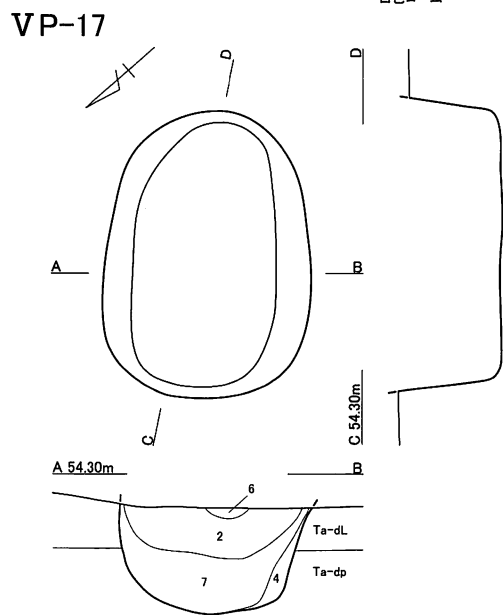
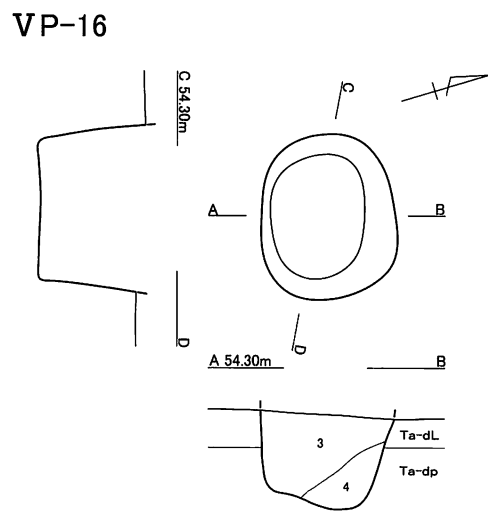
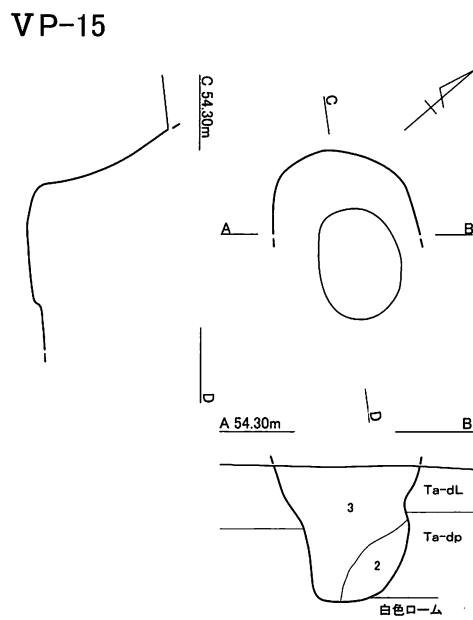
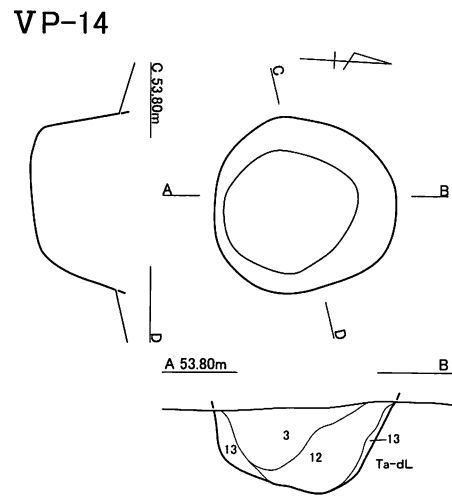
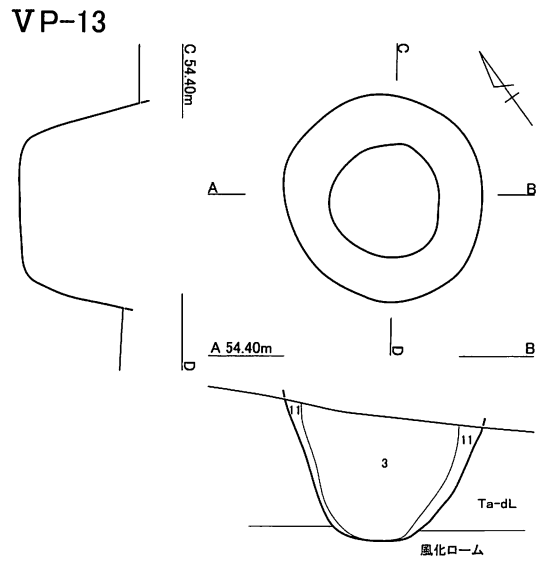
ここで深さを分類項目に適用し、厳密にいうと検出面の違いで数値が異なってくるという矛盾が生じるが、現場での調査状況から分類に影響を及ぼさない程度であると判断した。

以上のように分類を行なうとA2に分類されるものが多い。今回出土した土坑には明確に伴うと考えられる遺物がなく、VP-51の被熱礫集中は流れ込みと考えられるため、時期を示す材料は認められない。しかし、前期前葉にこうした小土坑群が認められ、同町内でも中流域のニタツナイ遺跡でまとまって小土坑群を検出している。本遺跡に於いても少量ながら前期尖底土器と考えられる破片も出土していることから、帰属時期を前期前葉に求めることも可能だが、時期については堆積状態で触れることとする。

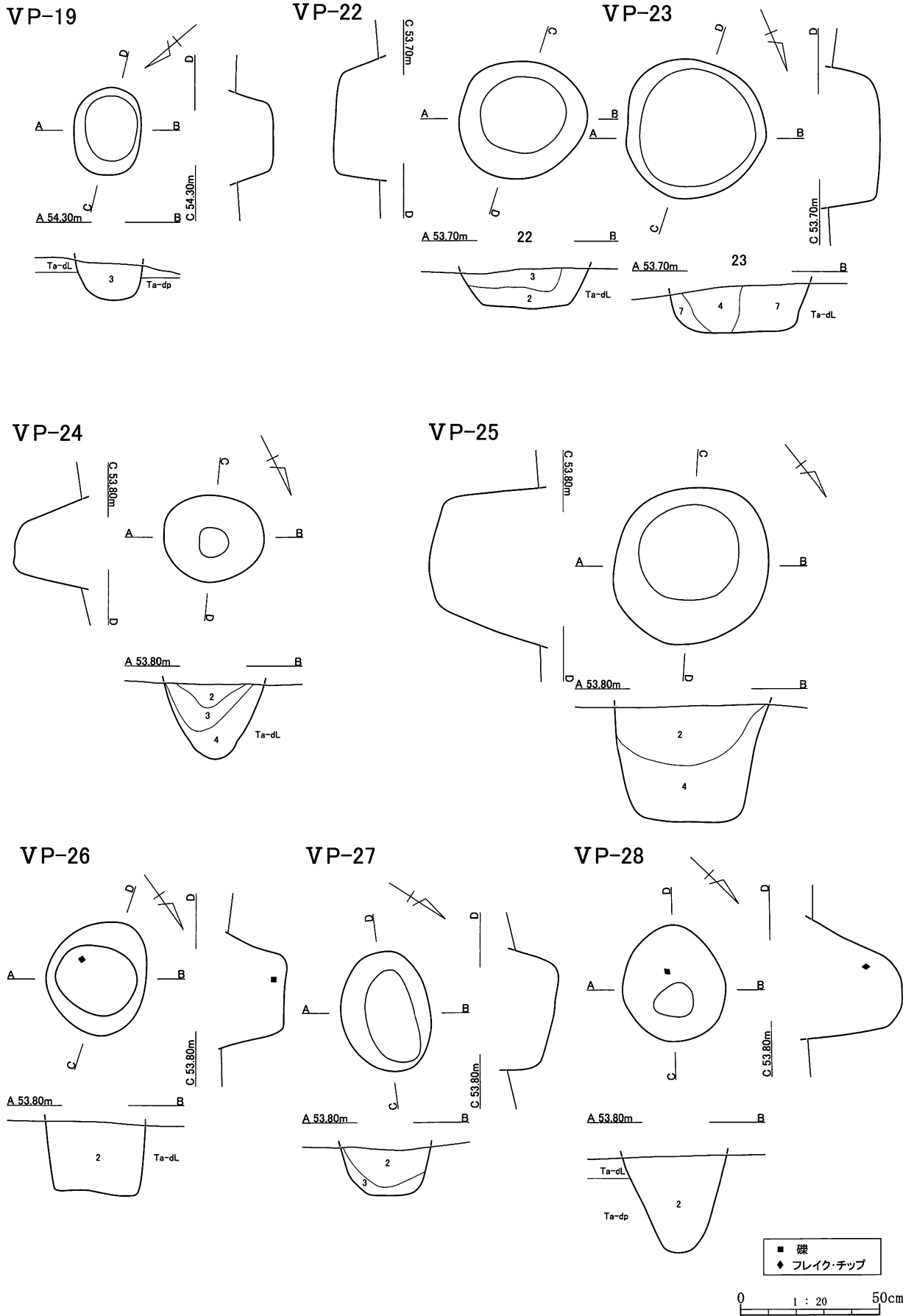
また、VP-52は調査区最東端で検出し、半截のみの調査となっているが、西側の土坑群に比べ規模が大きく同一形態を示すか不明であったためにDに分類している。

堆積状態：覆土はいずれも自然堆積によるもので、埋め戻しは認められない。覆土の主体を占めるのはV層起源の黒色土で、Ta-dパミスが多量から少量斑状に混入している。この覆土に混入するTa-dパミスの起源については不明で、可能性としてはTピットの掘り上げ土、土坑自体の掘り上げ土流入が考えられる。Tピットに関連すると考えると同時期、またはやや古いことになり、時期が特定できる手掛かりとなるが、Ta-d風化ロームやスコリアなどの混入が認められないため可能性としては低いと考えられる。そのため土坑自体の掘り上げ土は近接した分布状態から可能性は高いと考えられるが、包含層を面的に調査したところ土坑を検出した周辺には掘り上げ土を認識することはできなかった。堆積状態から帰属時期について推察すると、覆土に堆積するV層は色調がより漆黒に近く粘性も認められたため、Vb層起源と考えられ、地滑り堆積層は認められず縄文前期包含層のVc層も主体ではないため縄文時代中期から後期初頭（VP-51以外）と考えられる。

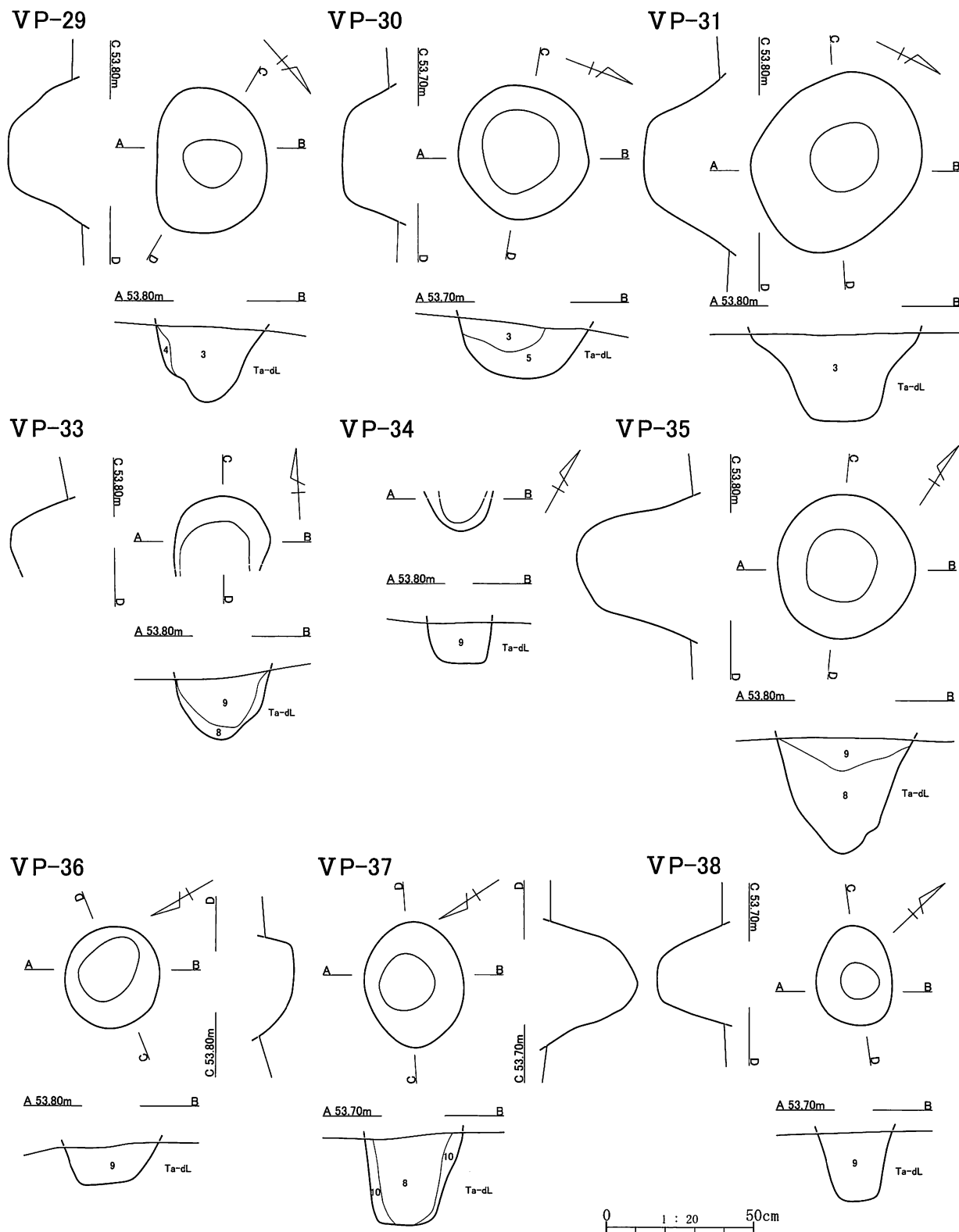
出土遺物：土坑覆土からは土器や定型石器は出土しておらず、VP-51の坑底面直上から被熱礫がまとまって出土しているのみである。この被熱礫は接合した結果、包含層の礫と接合関係にあり、流れ込みであると考えられる。



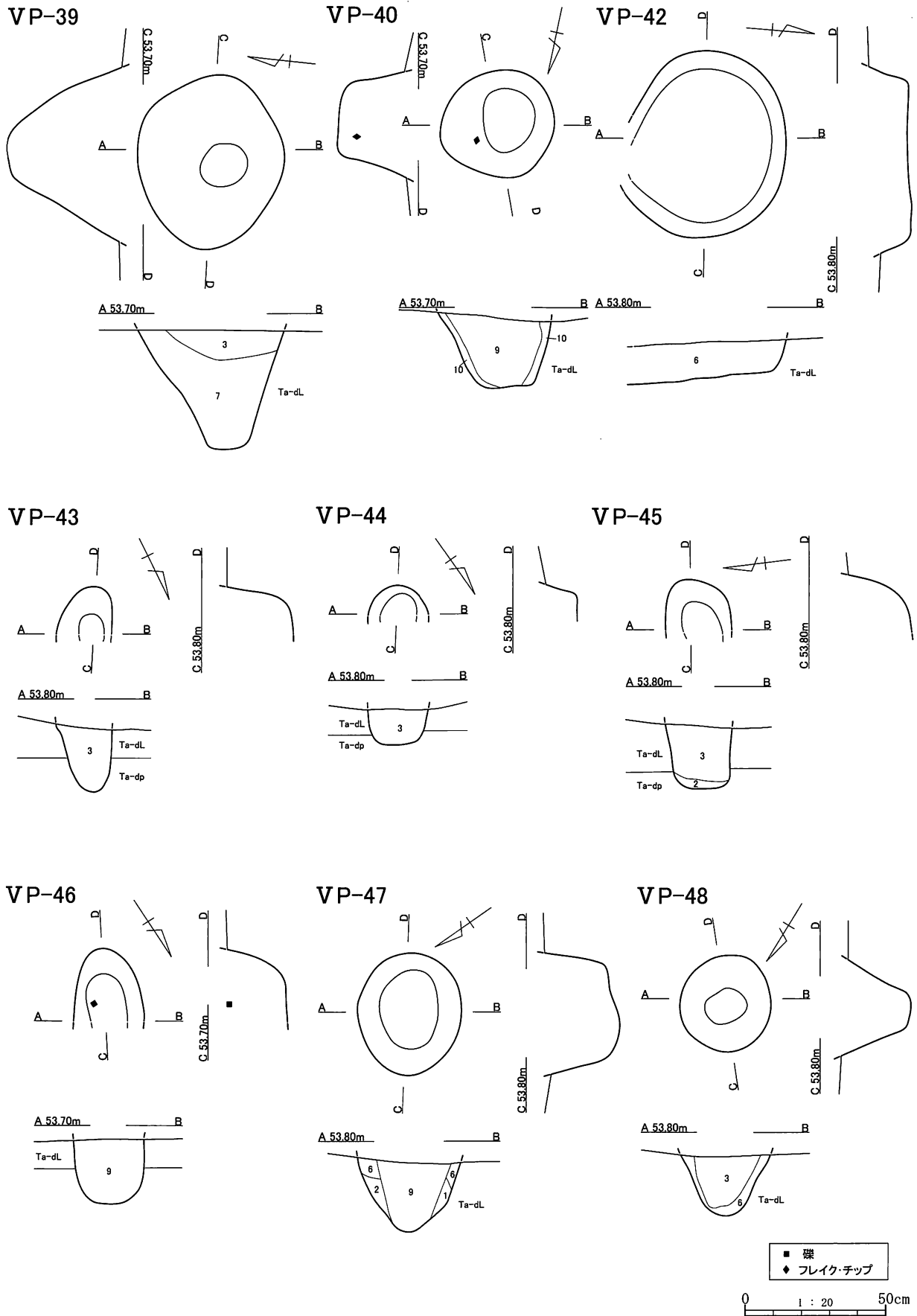
図Ⅲ-2 VP-13 ~ 18 平面及び断面図



図Ⅲ-3 VP-19・22～28 平面及び断面図

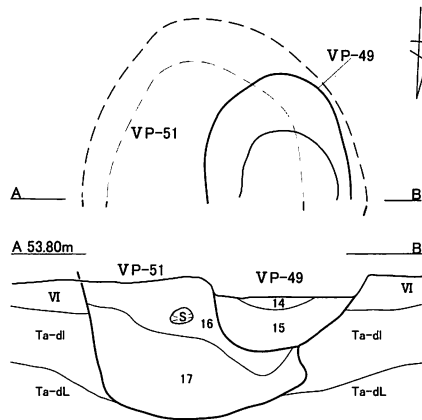


図Ⅲ-4 VP-29 ~ 31・33 ~ 38 平面及び断面図

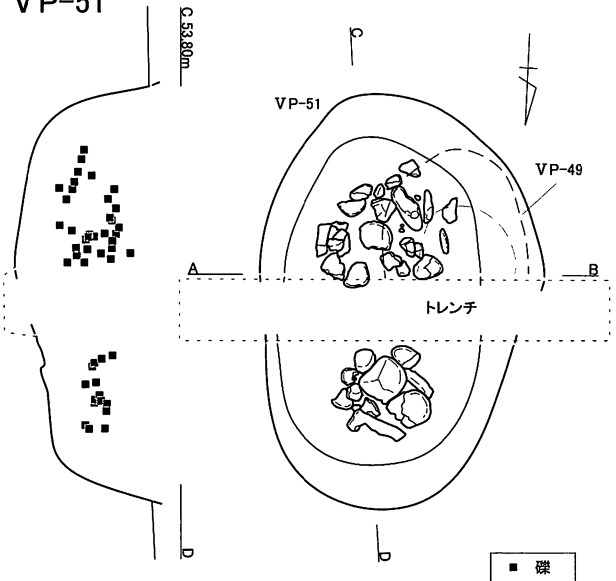


図III-5 VP-39・40・42～48平面及び断面図

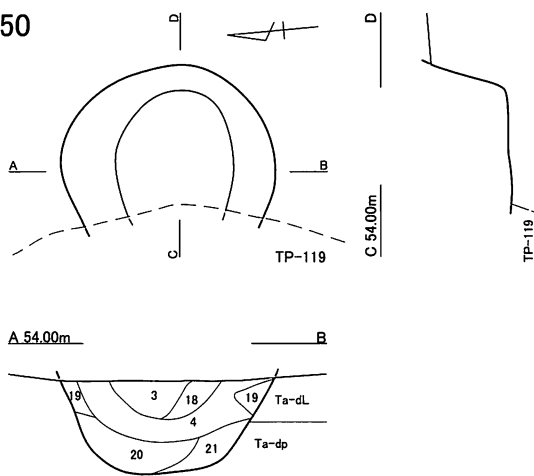
VP-49



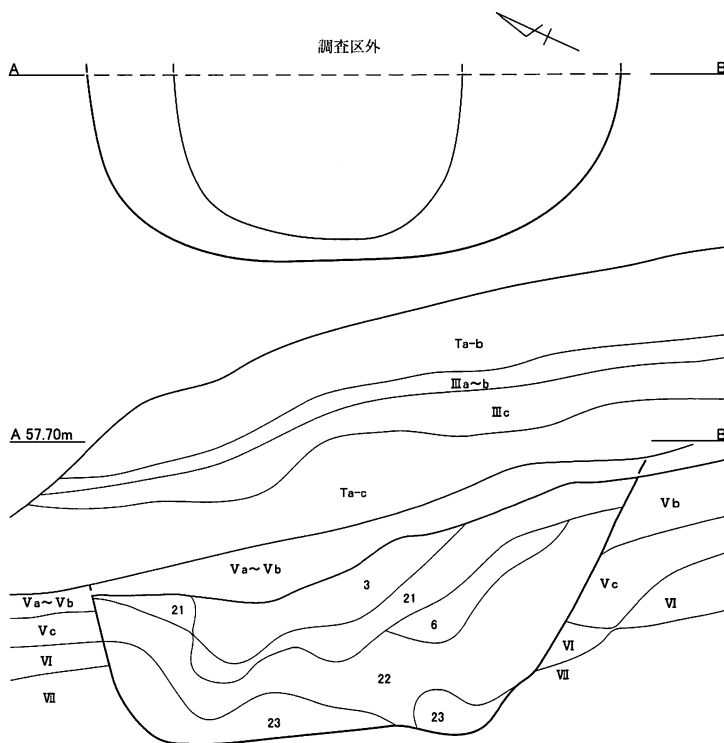
VP-51



VP-50

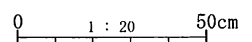


VP-52



VP-13~52

1. 10YR1.7/1 黒色 V-Ta-dp(φ3~10 均一)
2. 10YR1.7/1 黒色 V=Ta-dp(φ3~10 均一)
3. 10YR2/1 黒色 V≡Ta-dp(φ3 ↓ 均一)
4. 10YR2/3 黒褐色 V=VI-Ta-dp(φ3~10 均一)
5. 10YR4/2 灰黄褐色 VI≡Ta-dp(φ3 均一)
6. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dL=Ta-dp(φ3 均一)
7. 10YR3/3 暗褐色 V=Ta-dp(φ3~10 均一) ≡VI(均一)
8. 10YR2/1 黒色 V≡Ta-dp(φ3 斑状)
9. 10YR2/1 黒色 V≡Ta-dL(均一)
10. 10YR4/3 暗褐色 V-VI(均一) ≡Ta-dp(φ5 均一)
11. 10YR3/3 暗褐色 VI=Ta-dp(φ3 ↓ 均一)
12. 10YR4/4 褐色 Ta-dL-V(均一) ≡Ta-dp(均一)
13. 10YR5/6 明褐色 Ta-dL=VI(均一)
14. 10YR3/3 暗褐色 V+Ta-dp(φ5~10 均一) =シルト岩(均一)
15. 10YR2/2 黒褐色 V=VI(均一)
16. 10YR3/2 黒褐色 VI=V≡Ta-d(φ5 均一)
17. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Ta-dL =Ta-dp(φ5 均一)=VI(均一)
18. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp=VI(均一)
19. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp≡VI(均一)
20. 10YR2/2 黒褐色 V+Ta-dp(φ10 斑状)
21. 10YR5/6 明褐色 Ta-dp≡V(均一)
22. 10YR3/2 黒褐色 V≡Ta-dp(φ5 均一)
23. 10YR4/3 にぶい黄褐色 VI+Ta-dL



図III-6 VP-49~52 平面及び断面図

表Ⅲ-2 VP属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構 名	グリッド	層位	平面形 調査面/坑底面	調査面規模 (cm)		坑底面規模 (cm)		深さ (cm)	長軸方向	調査 面長 短比	坑底 面長 短比	出土遺物	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸						
Ⅲ-2	3-1	VP13	O-47	VI	円形/円形	55	52	30	29	33	N-0°	1.1	1.0		
Ⅲ-2	3-3	VP14	L・M-47	VI	円形/円形	50	46	31	32	24	N-21° E	1.1	1.0		
Ⅲ-2	3-5	VP15	N-47	VI	楕円形	(25)	40	9	22	36	N-60° W	-	-		
Ⅲ-2	3-6	VP16	N-47	VI	楕円形/楕円形	49	36	33	25	26	N-83° W	1.4	1.3		
Ⅲ-2	3-7	VP17	N-47	VI	楕円形/楕円形	77	51	70	40	20	N-40° W	1.5	1.8		
Ⅲ-2	3-8	VP18	N-47	VI	楕円形/長楕円形	48	45	40	17	25	N-70° W	1.1	2.4		
Ⅲ-3	4-1	VP19	N-47	VI	楕円形/楕円形	30	25	23	20	14	N-50° W	1.2	1.2		
Ⅲ-3	4-3	VP22	M-50	VI	楕円形/円形	50	42	30	30	13	N-86° E	1.2	1.0		
Ⅲ-3	4-4	VP23	M-50	VI	円形/円形	51	50	41	42	16	N-25° W	1.0	1.0		
Ⅲ-3	4-6	VP24	O-49	VI	楕円形/円形	36	30	10	10	27	N-75° W	1.2	1.0		
Ⅲ-3	4-8	VP25	O-49	VI	円形/円形	60	55	36	35	42	N-80° W	1.1	1.0		
Ⅲ-3	5-2	VP26	O-49	VI	円形/楕円形	41	36	29	25	26	N-30° W	1.1	1.2	礫	
Ⅲ-3	5-4	VP27	N・O-49	VI	楕円形/楕円形	44	31	33	17	17	N-41° E	1.4	1.9		
Ⅲ-3	5-6	VP28	O-49	VI	楕円形/楕円形	42	36	12	10	35	N-38° E	1.2	1.2	フレイク	
Ⅲ-4	5-8	VP29	N-49	VI	楕円形/楕円形	49	37	19	16	25	N-41° E	1.3	1.2		
Ⅲ-4	6-2	VP30	N-49	VI	円形/円形	45	44	28	26	18	N-80° E	1.0	1.1		
Ⅲ-4	6-4	VP31	N-49	VI	楕円形/円形	61	52	25	22	30	N-75° W	1.2	1.1		
Ⅲ-4	6-7	VP33	O-50	VI	—/—	(24)	29	(15)	24	19	N-10° E	-	-		
Ⅲ-4	6-8	VP34	O-50	VI	—/—	(12)	23	(9)	16	14	N-20° W	-	-		
Ⅲ-4	7-1	VP35	O-50	VI	円形/円形	47	46	25	24	40	N-15° E	1.0	1.0		
Ⅲ-4	7-2	VP36	O-50	VI	円形/楕円形	34	32	23	16	12	N-24° W	1.1	1.4		
Ⅲ-4	7-3	VP37	O-50	VI	楕円形/円形	41	34	19	18	30	N-86° E	1.2	1.1		
Ⅲ-4	7-5	VP38	N-50	VI	楕円形/円形	34	26	12	12	23	N-60° W	1.3	1.0		
Ⅲ-5	7-7	VP39	N-50	VI	楕円形/円形	63	52	15	15	43	N-90° E	1.2	1.0		
Ⅲ-5	8-1	VP40	N-48	VI	円形/楕円形	38	40	23	17	25	N-25° E	1.0	1.4	フレイク	
Ⅲ-5	8-3	VP42	M-49	VI	楕円形/円形	67	50	50	45	13	N-90° E	1.3	1.1		
Ⅲ-5	8-5	VP43	O-49	VI	—/—	(20)	(20)	(12)	(9)	22	N-28° W	-	-		
Ⅲ-5	8-7	VP44	O-49	VI	—/—	(14)	(21)	(9)	(12)	13	N-45° E	-	-		
Ⅲ-5	9-1	VP45	O-49	VI	—/—	(25)	(23)	(15)	(17)	22	N-80° E	-	-		
Ⅲ-5	9-3	VP46	O-49	VI	—/—	(29)	(25)	(20)	(14)	23	N-27° E	-	-	礫	
Ⅲ-5	9-5	VP47	N-51	VI	楕円形/楕円形	43	37	27	21	25	N-50° W	1.2	1.3		
Ⅲ-5	9-7	VP48	O-51	VI	円形/円形	34	32	15	12	22	N-26° E	1.1	1.3		
Ⅲ-6	10-1	VP49	N-51	VI	—/—	(32)	34	(15)	17	21	N-0°	(0.9)	(0.9)		
Ⅲ-6	10-3	VP50	O-48	VI	—/—	(45)	57	(35)	31	24	N-85° W	-	-		
Ⅲ-6	10-5	VP51	N-51	VI	楕円形/楕円形	110	76	86	52	38	N-0°	1.4	1.7	被熱礫	
Ⅲ-6	10-7	VP52	D-18	VI	—/—	(25)	(70)	(19)	(38)	25	N-60° E	-	-		

※VP-20・21・32・41は欠番

第2節 焼土

VF-21 (図Ⅲ-7 図版 11-5)

焼土は調査区東側のD-19区で1ヶ所検出したのみで周辺に遺物は出土していない。調査は包含層をVc層まで掘り下げたところ、明褐色の不整な楕円形プランを確認した。焼土周囲に付帯黒色土と思われる帯状のシミが認められたため、焼土と判断し検出写真、平面形実測した後に半截し断面確認、土層注記を行って調査終了とした。なお、焼土を確認した面、またはその上面では焼骨片や灰層等は認められない。

第3節 Tピット

Tピットは厚幌1遺跡の過去の調査において100基以上検出している(図I-4)。平成14・15年度は山側に配列が認められ、今回の調査でも特に山側に近いB1地区に多数検出しており、本遺跡でのTピット分布状態が明らかとなってきている。道路を挟んで北側のA地区にはTピットが3基と少ないことから、本流に面した段丘縁辺部には殆ど構築していないことが明らかとなった。

検出したTピットは合計で16基、溝状から長楕円形の形状が多く検出されている。時期については堆積状態の項で触れるが、地滑り堆積物が覆土上位に認められるためそれより古いことが分かっている。以下に詳述する。

形態分類

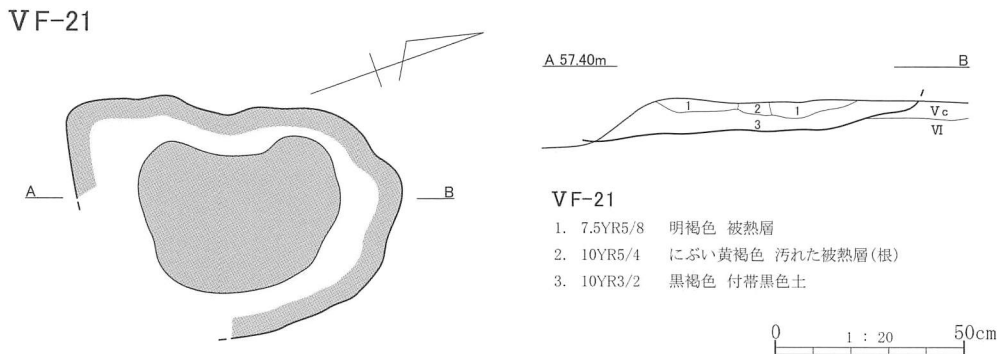
Tピットの形態分類は、坑底面平面形の長短比および杭穴の有無を基準とする『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』(苫小牧埋蔵文化財調査センター 1987)での分類案を基に、長短比数値に若干の変更を加えた厚幌1遺跡(厚真町教育委員会 2004)での分類に従い、細分を含め7タイプに分けた。

A型：長短比が8以上で、長さに対して幅が狭い溝状のタイプ。

A1型 長軸が2m以上のもの A2型 長軸が2m未満のもの

B型：長短比が4以上、8未満のもので、長楕円形のタイプ。

B1型 杭穴がないもの B2型 杭穴があるもの



図Ⅲ-7 VF-21 平面及び断面図

表Ⅲ-3 VF-21属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-7	11-2	VF-21	D-19	Vc	不整形	84	60	9	無	

C型：長短比が4未満のもので、楕円形から円形に近いもの。

C1型 杭穴がないもの C2型 杭穴があるもの

D型：長さ1m、幅0.2m前後の小規模なタイプで、深さ0.5m以下のもの

TP-104～121 (図Ⅲ-8～15 図版カラー3-2・3 12～14・21-1～8)

確認・調査：Tピットの検出はVc層からVII層上面において黒色土及び地滑り堆積物のプランで平面形を確認した。平面プランは必要に応じて検出写真を撮影し、短軸中央付近にセクションラインを設定し半截後に堆積状態の確認を行った。この時、TP-114のような溝状を呈するプランについては短軸中央にベルトを残し両側を掘り進めて調査している。短軸の写真撮影、断面実測後に完掘を行い、完掘平面形の撮影・実測、及びエレベーションの実測を行った。また、坑底で杭穴を検出したものは同様の手順で調査を行っている。

形態：分類毎の検出数は形態分類の基準を用いて細分するとA1型4基、A2型3基、B1型3基、C1型2基、C2型3基、不明1基の合計16基を検出している。TP-108については調査区外に続くため形態を不明としているが、おそらくA型に分類される。細分では特に比率が高い形態は認められなく、C型に分類されるTP-105、107、112、118の4基に逆茂木跡を確認している。

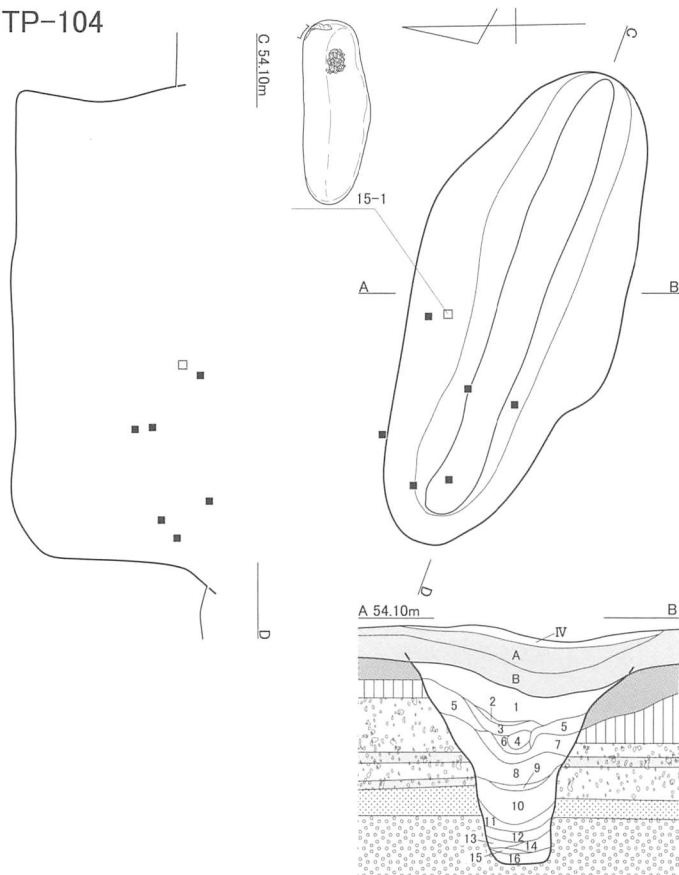
配列：今回検出したTピットについてはTP-120、121が隣接し、同一軸で検出しているが、それ以外については明確な配列や、形態分類毎の長軸方向に統一性は認められない。また、TピットがまとまっているB1地区での遺構分布状態をみると、TP-119とVP-50以外遺構の重複が認められないため、これらの遺構群は同時期もしくは非常に近い時期に構築された可能性が考えられる。

堆積状態：Tピットはいずれも崩落、埋没による自然堆積で、埋め戻しなどの人為堆積は認められない。埋没過程は基本的に坑底面に黒色土とTa-d混じりの土層が堆積し(TP-106、112以外)、覆土下位から中位にかけてはTa-dローム、パミス(再堆積含む)にV～VI層を少から多量に含んで崩落を繰り返している。これらTピットの壁面はプライマリーと再堆積のTa-dが厚く堆積しているが、崩落過程において、再堆積の方がより崩落が顕著であるなどの差異は認められない。また、TP-118の4層は黒色土主体にTa-dパミスが混入し、縦方向に細長い堆積を示しているため、坑底面検出の逆茂木跡の位置(KP01)を考えると逆茂木が腐食した痕跡と考えられる。覆土中位から上位にかけてはV層黒色土が主体で、掘り上げ土が起源と考えられるTa-dパミスが均一に含まれている。このTピット上位堆積物についてTピットがまとまっているB1地区には、広く地滑り堆積物が分布しており(図Ⅲ-1)、この堆積物下位にTピットを8基検出している(TP-104～106、111～113、116、119)。TP-104はほぼ埋没した状態でTa-d主体の地滑り堆積物に覆われており、TP-105、112は覆土上位にTa-dパミスとシルト岩を含む地滑り堆積物が流れ込んでいる。同じ地滑り堆積物でも内容物が異なっているのは、図Ⅲ-1で示したように濃淡の範囲によるものである。ここで地滑り堆積物がTピットを覆っている状況から、Tピットは地滑り以前に構築されたことが分かる。また、TP-104と105では地滑り堆積物の被覆深度が異なり、当初A型とC型では時期が異なりC型であるTP-105の方が後に構築されたため、埋没しきらないうちに地滑り堆積物が入り込んだものと考えていたが、形態が異なるA型とは崩落速度が異なるため一概には断定できない。

出土遺物(1～8)：TP-104；1はIA1に分類したたたき石で、平坦面に窪みと、上端の側縁変換点付近に狭い範囲で擦痕が認められる。擦痕は形状を変えるほどではない。

TP-105；2はⅢ群B3a類の小型深鉢で、口唇部の突引きは半截竹管工具を用いて反時計周りに施文

TP-104



TP-104

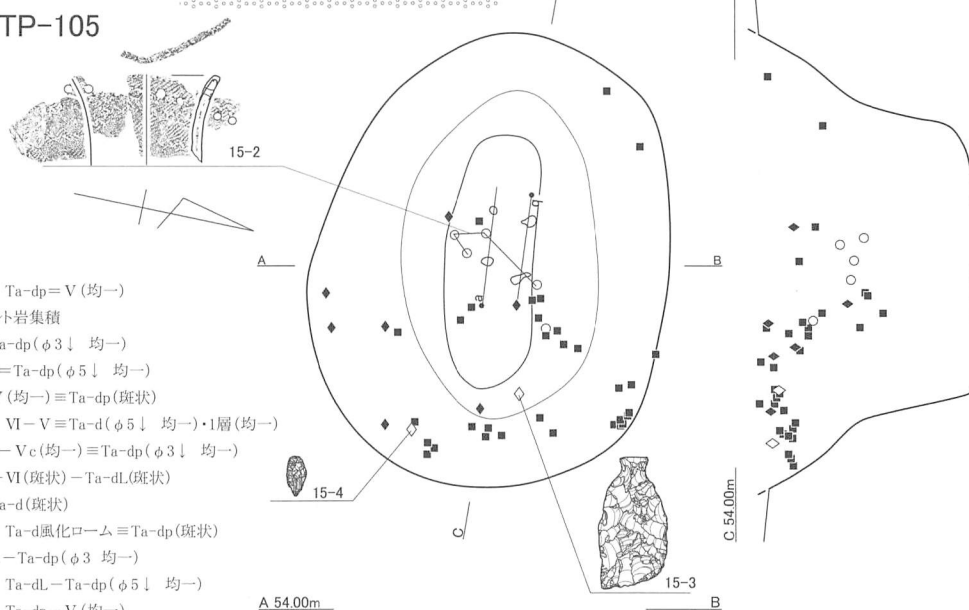
1. 10YR1.7/1 黒色 Vb-Ta-dp(φ3↓ 斑状)
2. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-dp=V(均一)
3. 10YR2/1 黒色 Vb=VI≡Ta-dL(均一)
4. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-dpブロック
5. 10YR2/3 黒褐色 VI-V(均一)≡Ta-dp(斑状)
6. 10YR2/1 黒色 Vb≡Ta-dp(斑状)
7. 10YR3/3 暗褐色 VI-Ta-dp(斑状)≡V(均一)
8. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dL=Ta-dp(均一)
9. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dL=Vb(均一)
10. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-dL-Ta-dp(均一)
11. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Ta-dL
12. N4/0 灰色 Ta-dI
13. 10YR8/6 黄褐色 Ta-d風化ローム
14. 10YR4/6 褐色 Ta-dL=Ta-dp(均一)
15. N4/0 灰色 Ta-dI
16. 10YR2/2 黒褐色 V=Ta-dL≡15層(均一)

TP-104. A・B

- A. 10YR3/2 黒褐色 V-Ta-dp(地滑り)
- B. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp(地滑り)

- 土器
- 礫石器
- ◇ 礫
- ◆ 剥片石器
- ◆ フレイク・チップ

TP-105



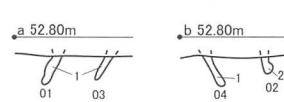
TP-105

1. 7.5YR5/4 にぶい褐色 Ta-dp=V(均一)
2. 10YR8/2 灰白色 シルト岩集積
3. 7.3YR2/1 黒色 V=Ta-dp(φ3↓ 均一)
4. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb=Ta-dp(φ5↓ 均一)
5. 10YR4/6 褐色 VI=V(均一)≡Ta-dp(斑状)
6. 7.5YR5/3 にぶい褐色 VI-V≡Ta-d(φ5↓ 均一)・1層(均一)
7. 10YR3/2 黒褐色 Vb-Vc(均一)≡Ta-dp(φ3↓ 均一)
8. 10YR3/3 暗褐色 V-VI(斑状)-Ta-dL(斑状)
9. 10YR4/6 褐色 VI≡Ta-d(斑状)
10. 7.5YR6/4 にぶい橙色 Ta-d風化ローム≡Ta-dp(斑状)
11. 7.5YR6/8 橙色 Ta-dL-Ta-dp(φ3 均一)
12. 10YR6/3 にぶい橙色 Ta-dL-Ta-dp(φ5↓ 均一)
13. 10YR6/3 にぶい橙色 Ta-dp-V(均一)
14. N4/0 灰色 Ta-dI
15. 10YR8/6 黄褐色 Ta-d風化ローム
16. 7.5YR7/8 黄褐色 Ta-dp-V≡VI(均一)

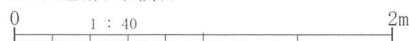
TP-105. KP01~04

1. 10YR3/3 暗褐色 V-VI-Ta-dp(φ3↓ 均一)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 V=Ta-dL-Ta-dp(φ3↓ 均一)

TP-105. KP01 ~ 04

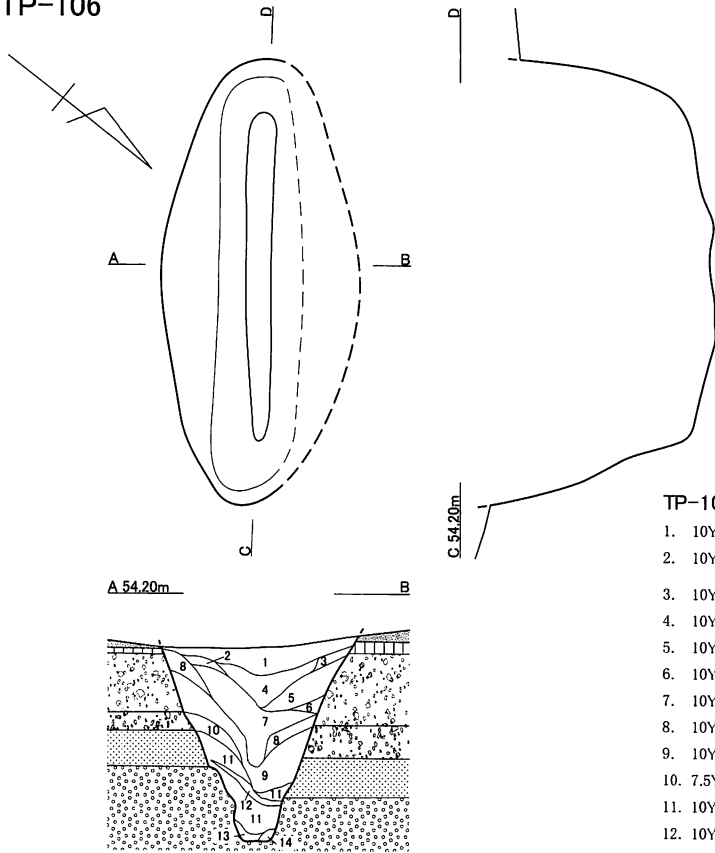


■ : 地滑り堆積物



図Ⅲ-8 TP-104・105 平面及び断面図

TP-106



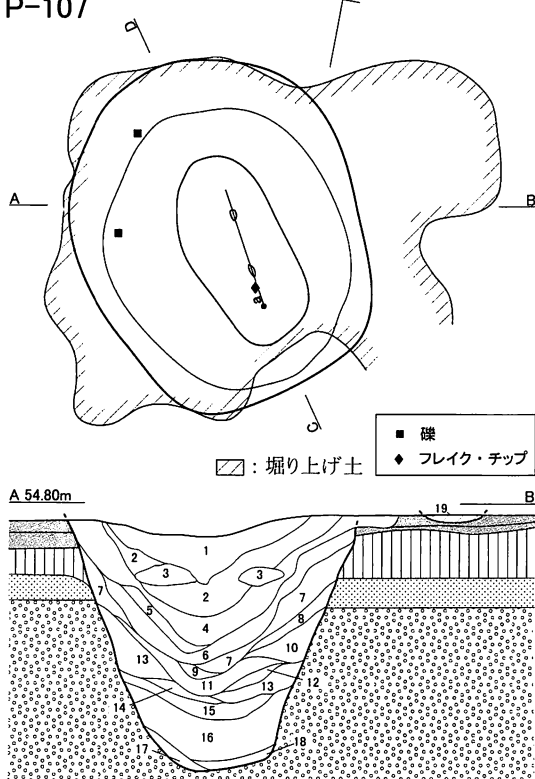
TP-106

1. 7.5YR1.7/1 黒色 Vc≡Ta-dp(φ3↓)
2. 7.5YR3/3 暗褐色 VI=Vc≡Ta-dp(φ5↓)
3. 10YR4/4 褐色 VI≡Vc≡Ta-dp(φ5↓)
4. 7.5YR3/2 黒褐色 Vc-VI-Ta-dp(φ5↓ 均一)
5. 7.5YR4/3 褐色 VI-Vc-Ta-dp(φ5↓ 均一)
6. 7.5YR6/4 にぶい橙色 VI-Ta-dp(φ5↓ 均一)
7. 7.5YR3/3 暗褐色 VI=Vc≡Ta-dp(φ5↓)
8. 7.5YR6/4 にぶい橙色 VI-Ta-dp(φ10↓ 均一)
9. 7.5YR6/6 褐色 Ta-dL+Ta-dp(φ10↓ 均一)
10. 10YR6/3 にぶい黄褐色 Ta-dL-Ta-dp(φ5↓ 斑状)
11. N4/0 灰色 Ta-d1=Ta-dL(均一)
12. 7.5YR5/2 灰褐色 Ta-d1+Ta-dp(φ10↓ 均一)
13. 10YR8/6 黄褐色 Ta-d風化ローム
14. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-d風化ローム-Ta-dp(φ5↓ 均一)

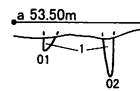
TP-107

1. 10YR2/1 黒色 V=Ta-dp(φ10↓ 均一)
2. 10YR3/3 暗褐色 V-Ta-dp(φ20↓ 均一)=VI(均一)
≡シルト岩(φ3↓ 均一)
3. 10YR4/2 灰黄褐色 V≡Ta-dp(φ3↓ 均一)
4. 10YR1.7/1 黒色 V-Ta-dp(φ10↓ 均一)=シルト岩(φ3↓ 均一)
5. 10YR2/2 黒褐色 V-Ta-dp(φ5↓ 均一)=VI(均一)
6. 10YR2/1 黒色 V≡Ta-dp(φ3↓ 均一)
7. 10YR4/4 褐色 VI≡Ta-d1(均一)・シルト岩(φ3↓ 均一)
8. 10YR5/2 灰黄褐色 Ta-d1=VI(均一)
9. 10YR4/6 褐色 Ta-d1=Ta-dp(φ5↓ 均一)
10. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp
11. 10YR3/3 暗褐色 VI≡Ta-dp(φ10↓ 均一)
12. 10YR5/2 灰黄褐色 VI=Ta-d1(均一)
13. 10YR5/8 明褐色 Ta-dp崩落
14. 10YR2/2 黒褐色 V=Ta-dp(均一)
15. 10YR3/1 黒褐色 V=VI≡Ta-dp(φ3↓ 均一)
16. 10YR4/6 褐色 汚れたTa-dp
17. 10YR2/2 黒褐色 V+VI-Ta-dp(φ3↓ 均一)
18. 10YR3/2 黒褐色 V=Ta-dp(φ3↓ 均一)
19. 10YR2/1 黒色 V=Ta-dp(φ10↓ 均一) 掘り上げ土

TP-107

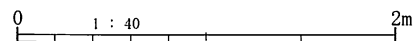


TP-107. KP01・02



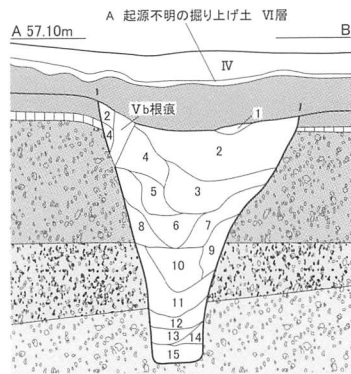
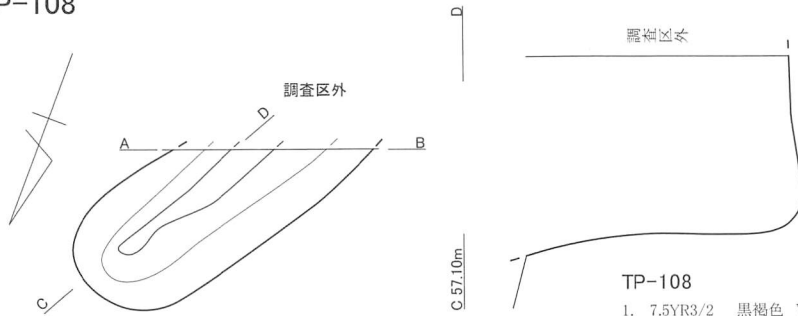
TP-107. KP01・02

1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 Ta-dL≡V-Ta-dp(φ5 均一)



図Ⅲ-9 TP-106・107 平面及び断面図

TP-108



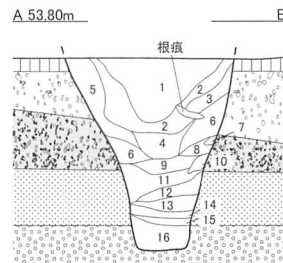
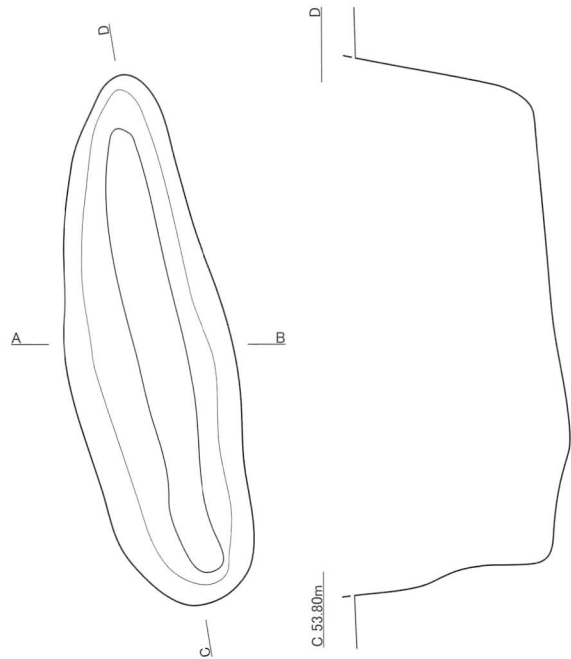
TP-108

1. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb=Ta-dp(均一)
2. 10YR2/1 黒色 Vb-VI(均一)=Ta-dp≡シルト岩(φ3 均一)
3. 10YR3/2 黒褐色 Vc≡Ta-dp≡シルト岩(均一)
4. 10YR5/8 黄褐色 Ta-dL=V(斑状) 根痕で乱れる
5. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dL=Ta-dp(均一)
6. 10YR7/6 明黄褐色 Ta-dL≡シルト岩(均一)
7. 7.5YR4/6 褐色 Ta-dL・Ta-dp-VI(均一)
8. 10YR6/4 にぶい黄橙色 Ta-dL=シルト岩≡VI(均一)
9. 10YR7/6 明黄褐色 Ta-dL崩落
10. 10YR3/3 暗褐色 V-VI・Ta-dp(均一)
11. 10YR5/2 灰黄褐色 Ta-dL-シルト岩(φ5 均一)
12. 10YR4/2 灰黄褐色 Ta-dL=V(ラミナ状)
13. 10YR3/2 黒褐色 V-Ta-dp(均一)
14. 10YR2/1 黒色 V=砂≡Ta-dp(均一)
15. 10YR3/3 暗褐色 V-Ta-dp・砂(均一)

TP-110

TP-110

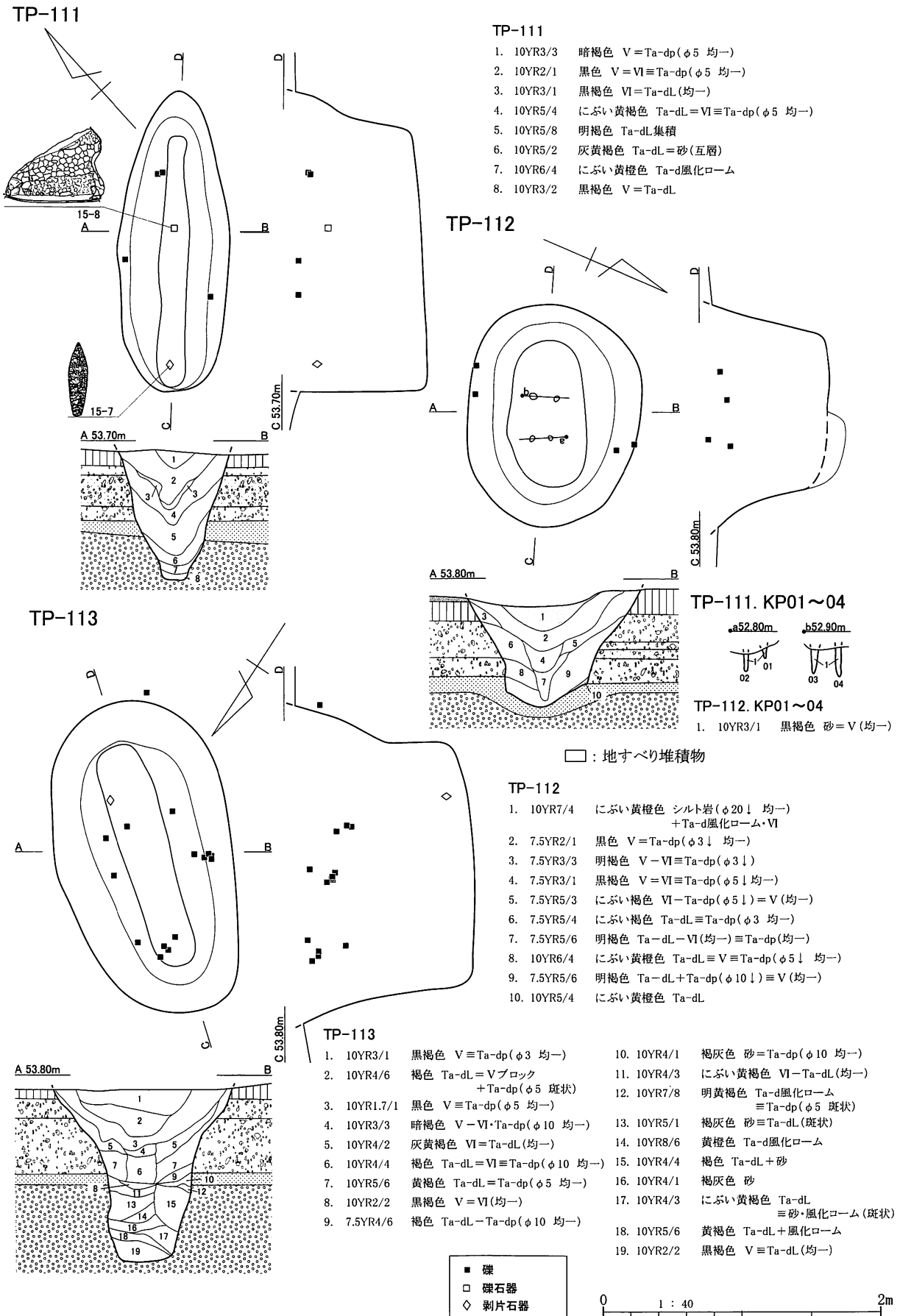
1. 10YR2/1 黒色 V=Ta-dp(φ5 均一)
2. 10YR5/6 黄褐色 VI=Ta-dLp(φ3 均一)
3. 10YR5/8 黄褐色 Ta-dL=VI(均一)
4. 7.5YR4/6 褐色 Ta-dL-VI(均一)
5. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-dL=VI・Ta-dp(φ3 均一)
6. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp-Ta-dL(斑状)
7. 10YR5/1 褐灰色 Ta-dL+砂
8. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp集積
9. 10YR3/2 黒褐色 V-Ta-dL(均一)
10. 10YR4/1 褐灰色 砂
11. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-dL+Ta-dp(φ10 均一)
12. 10YR5/1 褐灰色 砂
13. 10YR4/6 褐色 Ta-dp
14. 10YR6/1 褐灰色 砂
15. 10YR2/2 黒褐色 V=VI≡Ta-dp(φ5 均一)
16. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Ta-d風化ローム≡V(均一)



※出土遺物ドットについては
点なしの為記載していない。

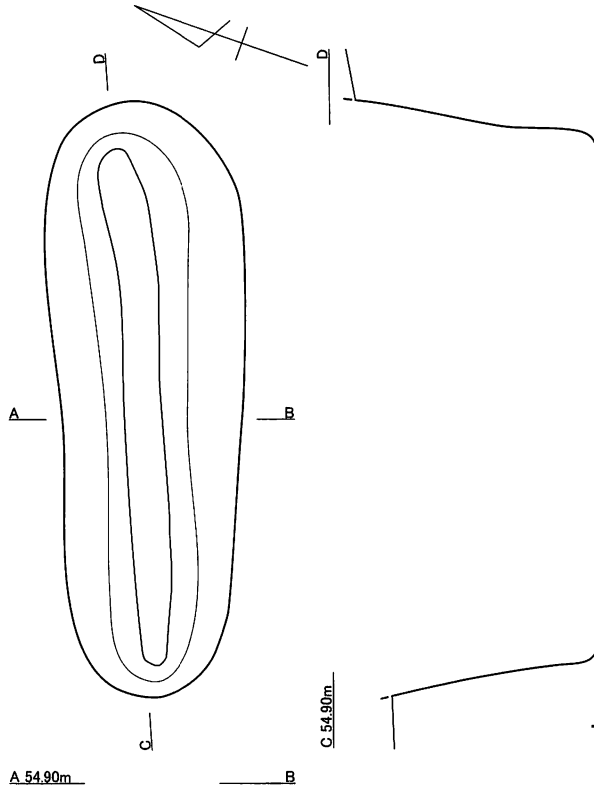


図Ⅲ-10 TP-108・110 平面及び断面図



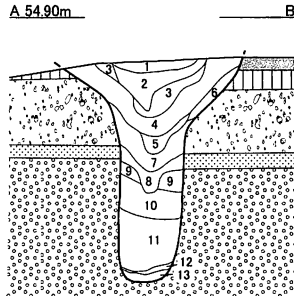
図III-11 TP-111 ~ 113 平面及び断面図

TP-114

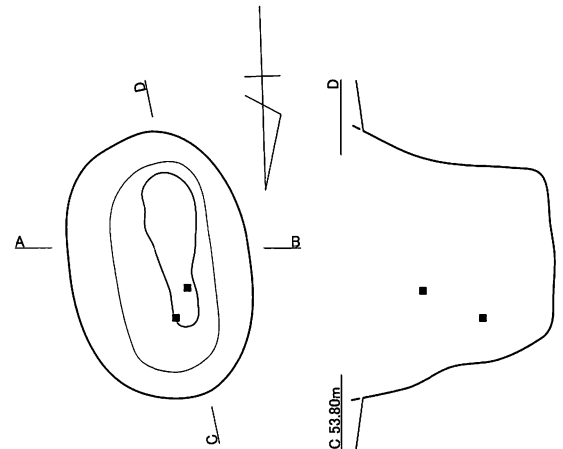


TP-114

1. 10YR7/8 黄橙色 Ta-dL≡VI(斑状)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 VI+Vc≡Ta-dp(φ5 均一)
3. 10YR3/3 暗褐色 Vc≡Ta-dp(φ3 均一)
4. 10YR1.7/1 黒色 V≡Ta-dp(φ5 斑状)
5. 10YR4/2 灰黄褐色 Ta-dL=VI(均一)
6. 10YR3/1 黒褐色 Vc≡Ta-dL(斑状)
7. 10YR6/6 明黄褐色 Ta-dL=Vc(均一)
8. 10YR4/1 褐色 Ta-dL≡Ta-dp(均一)
9. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp
10. 10YR4/1 褐色 Ta-dL≡Ta-dp(φ3 均一)
11. 7.5YR4/4 褐色 Ta-dp=砂(均一)
12. 10YR2/2 黒褐色 V=Ta-dp(φ3↓ 均一)
13. 10YR4/6 褐色 Ta-dp(φ5↓)≡V(均一)

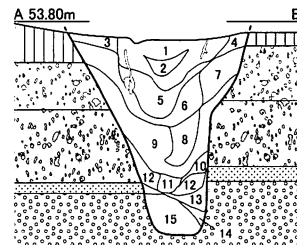


TP-116

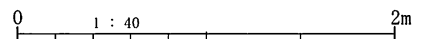


TP-116

1. 10YR2/1 黒色 V≡Ta-dp(φ3 均一)
2. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp-V(均一)
3. 10YR2/2 黒褐色 VI=V(均一)
4. 10YR4/4 褐色 VI=Ta-dp(φ5 均一)
5. 10YR2/1 黒色 V=Ta-dp(φ5 均一)
6. 10YR3/1 黒褐色 V=VI≡Ta-dp(φ5~10 均一)
7. 10YR5/8 明黄褐色 汚れたTa-dL≡Ta-dp(φ5 均一)
8. 10YR5/6 黄褐色 Ta-dL=V·Ta-dp(φ5 均一)
9. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dL=Ta-dp(φ5 均一)
10. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp
11. 7.5YR4/6 褐色 Ta-dp=Ta-dL·V(均一)
12. 10YR6/4 にぶい黄橙色 Ta-dL=Ta-dp(φ5 均一)
13. 10YR8/6 黄橙色 Ta-d風化ローム
14. 10YR6/6 明黄褐色 汚れたTa-d風化ローム
15. 10YR3/4 暗褐色 Ta-dL=Ta-dp(φ10)≡風化ローム·V(均一)

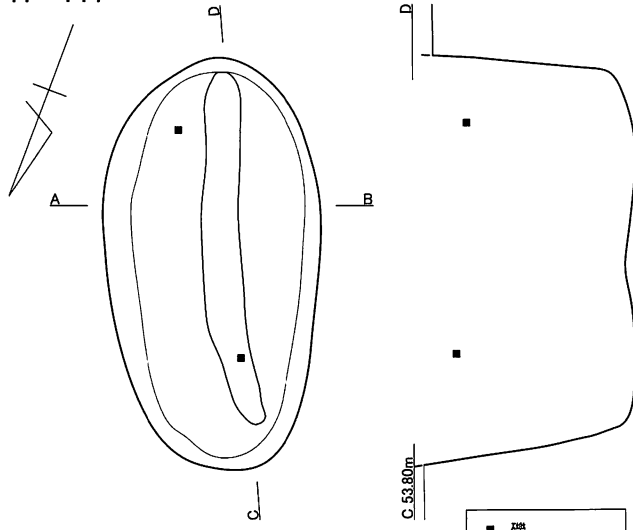


■ 礎



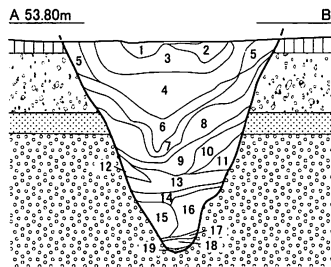
図Ⅲ-12 TP-114・116 平面及び断面図

TP-117

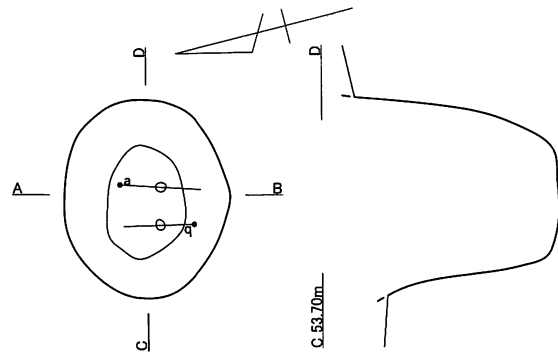


TP-117

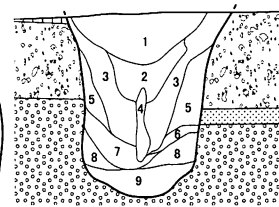
1. 10YR2/2 黒褐色 V-VI≡Ta-dp(φ3 均一)
2. 10YR8/8 黄橙色 Ta-dL
3. 10YR4/6 褐色 Ta-dL-VI(均一)≡Ta-dp(φ5 均一)
4. 10YR2/1 黒色 V≡Ta-dp(φ3 均一)
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 VI=V(均一)
6. 10YR3/3 暗褐色 Ta-dL=Ta-dp(φ10)・VI(均一)
7. 10YR3/3 暗褐色 VI=V(均一)≡Ta-dL(均一)
8. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dL+Ta-dp
9. 10YR7/6 明黄褐色 Ta-dL≡Ta-dp(φ5 均一)
10. N4/0 灰色 砂
11. 10YR3/1 黒褐色 V-Ta-dp(φ5 均一)・砂(均一)
12. 10YR5/6 黄褐色 Ta-dL+Ta-dp=V(均一)
13. 10YR2/2 黒褐色 V=Ta-dp(φ10 均一)≡VI(均一)
14. N4/0 灰色 砂
15. 10YR8/6 黄橙色 Ta-d風化ローム=砂(均一)
16. 10YR4/6 褐色 Ta-dL=砂(均一)・V・風化ローム(斑状)
17. 10YR2/1 黒色 V
18. 10YR5/6 黄褐色 Ta-d風化ローム
19. 10YR3/3 暗褐色 Ta-d=V(均一)



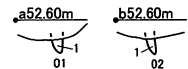
TP-118



A 53.60m



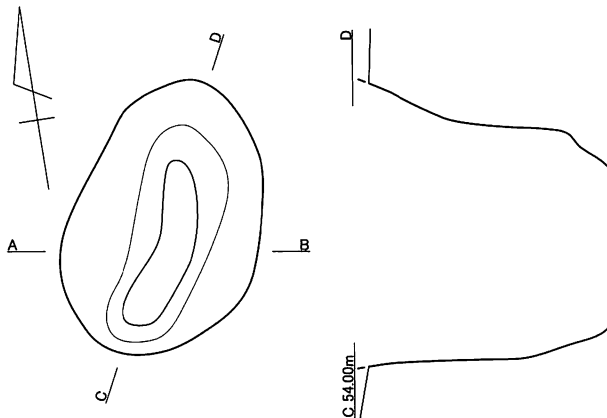
TP-118.KP01・02



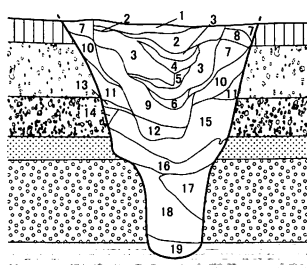
TP-118.KP01・02

1. 10YR4/2 灰黄褐色 Ta-d=Ta-dp(φ3! 均一)

TP-119

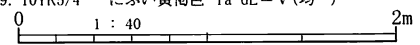


A 54.00m



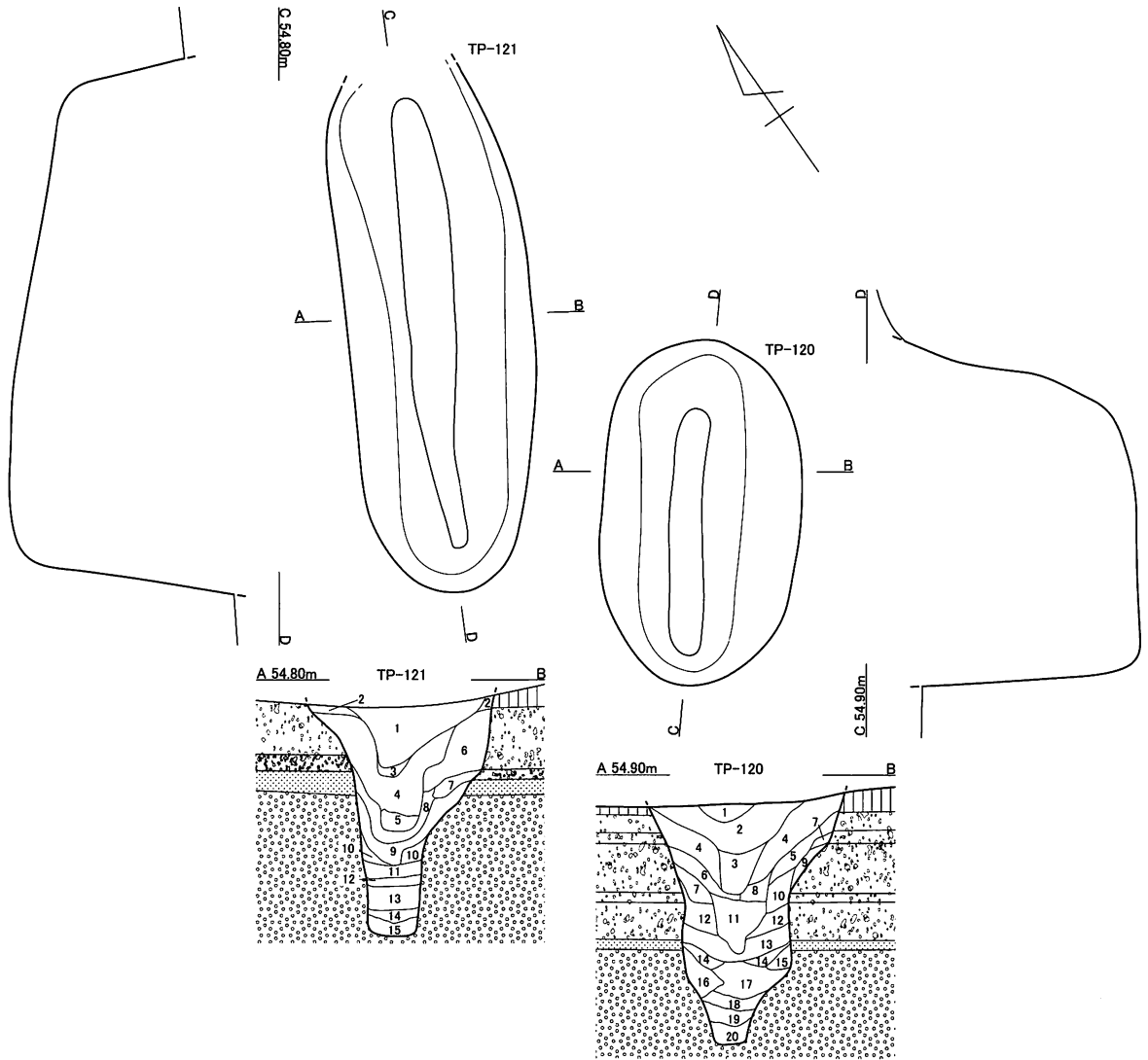
TP-119

- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1. 10YR2/1 黒色 V=Ta-dp(φ5 均一) | 10. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp(φ10)=Ta-dL≡VI(均一) |
| 2. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dp | 11. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dpブロック |
| 3. 10YR2/2 黒褐色 V=Ta-dp(φ5 均一)≡VI(均一) | 12. 10YR3/3 暗褐色 V-VI-Ta-dL(斑状) |
| 4. 10YR4/6 褐色 Ta-dL=VI(均一) | 13. 10YR6/4 にぶい黄褐色 Ta-dL |
| 5. 10YR5/8 明褐色 Ta-dp(φ5)≡V(均一) | 14. 5B5/1 青灰色 砂(細~粗) |
| 6. 10YR3/2 黒褐色 V-VI(均一)≡Ta-dp(φ5 均一) | 15. 10YR5/6 黄褐色 Ta-dL=Ta-dp(斑状) |
| 7. 10YR5/3 にぶい黄褐色 VI=Ta-dp(φ10 均一) | 16. 5B5/1 青灰色 砂(細) |
| 8. 10YR2/2 黒褐色 V=VI-Ta-dp(φ5 均一) | 17. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Ta-dp(φ5)=V・砂(均一) |
| 9. 10YR4/4 褐色 VI-Ta-dp(φ5)・Ta-dL(均一) | 18. 10YR5/1 褐灰色 砂=Ta-dL(均一) |
| | 19. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Ta-dL=V(均一) |



図III-13 TP-117 ~ 119 平面及び断面図

TP-120・121

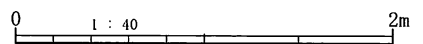


TP-120

1. 10YR5/6 黄褐色 Ta-dL = V (斑状)
2. 10YR2/2 黒褐色 V ≡ Ta-dp (φ 3 均一)
3. 10YR3/2 黒褐色 VI - Ta-dL (均一)
4. 10YR5/6 黄褐色 VI ≡ Ta-dL (均一)
5. 10YR5/8 黄褐色 Ta-dL = Ta-dp (φ 3 均一)
6. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-dL (白色ローム多)
7. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dL
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色 VI + Ta-dL + Ta-dp (φ 3 均一)
9. 10YR6/6 明黄褐色 Ta-dL
10. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-dL = Ta-dp (φ 3 ↓ 均一)
11. 7.5YR4/4 褐色 Ta-dL ≡ VI (均一)
12. 10YR7/8 黄橙色 風化ローム
13. 10YR6/6 明黄褐色 風化ローム + Ta-dp (φ 3 均一)
14. 10YR5/1 褐灰色 細砂粒
15. 10YR4/1 褐灰色 砂
16. 10YR7/8 黄橙色 Ta-dL
17. 10YR5/6 黄褐色 Ta-dL ≡ V (均一)
18. 10YR3/2 黒褐色 砂 ≡ Ta-dL・V (均一)
19. 10YR4/4 褐色 Ta-dL = V (均一)
20. 10YR5/6 黄褐色 Ta-dL ≡ V (均一)

TP-121

1. 10YR2/2 黒褐色 V ≡ VI・Ta-dp (φ 5)・シルト岩(均一)
2. 10YR4/2 灰黄褐色 VI = Ta-dL (均一)
3. 10YR3/3 暗褐色 V - VI ≡ Ta-dL (φ 5 均一)
4. 10YR5/6 黄褐色 Ta-dL ≡ VI (均一)
5. 10YR5/2 灰黄褐色 VI - Ta-dL (均一)
6. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-dL 崩落
7. 10YR7/1 灰白色 Ta-dL = Ta-dp (φ 10 均一)
8. 10YR6/2 灰黄褐色 Ta-dL ≡ VI (斑状)
9. 10YR4/2 灰黄褐色 Ta-d1 = VI (斑状)
10. 10YR4/6 褐色 Ta-dL = Ta-d2 (均一)
11. 7.5YR4/6 褐色 Ta-dL = Ta-d1 ≡ VI (均一)
12. 10YR3/1 黒褐色 Ta-d1 = Ta-dL (均一)
13. 7.5YR4/4 褐色 Ta-dL + Ta-dp (φ 10 均一)
14. 7.5YR3/3 暗褐色 Ta-dp = V (均一)
15. 7.5YR4/6 褐色 Ta-dp ≡ V (均一)



図Ⅲ-14 TP-120・121 平面及び断面図

表Ⅲ-4 Tピット属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	分類	平面形	グリッド	調査面 層位	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸方向	抗跡	調査面長 短比	坑底面長 短比	備考
				調査面/坑底面			長軸	短軸	長軸	短軸						
Ⅲ-8	12-1	TP104	A1	楕円形/溝状	N-50	VbL	264	112	244	20	104	N-22° W	-	2.4	12.2	
Ⅲ-8	12-3	TP105	C2	楕円形/楕円形	N-50	V	240	188	136	48	104	N-83° E	4	1.3	2.8	
Ⅲ-9	12-5	TP106	A2	楕円形/溝状	O-47	VI	236	104	172	12	104	N-50° E	-	2.3	14.3	
Ⅲ-9	13-1	TP107	C2	楕円形/楕円形	M-44・45	VbL	184	136	104	52	124	N-40° W	2	1.4	2.0	
Ⅲ-10	13-3	TP108	-	- / -	H-27・28	Vc	(164)	(72)	(104)	(12)	124	N-30° E	-	-	-	
Ⅲ-10	13-5	TP110	A1	楕円形/溝状	M-48	VI	284	88	236	28	104	N-10° E	-	3.2	8.4	
Ⅲ-11	14-1	TP111	A2	楕円形/溝状	M-49	VI	216	80	176	20	96	N-43° E	-	2.7	8.8	
Ⅲ-11	14-3	TP112	C2	楕円形/楕円形	O-50	VI	160	124	104	56	72	N-65° E	4	1.3	1.9	
Ⅲ-11	14-5	TP113	B1	楕円形/長楕円形	M-50・51 N-50	VI	228	128	164	36	124	N-55° W	-	1.8	4.6	
Ⅲ-12	15-1	TP114	A1	楕円形/溝状	L-44	VI	316	100	276	20	116	N-65° E	-	3.2	13.8	
Ⅲ-12	15-3	TP116	C1	楕円形/楕円形	N-50	VI	140	96	80	24	104	N-10° W	-	1.5	3.3	
Ⅲ-13	15-5	TP117	A2	楕円形/溝状	N-50	VI	216	116	184	20	92	N-25° E	-	1.9	9.2	
Ⅲ-13	16-1	TP118	C1	楕円形/楕円形	H-44	VI	104	88	60	40	96	N-75° W	2	1.2	1.5	
Ⅲ-13	16-3	TP119	B1	楕円形/長楕円形	O-48	VI	152	100	92	20	124	N-25° E	-	1.5	4.6	
Ⅲ-14	16-5	TP120	B1	楕円形/長楕円形	F-34・35	VI	188	108	132	20	128	N-36° E	-	1.7	6.6	
Ⅲ-14	17-1	TP121	A1	楕円形/溝状	E・F-35	VI	(288)	100	248	28	124	N-30° E	-	-	8.9	

※TP-109・115は欠番

表Ⅲ-5 Tピット逆茂木跡属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	平面形	調査面 層位	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			調査面/坑底面		上端	下端	深さ			
Ⅲ-8	12-3	TP-105	01	VIIIb	6	4	20	25	打込み	
			02		4	6	8	20		
			03		4	2	12	26		
			04		4	4	16	27		
Ⅲ-9	13-1	TP-107	01	VIIIb	6	2	4	10	打込み	
			02		6	2	20	10		
Ⅲ-11	14-3	TP-112	01	VIIIa	4	2	6	0	打込み	
			02		2	2	12	0		
			03		4	2	16	0		
			04		4	2	20	0		
Ⅲ-13	16-1	TP-118	01	VIIIb	6	2	8	15	打込み	
			02		4	2	8	28		

表Ⅲ-6 Tピット出土土器属性表

※記述内容詳細については、表Ⅲ-11 包含層出土土器属性表を参照

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	部位	遺物番号/ 調査区/層位	器形等	文様	胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
Ⅲ-15-2	21-2	JP36 A	Ⅲ B3a	口縁~ 胴部	45487・46632他2 点/TP-105/4	小突起・外傾-隅丸 角状/やや外傾	突引文(内)-LR斜行縄文・円形 刺突文/LR斜行縄文・綾線文	繊維極少量 砂粒少量	補修孔
Ⅲ-15-5	21-5	JP43 A	Ⅱ A2b	胴部	49992/TP-110/1	やや外傾	RL斜行縄文	繊維多量 砂粒少量	

表Ⅲ-7 Tピット出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物名	遺物 番号	遺構名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-15-1	21-1	-	たたき石	45400	TP-104	I A1	1	145.90	53.10	30.00	300.00	Sa.	擦り面有
Ⅲ-15-3	21-3	-	つまみ付きナイフ	45490	TP-105	A3	4	69.44	36.77	9.39	21.38	Obs.	
Ⅲ-15-4	21-4	-	石 錐	45814	TP-105	E	4	20.85	10.37	3.90	0.92	Obs.	
Ⅲ-15-6	21-6	-	たたき石	50059	TP-110	ⅡB3	1	(78.40)	70.70	43.80	310.00	Sa.	
Ⅲ-15-7	21-7	-	石 槍	49896	TP-111	ⅡB2	1	51.00	13.40	3.60	2.22	Obs.	
Ⅲ-15-8	21-8	-	石 冠	49996	TP-111	D	1	(105.50)	60.20	(76.70)	570.00	And.	

されている。口縁部直下の円形刺突文は同心円ではないことから、同様の工具を用いて円形になるよう刺突した可能性が考えられる。3はA3類としたつまみ付きナイフで、側縁調整後に下端部の調整を行っている。4は他石器からの転用としたドリルで機能部は使用により摩滅が認められる。これらの遺物は4層出土の、地滑り堆積より古い時期に流れ込んだもので、土器型式から時期的な矛盾はない。TP-110;5はⅡ群A2類の胴部片で縦走気味の地文で繊維を多量に含んでいる。破片の径から大型の深鉢であるが底部形状は不明。6はⅡB3類とした縁辺部に敲打が認められるたたき石で、側縁の剥がれは敲打の影響と思われる。TP-111;7はⅡB2類に分類した柳葉形の石槍で、両面共に平行剥離で薄く作出される。規格から石槍に分類しているが、薄手で石鏃としての用途に適していると考えられる。8は北海道式石冠の頂部欠損品で、両端部には敲打に伴う剥離が認められる。同資料は町内で発掘を行っているヲチャラセナイ遺跡出土の安山岩(厚真町 2014印刷中)と同一石材であると考えられる。

第4節 遺物集中

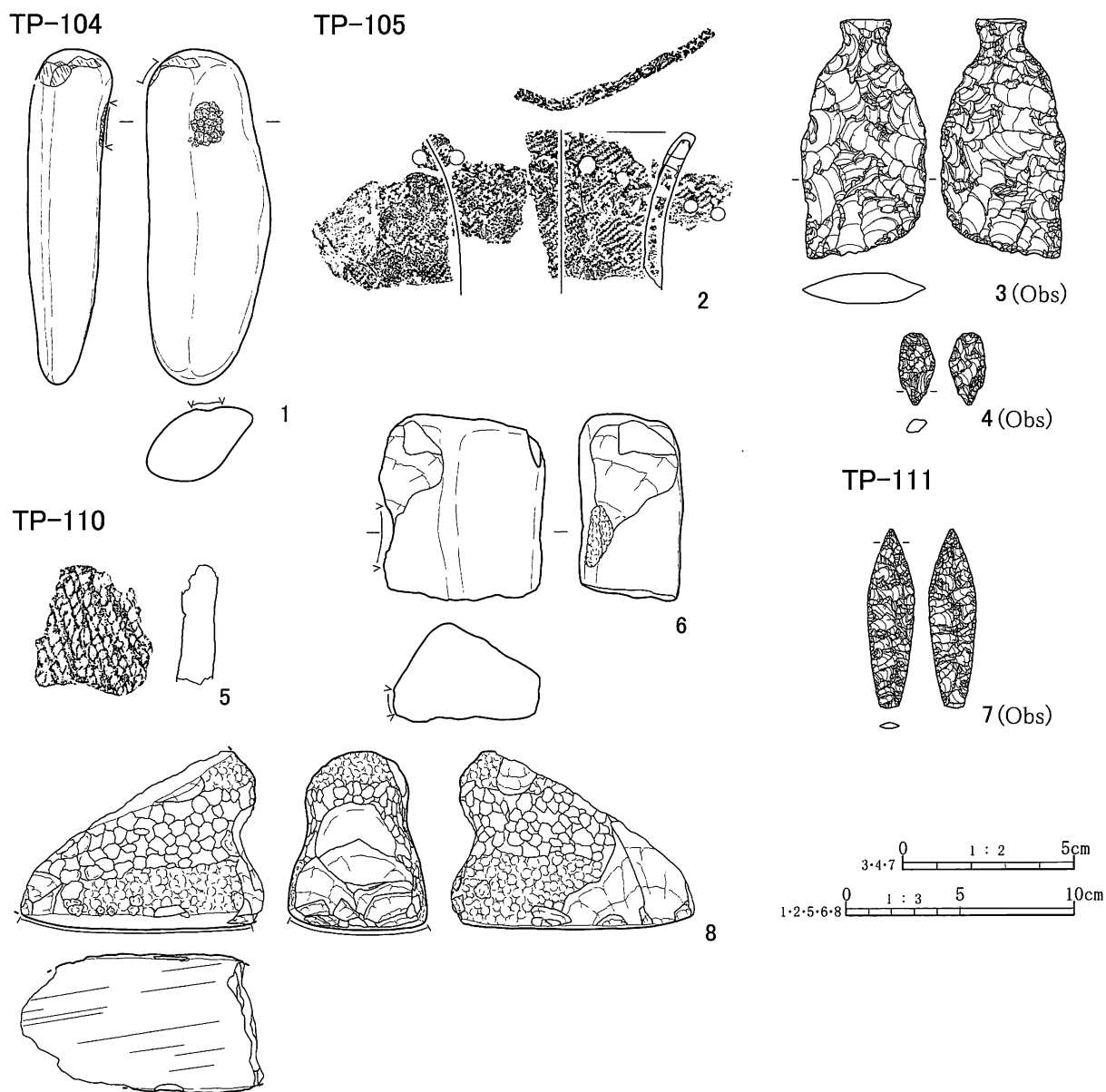
1. 土器集中・フレイク・チップ集中

土器集中は3ヶ所検出している。時期の古い順ではVPB-06(縄文時代前期前半)、VPB-04(縄文時代中期末葉)、VPB-05(縄文時代後期初頭)である。なお、VPB-06についてはVc層で検出し、近接してVFCB-10が出土していることから同時期の遺構と判断して同一図面で掲載報告している。以下に詳細を示す。

VPB-04(図Ⅲ-16・17-1・2 図版 17-4・21-9・10)

J-35区のVb層上位から同一個体片の土器がまとまって出土している。周辺を精査したところ122×68cmの範囲で土器が散在していた。この土器が出土したB2地区は遺物出土量が少量であることと、明らかな同一個体片の分布であったため集中遺物として調査している。土器はほぼ平坦面に分布しており、出土レベルは基底面がVb層下位に達するものもあるが、ほぼ同一レベルから出土している。これら集中範囲内では口縁部資料は認められず、南東側に同一個体と思われる口縁部片資料が出土しているが接合関係がないため、口縁部は包含層で掲載している(図Ⅲ-20-11・12)。

出土遺物(1・2):1・2はⅢ群B3a類に分類した胴部片で、1は地文縄文に縄端を意識した施文が認められる。これらの土器は胎土に多量の石英を含み器表面、内面もこれら鉱物により凹凸がみられる「富良野盆地系」土器である。包含層でも触れるが内径が直線的であることから、大型の深鉢であることが推定できる。



図Ⅲ-15 Tピット出土遺物

VPB-05 (図Ⅲ-16・17-3~6 図版カラー4-1 21-11~14)

本集中区はB1地区の遺構、遺物が比較的多い0-51区で出土している。49ラインより西側は地滑り堆積物が北西方向に広がり示し、ブロック状にシルト岩とロームの混土が斑状に認められている。この地滑り堆積物を掘り下げたところ、直下にシルト岩と土器片が出土した。出土状態から地滑り直後に被覆したものと考えられ、ベルトを残して土器の範囲確認を行った。調査はベルトを残した状態で検出、断面写真、微細図の記録をして遺物の取り上げを行った。また、断面図についてはVI層まで掘り下げた後に再度写真撮影と合わせて記録している。土器の細片については座標の記録を行わず、土壌ごと取り上げて現場期間中にウォーターセパレーションで遺物回収をしている。出土状態についての観察所見を述べると、器表面が剝落した大きさ3~4cmの土器細片がシルト岩を多量に含む白色ローム層中とその直下に出土している。このロームやシルト岩に混じる土器片は地滑りの衝撃に取り込まれて、上位に出土していると解釈できる。しかし、土器集中本体が地滑りの影響で二次的に移動したような広がりや、土器片が一定方向に傾きを示すなどの統一性は認められ

なかった。土器は1個体分のIV群A1a類で、接合したが細片であるため復元には至っていない。掲載している土器については比較的接合の進んだものと、形状のわかるものである。

出土遺物(3~6) : 3・4は口縁部片で3から口縁部に幅の狭い貼付帯が認められる。4は器表面剥落しているが貼付帯直下に円形刺突文を廻らせていることがわかる。5・6は胴部片で、地文はRL斜行縄文。いずれも細い貼付帯が付され、5から多段の貼付帯であることがわかる。胎土には砂粒を含み、器表面が剥落する様子からこれまで同町内で主体的に出土するものである。

VPB-06・VFCB-10 (図Ⅲ-18・19-1~11 図版 17-7・10 21-15~17 22-1-1~8)

L-46区周辺を掘り下げると、Vb層上位でフレイク・チップが周囲に比べ比較的多く出土した。このような出土状態から下層に主体部があることを想定できたため、推定範囲を面的に掘り下げ出土層位の確認に努めた。フレイク・チップはVc層で最もまとまり、南西側約1.5m地点に縄文前期前半に相当する土器片が同一面で集中して出土している。土器片は集中付近にも部分的に分布していることから、同時期に関連性のある遺構としてVPB-06、VFCB-10と付番して調査を行った。VPB-06は細片であるため検出写真のみの記録で取り上げを行った。VFCB-10に関しては検出写真後に1cm四方以上のフレイク・チップを取り上げ、その他は土壌のウォーターセパレーションを行って微細遺物の回収をしている。この集中範囲内には定型石器は8点で、石器製作や焼土などの痕跡は認められなかった。

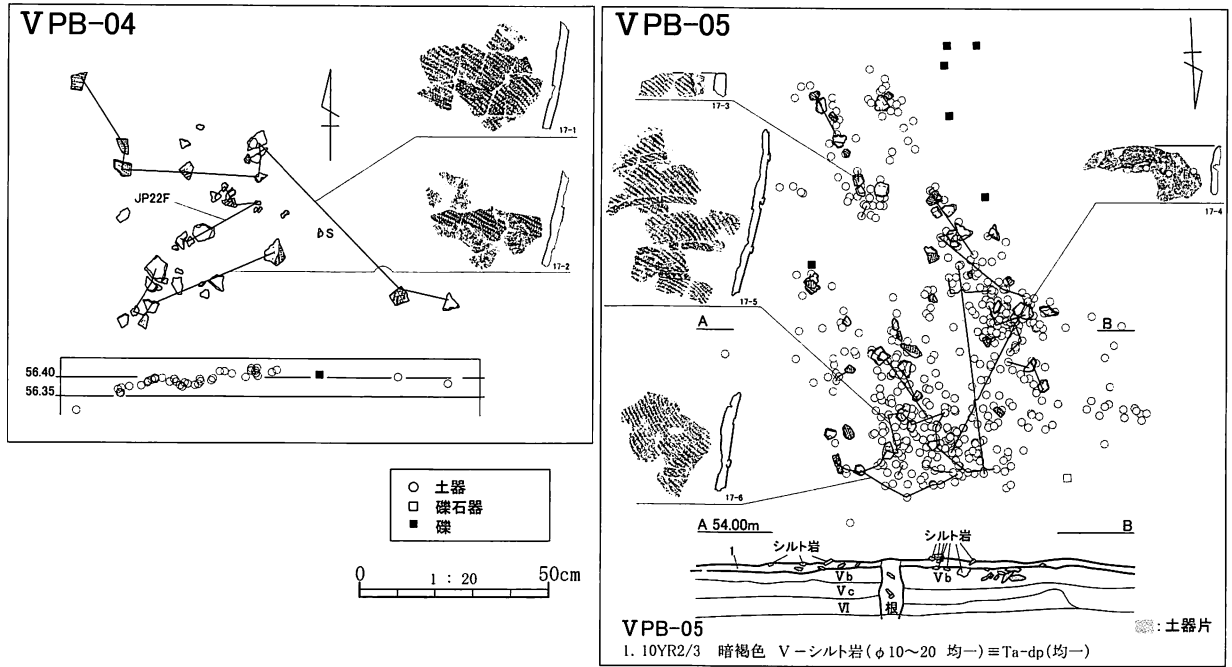
出土遺物(1~11) : VPB-06(1~3) ; 1、2はII群A2b類の同一個体片で、1は口縁部で口唇は断面角状でミガキ整形され丁寧に作出されている。どちらも胎土に繊維と径5mm程度の亜円礫を中量含み厚手の土器にしては軽い。口唇の形状からニタップナイ遺跡(厚真町 2009b)で報告している前期前半に分類した土器と同時期の所産と考えられる。3は石皿とした資料で、板状礫を素材とし、剥落が残置するほどの弱い擦痕がみられる。すり減りが明瞭でないことから対象物が柔らかいものであったことが考えられる。

VFCB-10(4~11) ; 4~6はA2類とした無茎の三角鏃でいずれも基部に抉りが認められる。4・5は最後に基部方向からの剥離を施している。6は背面の左右に新しい剥離が認められ、形状がややいびつになっている。7はA3類としたメノウ製の有茎石鏃。9はC1b類としたスクレイパーで、右縁辺部に連続した微細剥離が施される。左側側縁には岩屑面が残置する。8は分類Dとした石錐で全体に被熱している。機能部は使用による磨滅で丸味を帯び、1/4程度まで回転による潰れが顕著である。10は断面三角形のすり石で、主体面との他にもう1面擦り面が認められる。破損している擦り面(主体面)は幅26.4mmと今回出土した断面三角形のすり石群の中では幅広の方に分類される。敲打痕は正面上の擦り面形成後に両端と裏面の平坦面に認められる。石材は変成を受けた砂岩で層理状発達した岩脈に石英が入り込んでいる。11はロジン岩製の石製品で擦痕が顕著である。欠損しているため形状は不明。

2. 礫集中

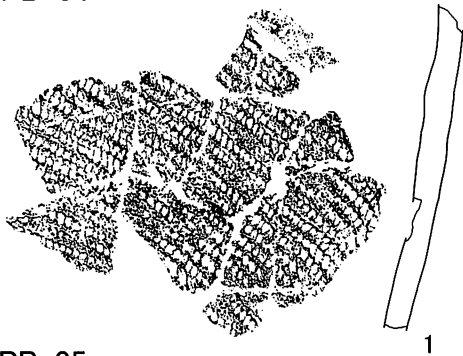
VSB-11 (図Ⅲ-18・19-12~16 図版 17-8 22-1-9)

調査区西側のN-51区で包含層を掘り下げたところ、34×20cmという狭い範囲内で被熱礫がまとまって出土した。検出面はVc層で扁平な亜円礫が多く、被熱により破碎している礫も集中内に認

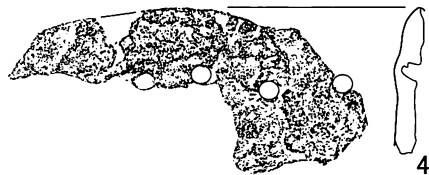


図Ⅲ-16 VPB-04・05 平面・断面・垂直分布図

VPB-04

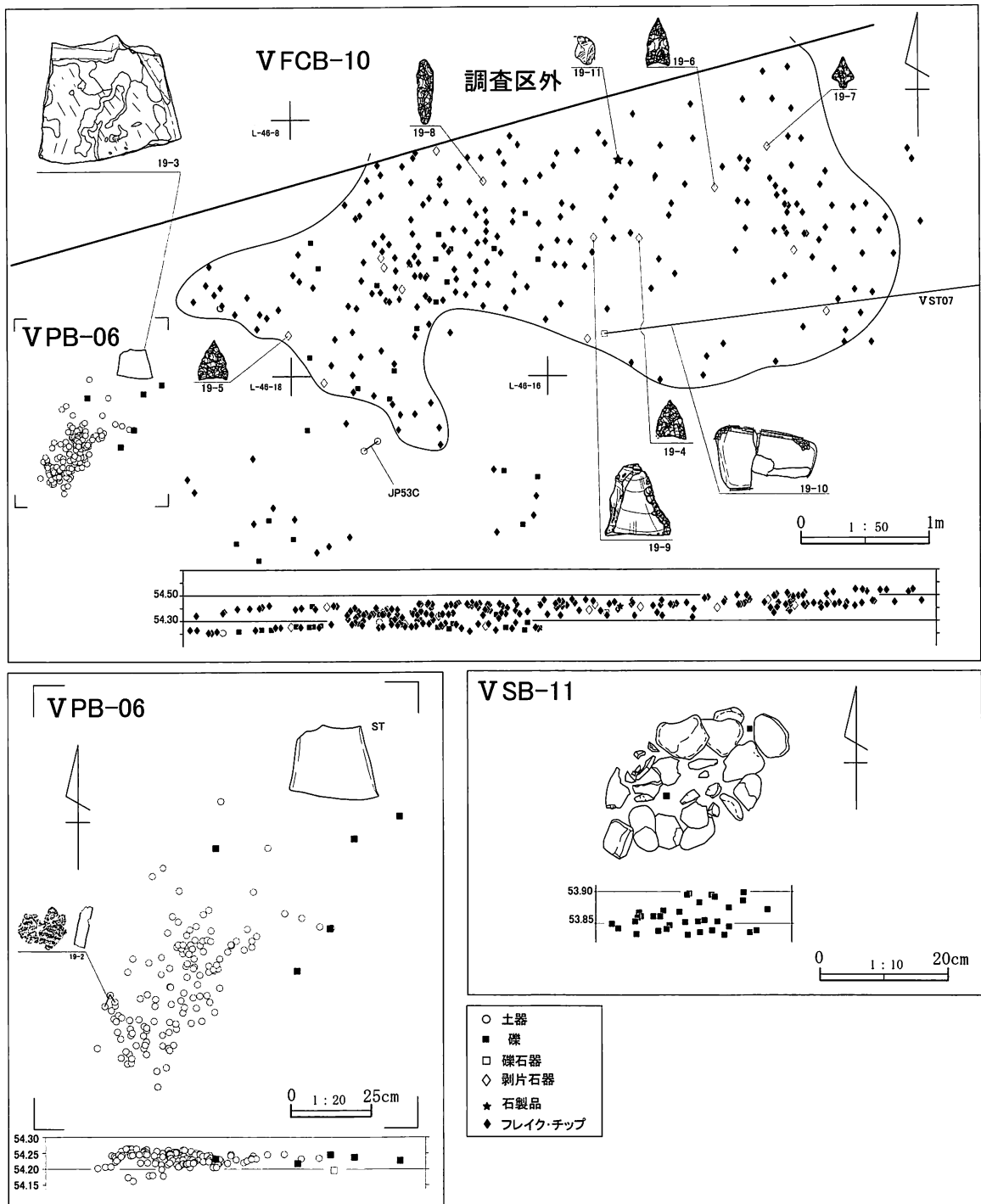


VPB-05



0 1 : 3 5 10cm

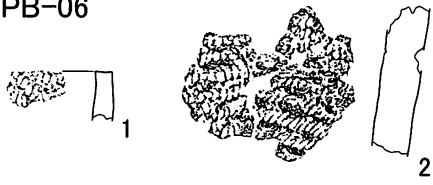
図Ⅲ-17 VPB-04・05 出土土器



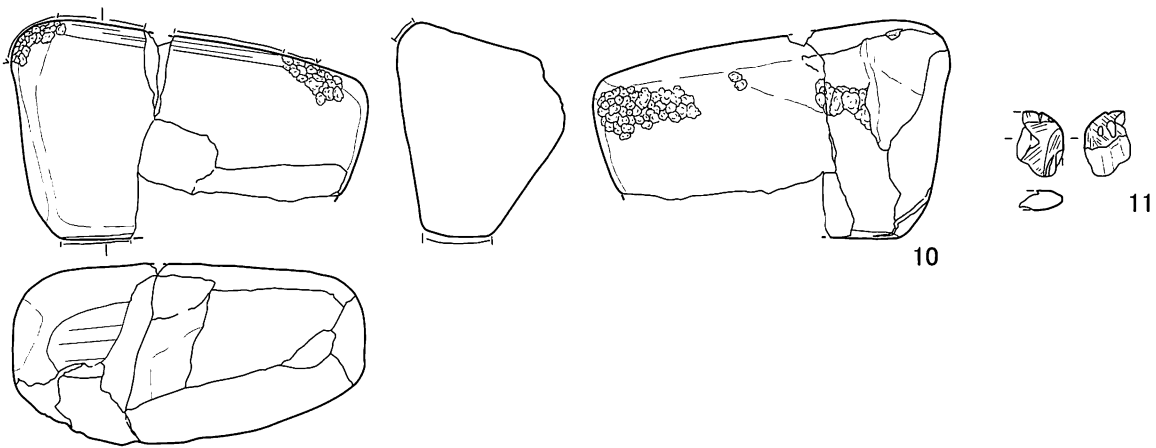
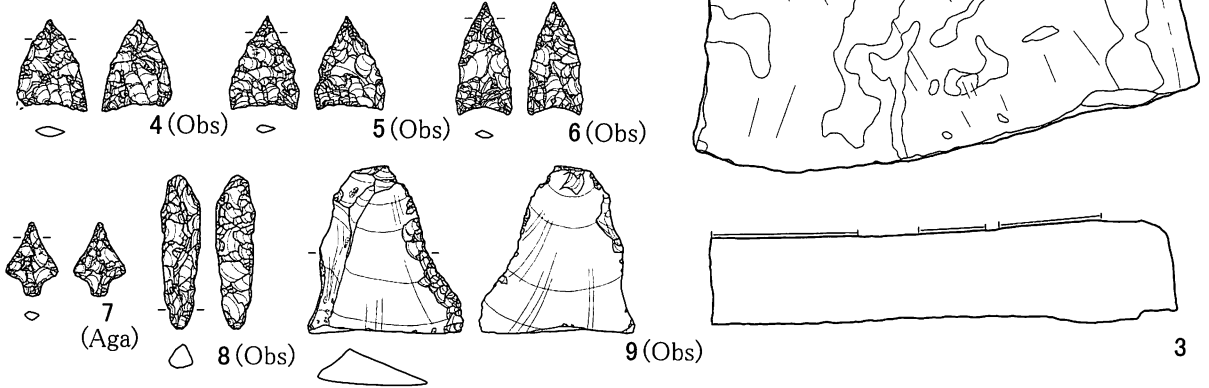
図Ⅲ-18 VPB-06・VFCB-10・VSB-11 平面図

められる。平均値は表Ⅲ-10に示した通りで長短比が2.0を超える完形礫は2点しかないため、棒状よりも楕円から円形に近い礫が集められていると言える。帰属時期については被熱礫であることと、検出層位から縄文時代前期前半と考えられる。

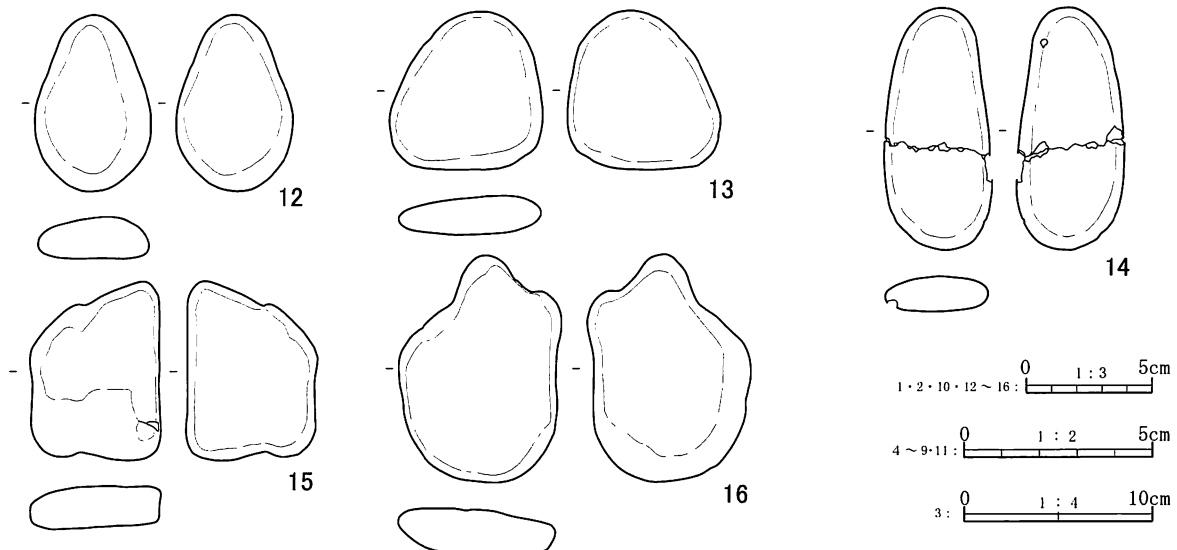
VPB-06



VFCB-10



VSB-11



図Ⅲ-19 VPB-06・VFCB-10・VSB-11 出土遺物

表Ⅲ-8 VPB-04~06出土土器属性表

※記述内容詳細については、表Ⅲ-11 包含層出土土器属性表を参照

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	部位	遺物番号/ 調査区/層位	器形等	文様	胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
Ⅲ-17-1	21-9	JP22 D	Ⅲ B3a	胴部	46122・46123他 7点/VPB-04/ VbU	やや外傾	RL斜行縄文	石英粒多量	
Ⅲ-17-2	21-10	JP22 E	Ⅲ B3a	胴部	46130・46131他 5点/VPB-04/ VbU	やや外傾	RL斜行縄文	石英粒多量	
Ⅲ-17-3	21-11	JP52 B	Ⅳ A1a	口縁部	48526・48529/ VPB-05/VbU	平縁・直立-角状	貼付帯1A+RL斜行縄文	砂粒少量	
Ⅲ-17-4	21-12	JP52 D	Ⅳ A1a	口縁部	48860・49806他 2点/VPB-05/ VbU	平縁・直立-剥落	円形刺突文	砂粒中量	器表面剥落
Ⅲ-17-5	21-13	JP52 F	Ⅳ A1a	胴部	48716・48491他 14点/VPB-05/ VbU・VbL	やや外傾	貼付帯2+RL斜行縄文・RL斜 行縄文	砂粒中量	細・貼付帯4段
Ⅲ-17-6	21-14	JP52 G	Ⅳ A1a	胴部	48494・48695他 4点/VPB-05/ VbU	やや外傾	貼付帯2+RL斜行縄文・RL斜 行縄文	砂粒中量	
Ⅲ-19-1	21-15	JP53 A	Ⅱ A2b	口縁部	51275/VPB- 06/Vc	平縁・直立-角状	LR斜行縄文	繊維中量	
Ⅲ-19-2	21-16	JP53 B	Ⅱ A2b	胴部	49656・49659・ 49660/VPB- 06/Vc	やや外傾	LR縄文(横走気味)	繊維中量 φ5~8疎少	

表Ⅲ-9 VPB-06・VFCB-10出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺構名	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-19-3	21-17	-	VPB-06	49789	石 皿	-	Vc	230.60	270.00	53.37	4750.00	Sa.	
Ⅲ-19-4	22-1-1	-	VFCB-10	46016	石 鏃	A2	VbL	23.95	18.39	3.42	1.15	Obs.	
Ⅲ-19-5	22-1-2	-	VFCB-10	47516	石 鏃	A2	Vc	24.45	18.50	3.33	1.16	Obs.	
Ⅲ-19-6	22-1-3	-	VFCB-10	48241	石 鏃	A2	Vc	29.46	13.99	3.34	1.19	Obs.	
Ⅲ-19-7	22-1-4	-	VFCB-10	48242	石 鏃	A3	Vc	19.37	13.49	4.44	0.71	Aga.	
Ⅲ-19-8	22-1-5	-	VFCB-10	47517	石 錐	D	Vc	40.26	10.61	8.15	3.56	Obs.	被熱
Ⅲ-19-9	22-1-6	-	VFCB-10	45905	スクレイパー	C1b	VbL	(47.94)	(41.07)	9.54	(13.34)	Obs.	
Ⅲ-19-10	22-1-7	12V ST07	VFCB-10	45906	すり石	A	VbL	141.91	71.33	84.89	965.00	Sa.	
			L-45	45913									
Ⅲ-19-11	22-1-8	-	VFCB-10	45904	石製品	-	VbU	(17.00)	(10.60)	5.00	1.10	Rod.	

第5節 包含層出土遺物

1. 土器 (図Ⅲ-20-1~23 図版 22-2-1~23)

土器は遺構出土のものを含めて 2,376 点が出土している。時期は縄文時代前期前葉~後期初頭までで、後期初頭が主体的に出土している。内訳はⅡ群 A2 類 655 点、Ⅲ群 A1 類 2 点、ⅢB1 群 B2 類 2 点、Ⅲ群 B3a 類 62 点、Ⅳ群 A1 類 1,647 点で土壌ごとに取り上げた土器についても整理作業時に点数を確認し付番している。Ⅱ群土器については遺存状態が悪く殆ど細片であるため、点数的には多いが確認できた個体数は7個体とⅣ群より少ない。以下に分類ごとに詳細を述べる。

Ⅱ群 A2a 類土器 (1)

静内中野式に相当するもので、胎土に蛇紋岩を含む土器である。口唇部はヘラ状工具で整形され地文縄文は浅く不明瞭である。本類は特殊な胎土から同一個体片胴部をヲチャラセナイ遺跡(厚真町 印刷中)の参考資料として胎土分析しており、含まれる鉱物は蛇紋石という結果を得ている(第三章 まとめ)。

表Ⅲ-10 VSB-11礫属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層 位	状態	計測値(mm)						長短比	長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差						
Ⅲ-19-12	22-1-9	-	48462	VbU	完形	70.33	-5.19	46.16	-1.64	17.80	2.67	1.52	0.28	60.00	○	Sa.	
Ⅲ-19-13	22-1-9	-	48460	VbU	完形	63.53	-11.99	59.54	11.74	15.85	0.72	1.07	-0.17	70.00	○	Sa.	
Ⅲ-19-14	22-1-9	VS06	48474	VbU	完形	96.31	20.79	42.66	-5.14	14.33	-0.80	2.26	1.02	80.00	○	Sa.	
Ⅲ-19-15	22-1-9	-	48456	VbU	完形	70.91	-4.61	54.35	6.55	15.99	0.86	1.30	0.06	90.00	○	Sa.	
Ⅲ-19-16	22-1-9	-	48458	VbU	完形	91.32	15.80	62.94	15.14	20.63	5.50	1.45	0.21	(80.00)	○	Sa.	
-	22-1-9	VS09	48473	VbU	完形	100.34	24.82	46.84	-0.96	14.82	-0.31	2.14	0.90	(70.00)	○	Sa.	
-	22-1-9	VS05	48471	VbU	略完形	69.74	-5.78	46.95	-0.85	11.55	-3.58	1.49	0.25	(32.71)	○	Sa.	
-	22-1-9	-	48490	VbU	完形	61.14	-14.38	52.20	4.40	18.69	3.56	1.17	-0.07	80.00	○	Sa.	
-	22-1-9	-	48481	VbU	完形	71.20	-4.32	48.24	0.44	15.34	0.21	1.48	0.24	60.00	○	Sa.	
-	22-1-9	-	48475	VbU	完形	78.58	3.06	62.94	15.14	13.69	-1.44	1.25	0.01	100.00	○	Sa.	
-	22-1-9	-	48468	VbU	完形	68.24	-7.28	55.40	7.60	11.82	-3.31	1.23	-0.01	60.00	○	Sa.	
-	22-1-9	VS04	48464	VbU	略完形	65.87	-9.65	51.37	3.57	14.09	-1.04	1.28	0.04	(46.27)	○	Sa.	
-	22-1-9	-	48459	VbU	完形	59.89	-15.63	44.10	-3.70	9.92	-5.21	1.36	0.12	(26.83)	○	Sa.	
-	22-1-9	-	48483	VbU	完形	71.27	-4.25	71.04	23.24	13.90	-1.23	1.00	-0.24	80.00	○	Sa.	
-	22-1-9	-	48457	VbU	完形	76.51	0.99	58.66	10.86	13.17	-1.96	1.30	0.06	80.00	○	Sa.	
-	22-1-9	-	48466	VbU	完形	61.92	-13.60	55.27	7.47	17.62	2.49	1.12	-0.12	(93.57)	○	Sa.	
-	22-1-9	-	48455	VbU	完形	83.97	8.45	59.94	12.14	16.13	1.00	1.40	0.16	125.00	○	Sa.	
-	22-1-9	-	48467	VbU	完形	74.08	-1.44	54.67	6.87	14.27	-0.86	1.36	0.12	(70.00)	○	Sa.	
完形合計						1,264.82		927.11		251.81		23.66		405.62			
完形平均値						74.40		54.54		14.81		1.39		23.86			
遺物総重量														487.03			

Ⅱ群 A2b 類土器 (2~7)

静内中野式に相当するものである。2 は口唇部に向かって薄くなり縄文の節も粗く同一個体は認められない。3 は器表面剥落しており、内面に縄文を施した後弱いナデが認められる。4~7 は胴部片で胎土に繊維を中から多量含むため本群に含めている。6 は比較的丁寧なつくりで、内面は縦方向に浅いミガキが見られる。7 は浅い重複縄文がみられる。今回の調査では底部片が出土していないため、尖底、平底の区別はしていない。

Ⅲ群 A1 類土器 (8)

本類は円筒土器上層 a 式に相当するものである。出土層位はいずれも Vb 層上位で、本資料を含めて 2 点の出土である。8 は胴部で口縁部文様帯と胴部を区切る貼付帯部分に撚糸の押圧が連続して認められる。内面は横方向に丁寧なミガキ調整がなされる。

Ⅲ群 B 類土器 (9・10)

本類は胴部片であるため詳細な型式名は行わず、中期後葉頃相当するとしたものである。9 は胴部片のみで前期土器に比べ、胎土に繊維を少量であるため本類に含めている。10 は緻密な LR 斜行縄文が器面に施されており、胎土に極細粒砂を均一に含むことから平成 20 年度報告のⅢ-20-8 (厚真町 2010a) と同一個体と思われる。

Ⅲ群 B3a 類 (11・12)

本類は北筒式に相当するものである。11・12 は同一個体の口縁部片、11 のトーン部分は平成 20 年度報告のⅢ-20-10 と接合関係にある。口縁部は幅広の貼付帯と縦方向の貼付帯が不規則に付されている(11 の貼付帯間隔から)。貼付帯上には 2 個 1 対の棒状工具によって 2 列の突引文が施され、直下には円形刺突文が巡る。本資料は VPB-04 と同一個体で、口縁部は集中区よりやや南に出土しているため包含層で掲載している。分類に関しては口縁部に貼付帯が認められるが、縦位貼付帯や

直下に円形刺突文が巡ることから本類にしている。胎土は多量の石英を含むことから、富良野盆地系土器である。

IV群 A1a 類 (13~23)

本群は余市式土器に相当するものである。出土点数、個体数で今回の調査では主体的に出土する土器群である。13は平成20年度出土のⅢ-4-4、VH-03掘り上げ土中出土の資料と接合したもので、多段の貼付帯を有する土器。14~22は胴部片で、14は破片の為不明瞭であるが、「0」字状の貼付帯を付したものである。15~17は僅かに胴部貼付帯が認められる。19・22は羽状構成が認められるもの、21は底部付近であるが、縄文施文後に弱いナデ調整で条間が広い。23は底部変換点部分で、内面は剥落している。本群の胎土は21が殆ど砂粒を含まず、滑らかな質感をしているが、これ以外は砂粒、砂礫を多く含むものが多い。

2. 剥片石器 (図Ⅲ-22-1~25 図版 23-1~25)

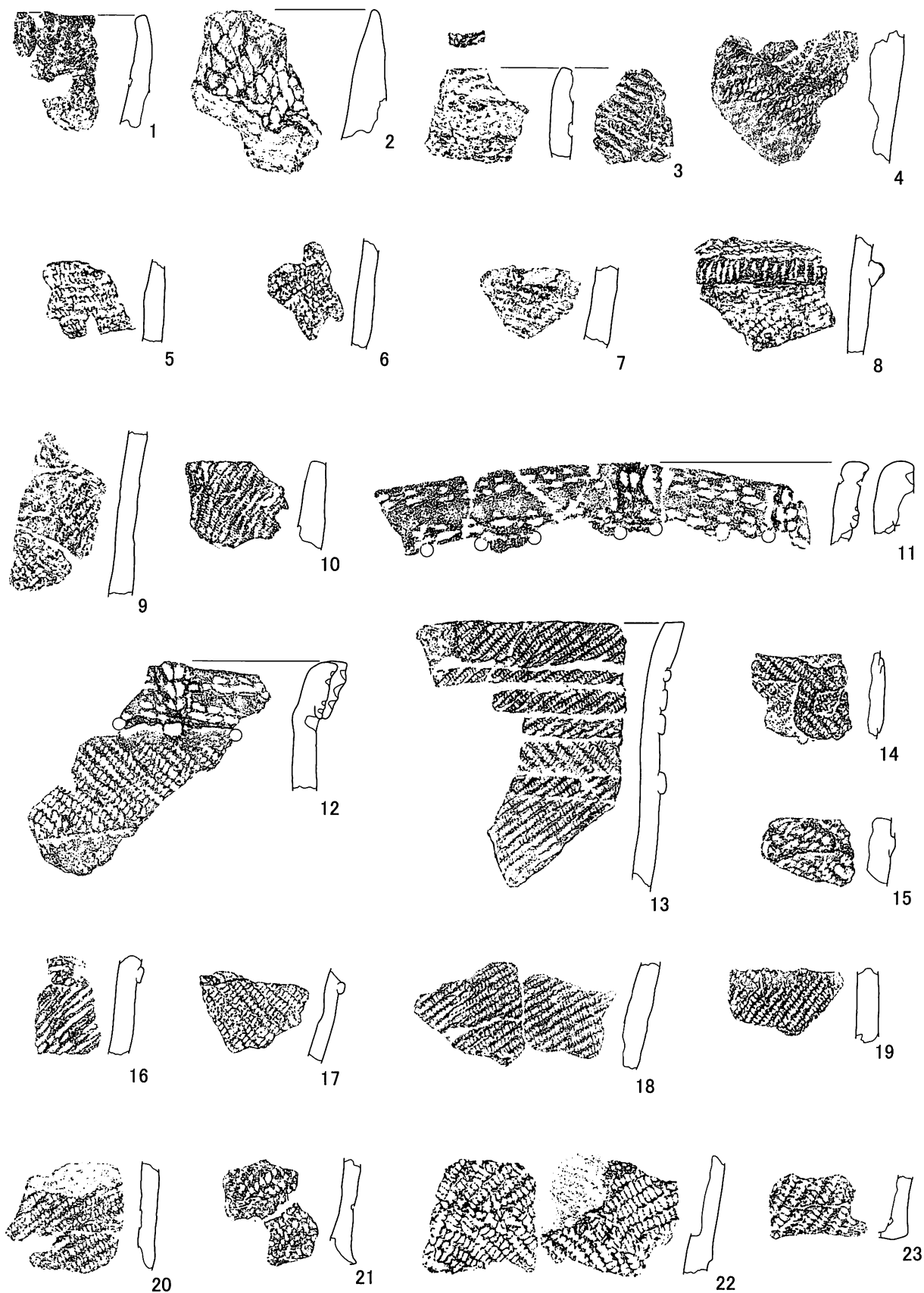
包含層からは剥片石器159点出土し、包含層では25点掲載している。総数の内訳は石鏃41点、石槍12点、石錐2点、つまみ付きナイフ23点、スクレイパー23点、石核3点、R・F、U・Fなど56点である。出土した定形器種ではポイント類が53点と多く出土する傾向にある。石材は全体に黒曜石主体であるが、つまみ付きナイフは頁岩製が8点とやや黒曜石以外の石材比率が高い。以下に器種ごとに詳細を示す。

石鏃 (1~9) : 1~5はA2に分類した無茎の三角鏃でいずれも黒曜石製である。1は右側縁に古い剥離が残り、器体も左右非対称で捻れがあるなど粗雑な作りである。2・5は両面に古い剥離が残る薄手の素材を利用し、腹面に連続して微細剥離が認められる。3は先端部が浅い抉りによって突起状に鏃身部が作出される。6・7はA3に分類した基部明瞭な石鏃、8・9はA4に分類した基部不明瞭な石鏃である。6・7は鏃身部が非対称で、一方のかえしが鈍角になる資料で同一形態を示す。6は表面→裏面→基部への剥離工程が観察できる。9は鏃身部腹面からの剥離によって再調整していると思われる。

石槍 (10~14) : 10・11はB1に分類した明瞭な基部をもつ資料で、10は鏃身部先端にノッチ状の剥離がみられ、形がいびつになる。11は腹面に古い剥離が残り、縁辺に連続した調整で断面がコマボコ状を呈する。12~14はB2に分類した基部不明瞭な資料である。12・14は菱形の平面形で、14は腹面に古い剥離を残し、背面縁辺部に連続した微細剥離が認められる。13は無茎のポイントで、長軸が40mmを超えることから本群で掲載しているが、形態的には無茎の三角鏃に分類される。

石錐 (15・16) : 15は他石器からの転用と考えられる細分E相当である。機能部の潰れが顕著で、横方向の擦痕も視認できる。片側に刃部を作出していることから、本来は24・25のようなスクレイパーで、先端を機能部として使用したものであると考えられる。16は棒状で柄と機能部の区別が不明瞭な細分D相当である。転礫面が残置するもので、両端に使用による磨滅が認められる。下端はおそらく回転時に欠損したものである。

つまみ付きナイフ (17~22) : 本群を分類した中ではA1類13点、A2類5点、A3類2点、不明2点で片面縁辺部のみ調整するA1類が最も出土している。17~19はA1類で17は基部と左側縁に岩屑面が残置しているため、素材形状に近い状態で作出されている。つまみ部分は17・19が片面ずつからノッチを入れ調整している。20・21はA2類で片面全体に剥離調整が認められるが、いずれも古い



: H20 年度出土資料 0 1 3 5 10cm

図III-20 包含層出土土器



図Ⅲ-21 土器接合線図

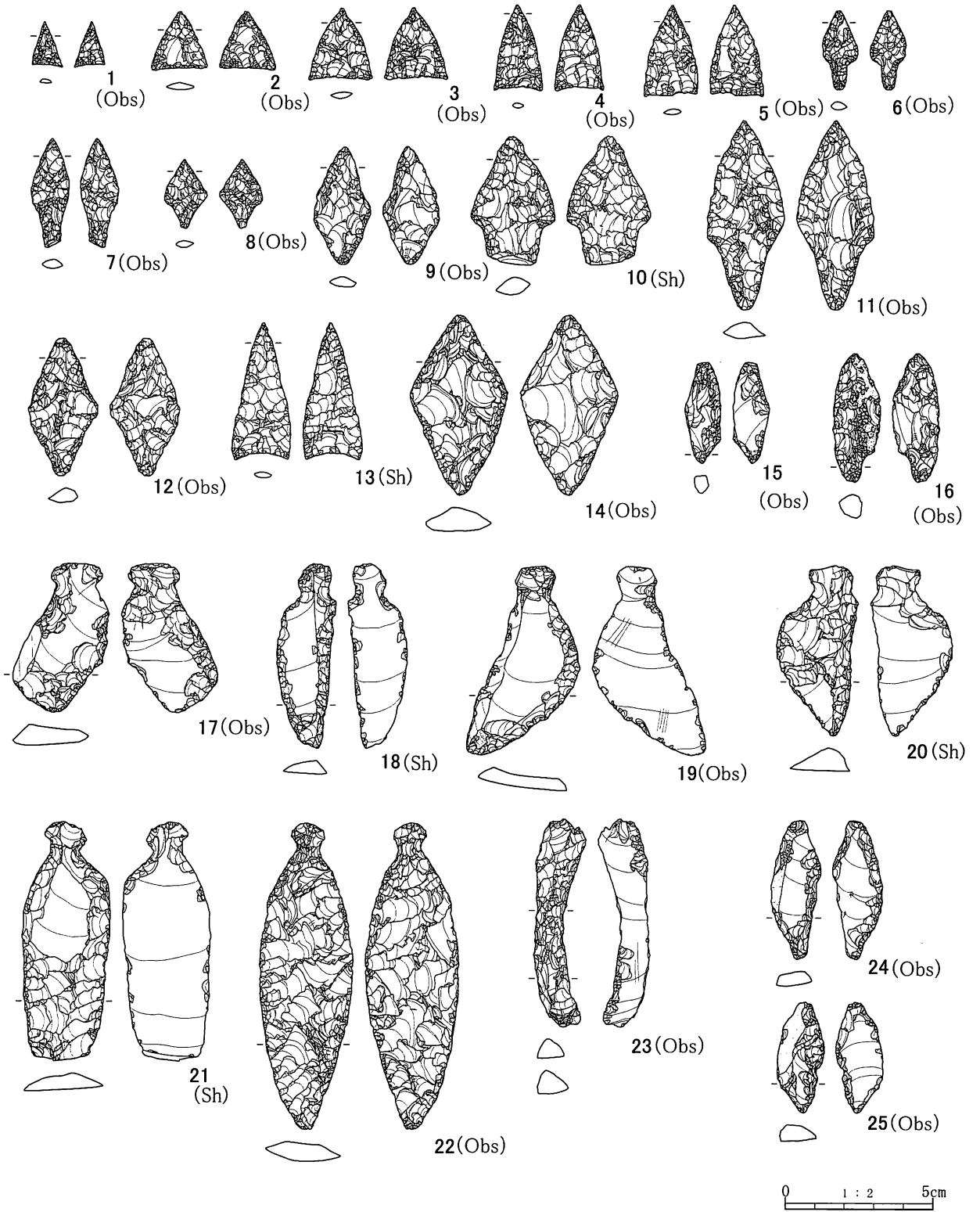
表Ⅲ-11 縄文時代包含層出土土器属性表

属性表記載において、下記の認識のもと行っているが、「部位」・「器形」・「胎土」の記載については、相対比較によるもので観察者の主観による。

- [個体名称] 同一個体にアラビア数字、破片資料にアルファベットを付番した。
- [分類] 「第1章 第4節 土器」に記載している。
- [器形等・文様] 各部位毎の形態を示した。「口縁」は口縁部器表面、「底部側面」は底部器表面、「変換点」は底側面と底面との状態を記載した。
- [器形等] 「外反」は反る状態。「外傾」は直線的に開く状態を示している。
- [文様] 以下の認識で記載した。
 記載順序: 部位の口縁～胴部: 口縁部→胴部への記載順、部位の底～胴部: 底部→胴部への記載順となっている。
 記号: +; 文様要素の重複施文 ; ; 文様要素の複合ないしは充填構成
 文様要素
 2段異原体羽状縄文: 燃りの異なる2段の原体(LR・RL)による羽状縄文
 突引文: 器面に対し施文工具が斜め方向に突き刺され、水平方向に連続して動く。文様の観察としては、圧痕が深く施文が連続している。
 押し文: 器面に対し施文工具が垂直方向に押し当てられ、水平方向に連続して動く。文様の観察としては、圧痕が浅く施文が連続している。
 半截竹管工具による施文: () 内に器面に当てた工具面を記載している。(内)は半截竹管の内側、(外)は竹管の外側を用いて施文されたもの。
 縄線文: 器表面に対し、2段以上の縄原体の圧痕。
 貼付帯1A: 口唇直下の幅広の貼付帯 貼付帯1B: 口唇直下の幅の細い貼付帯 貼付帯2: 貼付帯1以外の胴部に横亘する貼付帯。
 重複縄文: 燃りの異なる原体を新旧重複して施文する。文様の観察としては、条が交差状に見られる。

[胎土] 組織: 破断面や剥離面に観察できる「板状の平行な割れ目」組織。(花岡 1992)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	部位	遺物番号/ 調査区/層位	器形等	文様	胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
Ⅲ-20-1	22-2-1	JP38A	Ⅱ A2a	口縁部	50897・50899・ 50900/ D-34/ VbU	平縁・内湾-隅丸角状/直 立	LR? 縄文+ナデ	砂粒中量 蛇紋岩中量	
Ⅲ-20-2	22-2-2	JP39	Ⅱ A2b	口縁部	50340/H-31/VbL	平縁・直立-尖状	LR斜行縄文	繊維中量 砂粒少量	
Ⅲ-20-3	22-2-3	JP40	Ⅱ A2b	口縁部	50947/D-19/VbL	平縁・外傾-隅丸角状	RL縄文?-剥落-RL斜行縄文+ナデ	繊維中量 砂粒少量	
Ⅲ-20-4	22-2-4	JP37A	Ⅱ A2b	胴部	46231/H-28/Vc	やや外傾	LR斜行縄文	繊維多量 白色岩片少量	
Ⅲ-20-5	22-2-5	JP44A	Ⅱ A2b	胴部	47542・48436/M- 46/Vc	直立	RL横走縄文	繊維少量 砂粒少量	
Ⅲ-20-6	22-2-6	JP57	Ⅱ A2b	胴部	50879/F-33/VbU	やや外傾	RL斜行縄文?-弱いミガキ	繊維中量 砂粒少量	
Ⅲ-20-7	22-2-7	JP59A	Ⅱ A2b	胴部	46879/O-51/Vc	やや外傾	重複縄文?+ナデ	繊維少量 砂粒少量	RL原体
Ⅲ-20-8	22-2-8	JP41A	Ⅲ A1	胴部	50804/D-19/VbU	やや外傾	貼付帯+撚糸押圧・縄線文・RL斜行 縄文-ミガキ	繊維少量 砂粒少量	
Ⅲ-20-9	22-2-9	JP54	Ⅲ b	胴部	50260・50261・ 50262/E-22/Vc	やや外傾	異原体羽状縄文	繊維多量 砂粒少量	
Ⅲ-20-10	22-2-10	JP20B	Ⅲ B2	胴部	50846/E-20/VbL	やや外傾	LR斜行縄文	繊維極少量 白色岩片少量	H20に同一個 体あり
Ⅲ-20-11	22-2-11	JP22A	Ⅲ B3a	口縁部	36301・36304・ 46185 他2点/J- 33/Va	平縁・外反-隅丸角状/ 外傾	ナデ-貼付帯1A+2個1対突引文 (外)・貼付帯(縦)+突引文(外) /RL斜行縄文+O円形刺突文	石英粒多量	富良野盆地系
Ⅲ-20-12	22-2-12	JP22B	Ⅲ B3a	口縁-胴部	46183・49542-1/J- 33/VbL	平縁・外反-隅丸角状/外 傾	ナデ-貼付帯1A+2個1対突引文 (外)・貼付帯(縦)+突引文(外)/RL 斜行縄文・結縛痕	石英粒多量	富良野盆地系
Ⅲ-20-13	22-2-13	JP12A	Ⅳ A1a	口縁-胴部	35347・36385 他2 点/VH-03・J-33/ Vc	平縁・直立-角状/直立	貼付帯1A+LR斜行縄文/ 異原体羽状・貼付帯2+LR斜行縄文	砂礫中量	H20資料と接合
Ⅲ-20-14	22-2-14	JP42	Ⅳ A1a	胴部	46383/M-49/VbU	やや外傾	RL斜行縄文・貼付帯2・環状貼付帯+ RL斜行縄文	砂粒少量	
Ⅲ-20-15	22-2-15	JP56	Ⅳ A1a	胴部	46204/G-27/VbL	やや外傾	貼付帯2+LR斜行縄文・RL斜行縄文	砂粒少量	
Ⅲ-20-16	22-2-16	JP55	Ⅳ A1a	胴部	50082-1/J-33/ VbL	直立	貼付帯2+LR斜行縄文	角閃石少量	
Ⅲ-20-17	22-2-17	JP58	Ⅳ A1a	胴部	46198/H-27/VbL	外傾	貼付帯2+RL斜行縄文? ・RL斜行縄文	砂粒多量	
Ⅲ-20-18	22-2-18	JP51	Ⅳ A1a	胴部	36537・36539・ 50090/ M-37・ I-32/VbL	やや外傾	LR斜行縄文	砂粒少量 角閃石中量	内面剥落
Ⅲ-20-19	22-2-19	JP47A	Ⅳ A1a	胴部	45691/H-31/VbU	やや外傾	LR斜行縄文	砂礫多量	板状に剥落
Ⅲ-20-20	22-2-20	JP60	Ⅳ A1a	胴部	46068・47539/M- 46/VbU・Vc	やや外傾	LR斜行縄文	砂粒中量	
Ⅲ-20-21	22-2-21	JP45A	Ⅳ A1a	胴部下半 -底部側縁部	45366・45369/ N-47/VbU	やや外傾/張り出し	LR斜行縄文/LR斜行縄文	砂粒極微量	
Ⅲ-20-22	22-2-22	JP46A	Ⅳ A1a	胴部	45458・45617/ M-27・F-28/VbU	やや外傾	異原体羽状縄文	砂粒少量 白色岩片中量	
Ⅲ-20-23	22-2-23	JP46D	Ⅳ A1a	胴部下半 -底部	45465/G-27/VbU	やや外傾-角状	LR斜行縄文	砂粒少量 白色岩片中量	内面剥落



図Ⅲ-22 包含層出土剥片石器

表Ⅲ-12 包含層出土剥片石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-22-1	23-1	-	50322	石 鏃	A2	Vc	H-31	15.50	10.00	2.30	0.25	Obs.	
Ⅲ-22-2	23-2	-	50919	石 鏃	A2	VbU	G-39	19.73	18.90	2.85	0.94	Obs.	
Ⅲ-22-3	23-3	-	46912	石 鏃	A2	VbU	N-50	24.83	21.53	3.57	1.27	Obs.	
Ⅲ-22-4	23-4	-	45595	石 鏃	A2	VbL	O-47	28.87	16.43	3.02	1.18	Obs.	
Ⅲ-22-5	23-5	-	46839	石 鏃	A2	VbL	N-51	31.27	17.93	4.65	1.98	Obs.	
Ⅲ-22-6	23-6	-	46568	石 鏃	A3	Vc	M-46	26.50	11.50	4.30	0.97	Obs.	
Ⅲ-22-7	23-7	-	50876	石 鏃	A3	VbL	E-32	32.00	12.50	5.70	1.90	Obs.	
Ⅲ-22-8	23-8	-	46082	石 鏃	A4	VbU	M-47	23.18	14.39	4.08	0.87	Obs.	
Ⅲ-22-9	23-9	-	50254	石 鏃	A4	VbL	F-23	39.56	19.78	7.10	3.86	Obs.	
Ⅲ-22-10	23-10	-	49498	石 槍	B1a	Vc	O-51	43.16	28.26	7.91	9.47	Sh.	
Ⅲ-22-11	23-11	-	45720	石 槍	B1b	VbL	K-35	63.17	27.39	8.76	9.97	Obs.	
Ⅲ-22-12	23-12	-	45474	石 槍	B2	VbU	G-27	46.44	23.67	7.30	5.67	Obs.	
Ⅲ-22-13	23-13	-	47706	石 槍	B2	Vc	N-50	45.69	20.08	3.95	2.78	Sh.	
Ⅲ-22-14	23-14	-	45941	石 槍	B2	VbL	I-34	60.18	33.09	9.28	10.90	Obs.	
Ⅲ-22-15	23-15	-	48411	石 錐	E	Vc	N-46	33.77	(12.26)	5.84	2.92	Obs.	スクレイパーから転用
Ⅲ-22-16	23-16	-	45272	石 錐	D	VbU	L-46	42.99	15.93	9.69	6.56	Obs.	
Ⅲ-22-17	23-17	-	49361	つまみ付きナイフ	A1	Vc	N-51	50.90	7.80	25.90	10.73	Obs.	
Ⅲ-22-18	23-18	-	47374	つまみ付きナイフ	A1	Vc	N-49	61.92	19.71	5.57	6.14	Sh.	
Ⅲ-22-19	23-19	-	45993	つまみ付きナイフ	A1	VbL	M-46	67.29	29.46	5.64	10.03	Obs.	
Ⅲ-22-20	23-20	-	48947	つまみ付きナイフ	A2	Vc	O-51	57.14	28.96	9.33	11.61	Sh.	
Ⅲ-22-21	23-21	-	45703	つまみ付きナイフ	A2	VbU	H-31	(79.98)	30.38	6.92	16.92	Sh.	
Ⅲ-22-22	23-22	-	48439	つまみ付きナイフ	A3	Vc	L-45	102.95	31.84	6.95	20.63	Obs.	
Ⅲ-22-23	23-23	-	45279	スクレイパー	C2a	VbL	J-36	69.74	17.20	9.16	8.98	Obs.	
Ⅲ-22-24	23-24	-	48073	スクレイパー	C1a	VbL	N-46	46.33	16.99	6.00	4.40	Obs.	
Ⅲ-22-25	23-25	-	48383	スクレイパー	C1b	Vc	N-47	37.57	15.29	6.98	3.67	Obs.	被熱

剥離面を残し、20は背面右に急角度な刃部を作出している。22はA3類で、今回出土した中では最大となり、器体中央まで剥離が進む。表面右側縁に微細剥離が認められる。

スクレイパー(23~25): 23はC2類で縦型の素材剥片を用いたコンケイブスクレイパー。両側縁から急角度の刃部を作出している。24・25はC1類で一側縁に岩屑面を残す。24は片面ずつ縁辺に微細剥離が施される。左側縁下端部に磨滅と潰れらしき痕跡が認められるが、反対側の稜が潰れていないことから石錐としては扱っていない。25は右側縁に使用による抉れ(潰れ)が認められるが、被熱は全体に及んでいる。

3. 礫石器(図Ⅲ-23~26 図版24・25)

礫石器は総数で183点が出土し、このうち包含層からは171点出土し、うち25点掲載している。出土礫石器の内訳は石斧19点、石斧片1点、たたき石37点、石冠2点、すり石39点、石鋸1点、砥石11点(破片含む)、石皿24点、台石6点、その他31点である。砥石は破片資料が多く実数個体とは異なる。また、今回出土した礫石器の中では断面三角形のすり石が21点出土し、特徴的な出土と言える。礫石器は器種ごとに分類と細分を行った後、一定の比率で抽出を行えるように努めた。以下に分類ごとの詳細を述べる。

石斧(1~5): 石斧に分類したものは完形8点、欠損・破片7点(うち刃部欠損4点)で全て包含層から出土している。石器石材は緑色泥岩が多く、礫片も18点、129.91g出土している。分類についてはA類を形状によって1を撥形(基部より刃部が広いもの)、2を短冊形(基部と刃部の幅がほぼ

同じ)、3を円形または不整形として細分している。1はA2に分類した泥岩製の小型石斧である。全面に擦痕が認められ、刃部も比較的鋭利に作出しているが、石材や規格から実用品とは考えられない。2・3はA2に分類したもので、両面に素材面が残置しているため殆ど素材形状を変えず作出されたことが分かる。3は背面に凹凸が認められるが、断面をかまぼこ状にして概ね対称的に研磨調整している。4はA3に分類したもので、全面を不規則な研磨調整で成形されている。刃部は使用による線条痕と凹凸が認められる。両面に素材面が残置し、板状素材を利用したものと思われる。石材はロジン岩で、器表面は黒色でヌメリがあるが、刃部や側縁など深く研磨調整が成されたところは、白緑色の色調に突然変色する。5はA1に分類されるもので、刃部まで丁寧な磨き調整がなされているが、再調整のためか両側縁に連続した敲打と潰れで基部の幅が狭くなる。

たたき石(6~11)：今回出土したたたき石は包含層で37点、うち素材礫の形状が縦長で扁平(A類)2点、棒状から角柱状(B類)8点と大半を占めている。6・7はIA類、7は両面とも端部付近に深く明瞭な敲打が顕著で、裏面は浅いが帯状に連続し、側縁にも敲打が認められる。8はIB類で棒状素材の両面敲打で、7と同じく両端の使用が顕著である。9はIIA類で両側縁の敲打により裏面に大きな剥離が認められる。10・11IIB類、10は不整形な形状でありながら、非常に握りやすく側縁敲打による窪みが顕著で、主要面として使用していたものと思われる。11は重量1,790gあり、通常手持ちでの使用を考えるのは難しいが、端部に連続した敲打痕が認められることから本類で掲載している。上下端部は敲打により潰れと破損(器体の欠け)が見られ、垂直方向の使用が考えられる。

石材は全て砂岩製である。

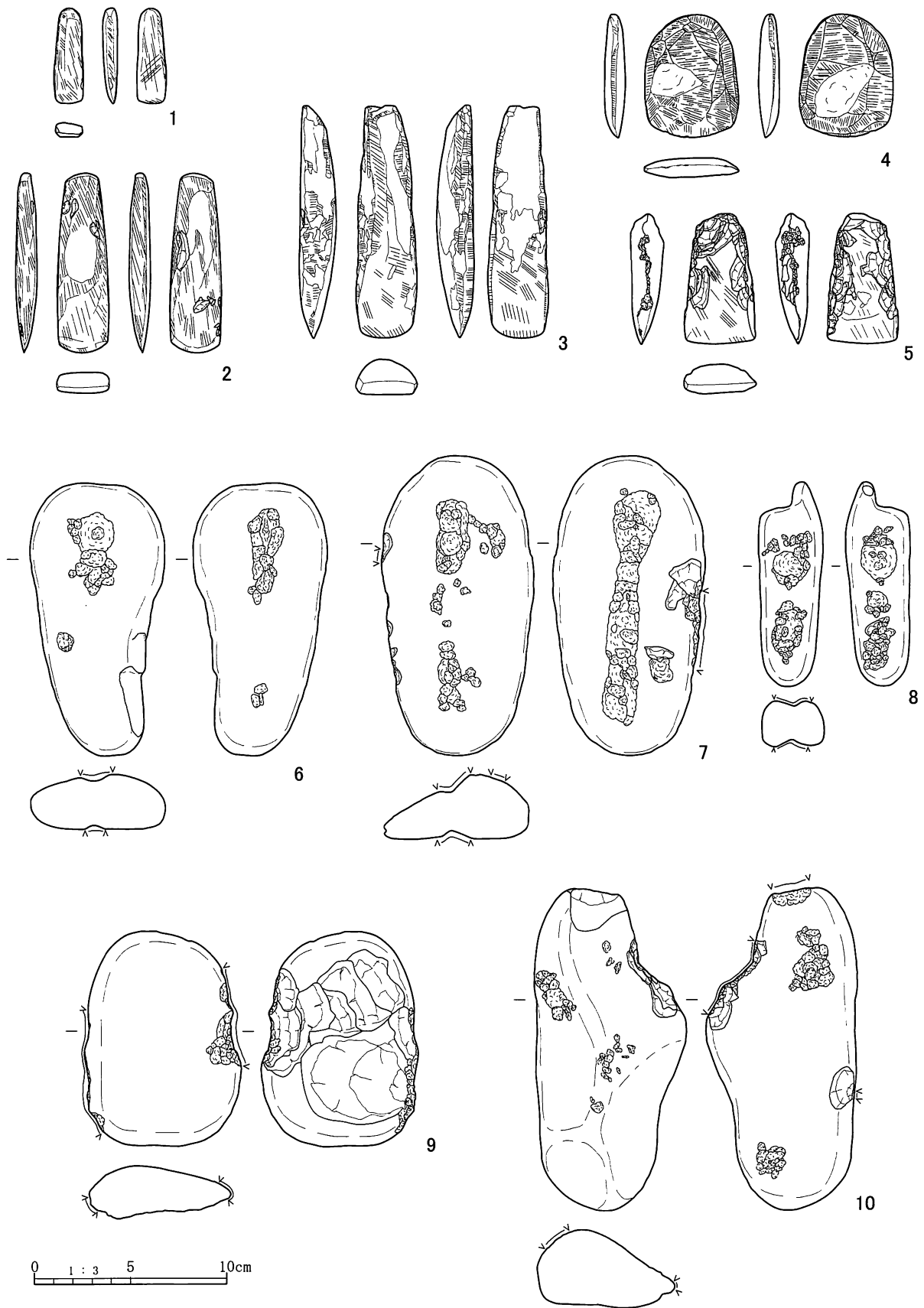
すり石(12~16)：すり石に分類したものは39点で、うち21点が断面三角形を呈するすり石であり、本遺跡において特徴的な石器群と言える。12は主に両側縁を打ち欠き、右側縁はやや挟りがあり、擦り面は短軸方向への擦痕が顕著で、裏面には多方向に浅い不明瞭な擦痕がいくつか認められる。13~16はA類の断面三角形を呈するすり石で、14・15は擦り面が2面認められる。擦り面方向は例外なく長軸方向で、擦り面に敲打が伴うもの(13~15)が掲載していない資料も含めて多い。また、2面以上使用しているものについては、遺構で掲載した資料も含めて3点のみである。擦り面の幅については側縁に向かうと使用面が広がることから、中心点の幅で計測すると平均は15mmとなり平均以上が10面、以下が12面となる(欠損品抜き、多面体はそれぞれ計測)。しかし、10mm以下は5面、最小幅4mmで10mm以上の使用面をもつ資料が多い。

北海道式石冠(17)：石冠は遺構出土(Ⅲ-15-8)を含めて4点出土している。17は素材形状を大きく残した礫に把握部を作出している。使用面は短軸方向に擦痕があり、その後敲打が認められる。

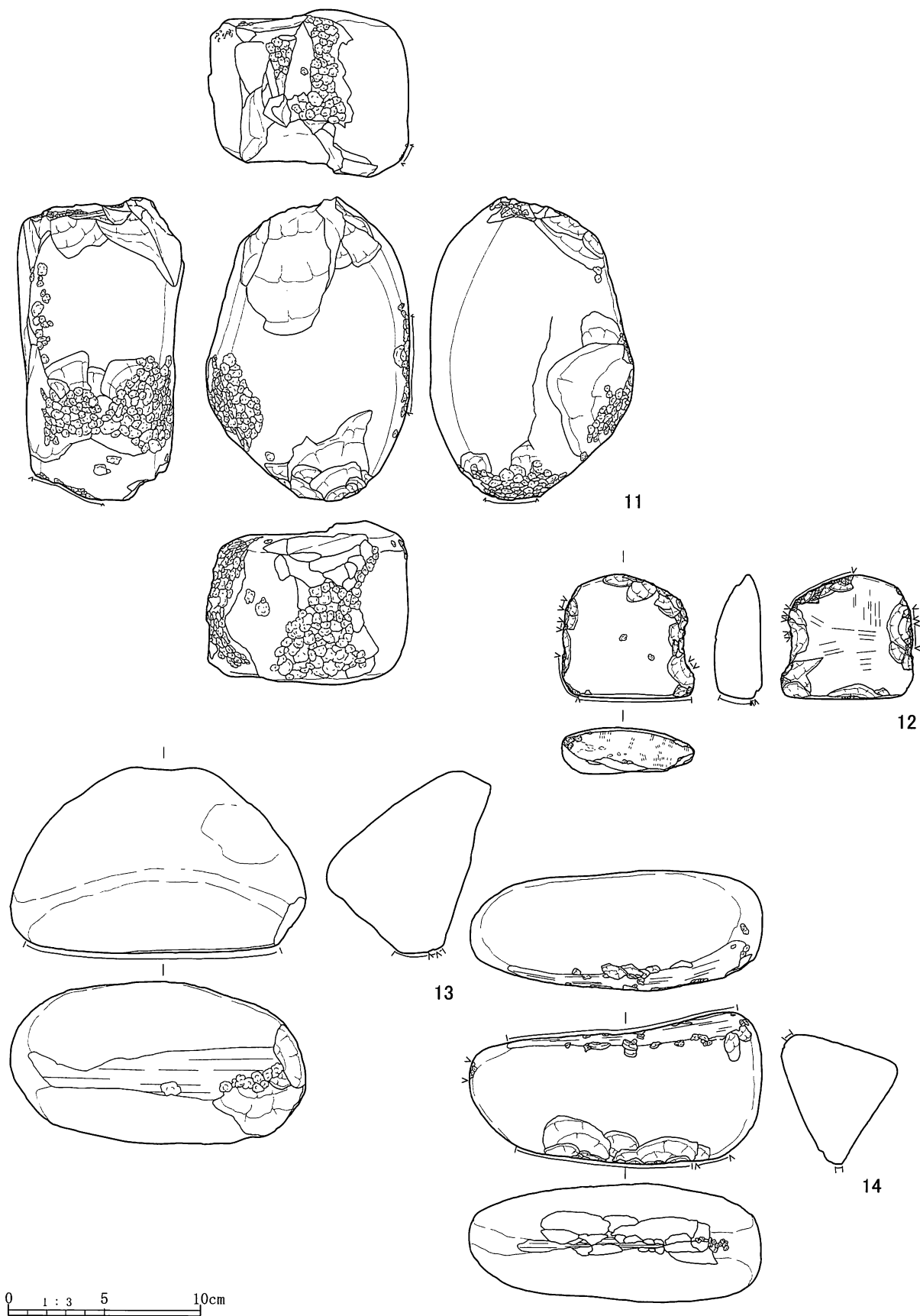
砥石(18・19)：砥石は破片数も含めて11点と多く出土しているが、接合した限り完形個体は認められない。18は下部欠損しているがいわゆる四面砥石で、端部にも砥面とその後の敲打痕が認められる。19は表面に浅い擦痕がある板状の砥石としたものであるが、窪みもなく全体的にやや滑沢が確認できる程度で角に幅約2mmの線条痕が3条認められる。石材はグリーンタフ。

石鋸(20)：本資料は1点のみの出土。20は欠損品であるが下端部に使用面が認められる。

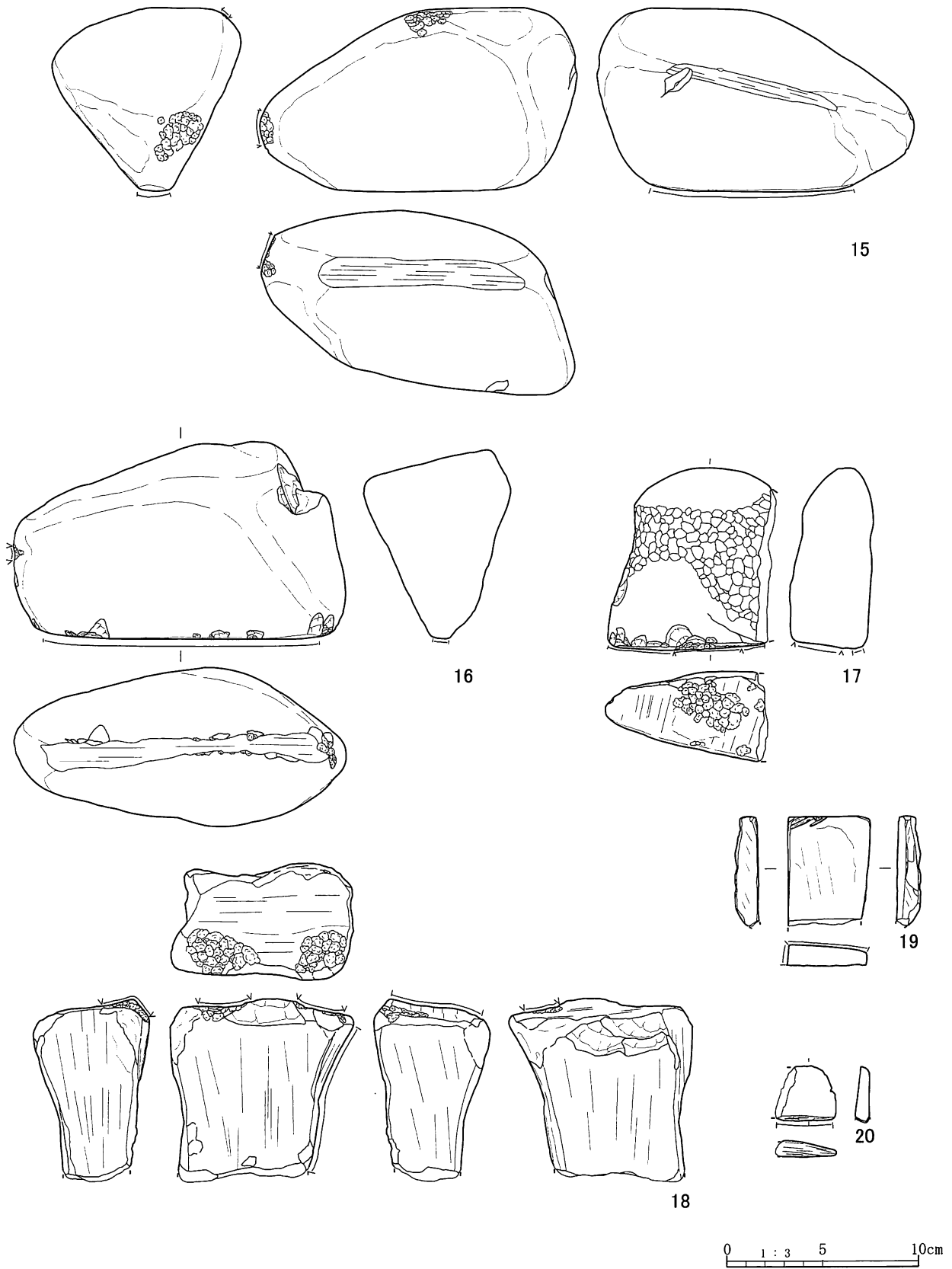
滑沢面ある礫(21)：本資料は板状礫を素材とし多方向に浅い不明瞭な擦痕が認められる。器表面が窪むほどではなく、表面に光沢があるため本群で掲載している。この石器に類似する資料としてはVPB-06の石皿(Ⅲ-19-3)としたもので、対象物が柔らかいものである可能性が考えられる。



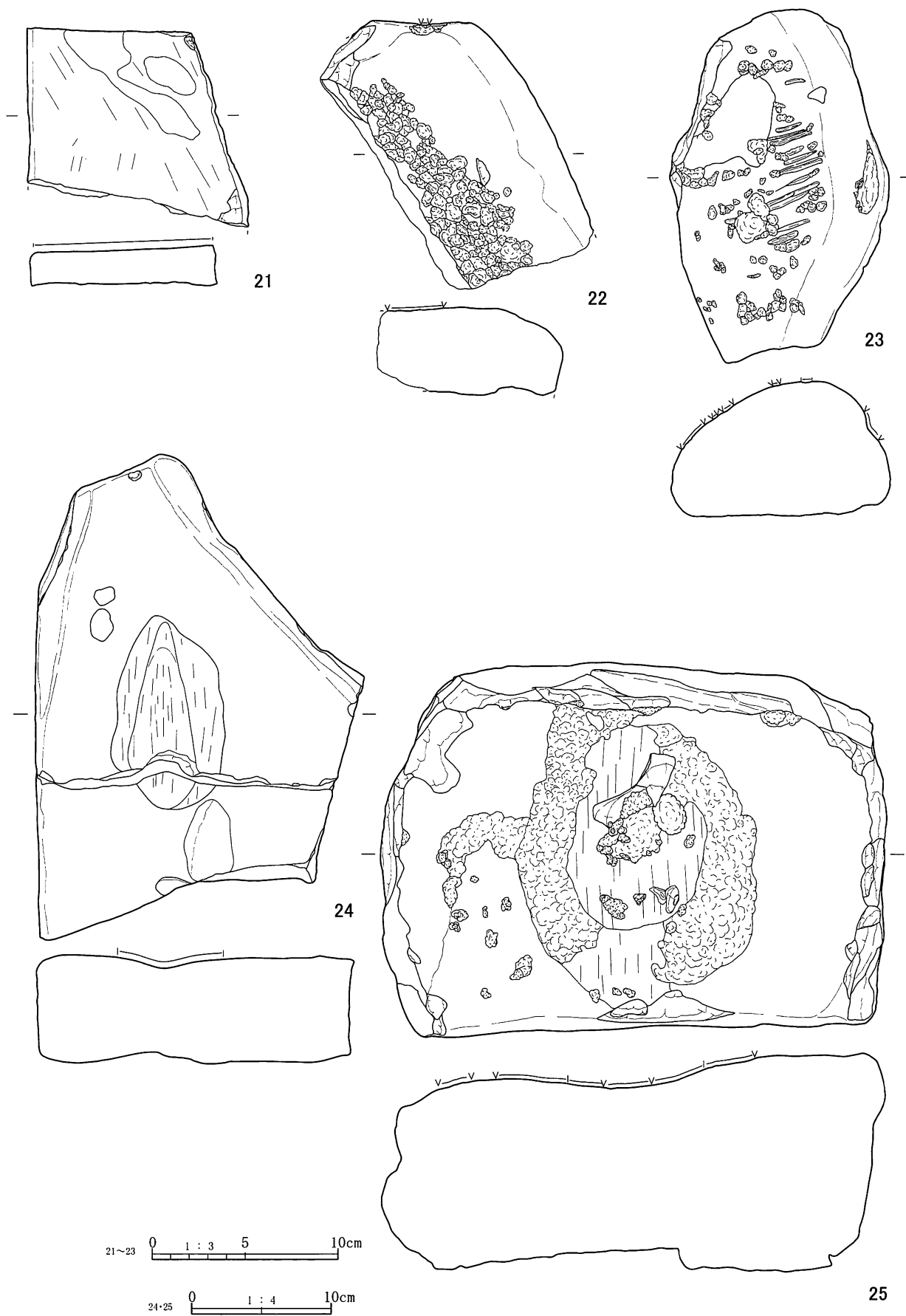
図Ⅲ-23 包含層出土礫石器 (1)



图Ⅲ-24 包含層出土礫石器(2)



図Ⅲ-25 包含層出土礫石器 (3)



図Ⅲ-26 包含層出土礫石器(4)

表Ⅲ-13 包含層出土礫石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-23-1	24-1	-	48992	石 斧	A2	Vc	N-51	49.30	15.10	7.60	6.30	Mud.	
Ⅲ-23-2	24-2	-	48899	石 斧	A2	Vc	O-52	92.68	27.21	10.69	51.00	Gr-mud.	
Ⅲ-23-3	24-3	-	45290	石 斧	A2	VbU	J-34	120.80	31.84	19.57	120.00	Bl-Sch.	
Ⅲ-23-4	24-4	-	50866	石 斧	A3	VbU	F-35	64.20	48.92	9.99	54.00	Ser	
Ⅲ-23-5	24-5	-	45953	石 斧	A1	VbL	J-34	68.50	37.40	18.00	60.00	Gr-mud.	
Ⅲ-23-6	24-6	-	49433	たたき石	I A1	Vc	N-51	141.00	69.30	34.40	374.00	Sa.	
Ⅲ-23-7	24-7	-	50845	たたき石	I A3	VbL	E-20	155.80	83.00	35.90	454.00	Sa.	
Ⅲ-23-8	24-8	-	49355	たたき石	I B1	VI	N-51	(140.60)	43.40	35.60	205.00	Sa.	
Ⅲ-23-9	24-9	-	50307	たたき石	II A1	VbL	H-31	110.00	(79.00)	(29.00)	315.00	Sa.	
Ⅲ-23-10	24-10	-	49036	たたき石	II B3	Vc	N-51	152.20	77.20	47.80	600.00	Sa.	
Ⅲ-24-11	24-11	-	47941-1	たたき石	II B2	VbU	I-46	(154.00)	102.50	86.80	1790.00	Sa.	被熱
Ⅲ-24-12	24-12	-	46989	すり石	A	VbL	N-47	63.30	69.40	24.30	140.00	Sa.	
Ⅲ-24-13	24-13	-	47146	すり石	A	Vc	N-48	(151.00)	71.80	99.70	1200.00	Sa.	
Ⅲ-24-14	24-14	-	47745	すり石	A	VbL	N-51	150.50	74.20	57.00	680.00	Sa.	たたき並用
Ⅲ-25-15	24-15	-	51049	すり石	A	VbU	L-47	170.50	100.00	95.30	1505.00	Sa.	幅広
Ⅲ-25-16	24-16	-	48443	すり石	A	VI	L-47	123.00	110.00	75.10	1360.00	Sa.	幅狭
Ⅲ-25-17	24-17	-	46663	石 冠	D	VbL	O-53	91.97	(81.75)	42.56	505.00	Sa.	
Ⅲ-25-18	24-18	-	46067	砥 石	C	VbU	M-46	(91.20)	91.70	61.00	495.00	Sa.	
Ⅲ-25-19	24-19	-	50806	砥 石	C	VbU	D-19	(56.20)	41.60	(11.50)	40.00	Ta.	欠損
Ⅲ-25-20	24-20	-	50372	石 鋸	-	VbL	E-22	29.13	-	8.15	7.26	Sa.	
Ⅲ-26-21	24-21	-	50720	滑沢面のある礫	A	Va	D-33	(122.90)	(105.50)	(18.40)	360.00	Sa.	
Ⅲ-26-22	24-22	-	49152-1	台 石	-	Vc	M-51	(153.70)	(87.30)	(57.10)	960.00	Sa.	
Ⅲ-26-23	24-23	-	46515	台 石	-	VbL	G-46	(195.6)	118.00	70.60	1902.00	Sa.	
Ⅲ-26-24	25-24	12V ST02	46850 46851	石 皿	-	VbL	N-51	(350.40)	(240.00)	83.80	8400.00	Sa.	
Ⅲ-26-25	25-25	-	47460	石 皿	-	VbL	AA-49	350.60	260.30	230.50	24480.00	Sa.	

台石 (22・23) : 台石は敲打主体のもので、設置が考えられるものを本群に分類している。22は欠損品、23は断面カマボコ状であるが敲打のほかに斜め方向への線条痕も認められる。

石皿 (24・25) : 石皿は砥面が主体のもので、設置タイプが考えられるものを本群に分類している。24は中央に2段の窪みを有する石皿で、縦方向の擦痕が顕著である。中央やや下で割れており、剥離があることから、敲打によって破損した可能性も考えられる。25は完形の石皿で縁辺を打ち欠いて整形している。石皿は擦り面を主体とするが、本資料は使用頻度では敲打、擦り面と同じくらいであるが、敲打後に中央部分に擦り面を形成していることから本群で掲載している。また、擦り面に深い溝が3ヶ所あるが、ヲチャラセナイ遺跡(厚真町 2013a)で出土している石皿にも認められ、「モノ」を固定するための溝であった可能性が考えられる。

第IV章 まとめ

厚幌1遺跡は過年度の調査により、アイヌ文化期までの遺構が確認されており、縄文時代においては環境、災害イベントを示唆する報告が成されている(厚真町 2004)。今年度の調査ではアイヌ文化期の道跡を1条検出したが、主体は縄文時代の遺構及び遺物であった。出土する土器は後期初頭の余市式土器が主体を占めるが、前期前葉の土器も少なからず認められる。前期前葉の土器群は今回の調査で底部片が出土していないが静内中野式の範疇であると思われる。この前期土器群の中に器表面が黒色を呈する「胎土に滑石を含む土器」(以下 滑石土器)が出土し、同地域で出土する同様の土器群との関係が示唆される。また、過年度に報告された地滑り堆積物に関連する災害イベントとして、上幌内モイ遺跡対岸の地滑り地形が挙げられる。このように本遺跡を通じて、土器の流通や自然災害についていくつかのデータを提示することが可能となっている。以下に個別に考察を述べる。

1. 胎土に滑石を含む土器について

滑石土器としたものは、胎土に滑石や蛇紋岩などの鉱物を含み、器表面が鈍い光沢を帯び、色調は黒色を呈している。町内ではヲチャラセナイ遺跡、ニタップナイ遺跡、幌内5遺跡で出土している。中でも上流域で本遺跡に近いヲチャラセナイ遺跡は縄文時代前期後葉の集落で、円筒下層土器d式、大麻V式土器が主体的に出土している。これら土器群の中に本遺跡と同様に滑石土器が少量であるが出土している。両遺跡とも出土量から推定して客体的にもたらされたものである。ヲチャラセナイ遺跡については胎土を偏光顕微鏡観察分析した結果、土器に含まれる鉱物は蛇紋岩で日高地方の可能性が高いという結果を得ている(厚真町 2013a)。このデータに基づくと前期後葉には同地域との交易があったことが考えられるが、縄文時代早期以降、厚幌ダム遺跡群からは富良野盆地系土器が搬入品として各遺跡から出土し、内陸ルートが想定されている。もちろん、富良野盆地系土器の存在で南(海側)からの交易を否定する要素にはならないが、滑石土器についても富良野市、芦別市、滝川市で出土例があることから、同様のルートで本遺跡にもたらされたとも考えられる。そこで、本報告にあたりヲチャラセナイ遺跡(前期後葉)、厚幌1遺跡(前期前葉)の滑石土器と富良野市(三の山3遺跡、学田3区1遺跡)、芦別市(滝里38遺跡)で出土した土器をX線粉末回折分析で比較を行った。滝里38遺跡は土器に含まれる鉱物のみ分析したので他の粘土鉱物との比較はできなかったが、厚真町と富良野地方で出土する滑石土器は「高MgO-低SiO₂グループ」の同一グループに分けられることが明らかとなった(厚真町 ヲチャラセナイ遺跡 第V章第5節 印刷中)。また、厚幌1遺跡の土器はクリソタイルを中量含むが、アンチゴライトを含まないため、ヲチャラセナイ遺跡の滑石土器とはやや組成が異なる。しかし、一部の土器片によるものなので確定的とは言えない。滑石土器については厚真も含め出土量はあまり多くないが、黒色で光沢のある手触りと重さは一見土器のそれとは異なる質感を持っているため、見落とししていた可能性も考えられる。

今後、これらの産地も含め縄文の交易についての資料になるような調査を行いたい。

2. 厚真川上流域の地滑り

これまでの厚幌1遺跡で行われてきた調査により、厚真川上流域の災害イベントが明らかとなってきた。そこで、同町内の遺跡の中で平成16~19年まで発掘調査を行った上幌内モイ遺跡の調査で少なからず災害に係わると思われる堆積と周辺を紹介したい。

上幌内モイ遺跡の対岸（西側）には沢地形と異なる等高線を示す地点が標高 60～80m の間で認められる（図 I）。この地点は春や秋、広葉樹の葉が少ない時期に視認することができる。

平成 18・19 年の調査では上幌内モイ遺跡の T₁ 面に地震に起因する洪水堆積物を報告しており（厚真町 2009a）、同面で検出した T ピット群もシルト化した V 層と洪水堆積シルトを被覆している。今回調査した厚幌 1 遺跡の T ピットも地滑り堆積物を被覆していることから、ほぼ同時期の自然災害が起因していると考えられる。

2 遺跡の事例を合わせると厚真川上流域では縄文時代後期初頭頃（約 4000 年前）に大型地震が発生し、直線距離で約 1.2 km 離れた 2 地点で地滑りが起こり、上幌内モイ遺跡では一時的に厚真川が堰き止められ「ダム湖」が形成されたことが推測される。自然災害イベントに関する事例は今後の調査で増加することも考えられ、引き続き注意して調査を行いたい。

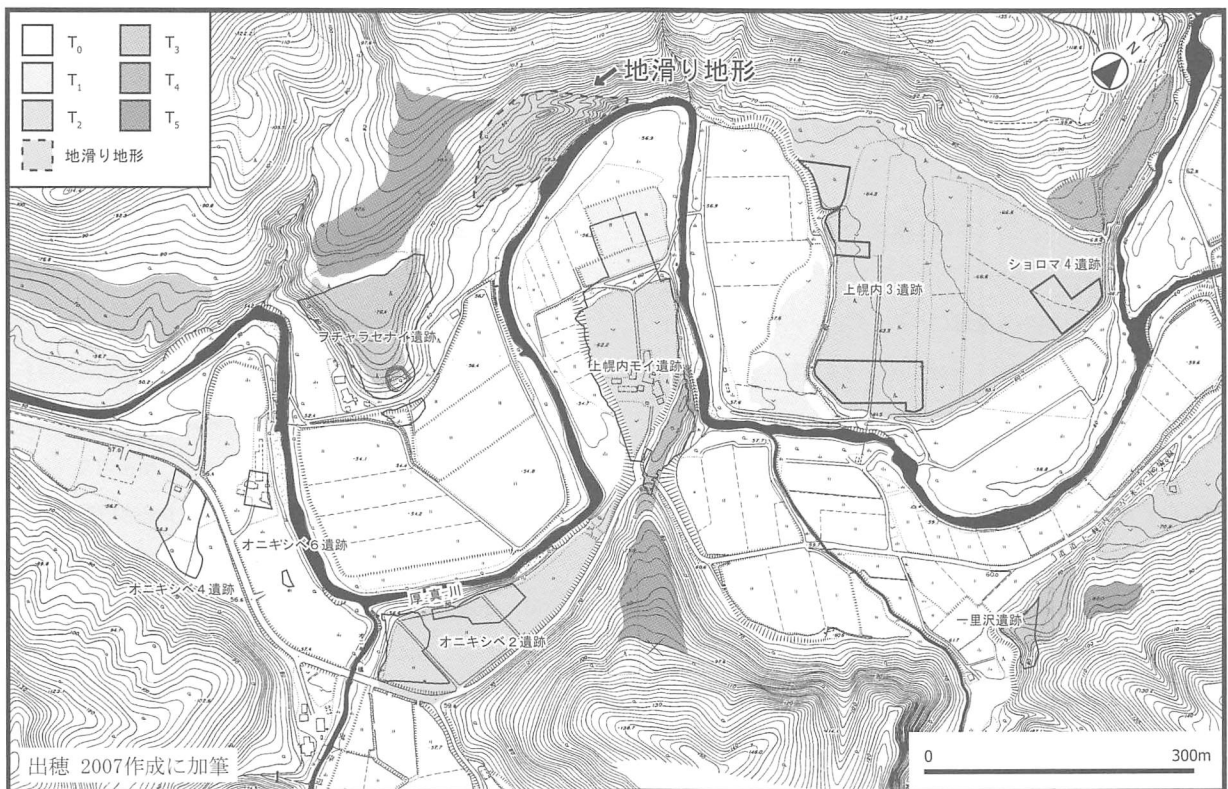


図 I 上幌内モイ遺跡周辺の地滑り地形



図 II 上幌内モイ遺跡 T₁ 面断面図（厚真町 2009a より抜粋）

引用・参考文献

- 厚真町 1986 『厚真町史』
- 厚真町 1998 『増補 厚真町史』
- 厚真町教育委員会 2001a 『鯉沼 2 遺跡』
- 厚真町教育委員会 2001b 『豊川 1 遺跡』
- 厚真町教育委員会 2004 『厚幌 1 遺跡』
- 厚真町教育委員会 2005 『鯉沼 3 遺跡』
- 厚真町教育委員会 2006a 『上幌内モイ遺跡 (1)』
- 厚真町教育委員会 2006b 『鯉沼 3 遺跡 (2)』
- 厚真町教育委員会 2007a 『上幌内モイ遺跡 (2)』
- 厚真町教育委員会 2007b 『鯉沼 3 遺跡 (3)』
- 厚真町教育委員会 2009a 『上幌内モイ遺跡 (3)』
- 厚真町教育委員会 2009b 『ニタツプナイ遺跡 (1)』
- 厚真町教育委員会 2010a
『厚幌 1 遺跡 (2)・幌内 7 遺跡 (1)』
- 厚真町教育委員会 2010b
『富里 2 遺跡・幌内 5 遺跡 (1)・ニタツプナイ遺跡 (2)』
- 厚真町教育委員会 2011 『オニキシベ 2 遺跡』
- 厚真町教育委員会 2013a
『ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡』
- 厚真町教育委員会 2013b 『オニキシベ 5 遺跡』
- 厚真町幌内自治会 1997 『開基百年 幌内のあゆみ』
- 厚真村 1956 『厚真村史』
- 厚真村郷土研究会 1956 『厚真村古代史』
- 出穂雅実 2006 「第三章第 2 節 ジオアーケオロジー」
『上幌内モイ遺跡 (1)』厚真町教育委員会
- 井上 巖 2006 「第四章第 4 節 上幌内モイ遺跡出土土器
の胎土分析」『上幌内モイ遺跡 (1)』厚真町教育委員会
- 小嶋 尚・小野有五 他 2003
『日本の地形 2 北海道』東京大学出版会
- 亀井喜久太郎 1956 「厚真出土の土偶」『先史時代 3』
先史学同好会
- 合地信生 2009 「第七章第 9 節 厚真町上幌内モイ遺跡
出土縄文土器の胎土分析」『上幌内モイ遺跡 (3)』
厚真町教育委員会
- 早田 勉 2006 「第四章第 1 節 上幌内モイ遺跡後期
更新統の層序とテフラ」『上幌内モイ遺跡 (1)』
厚真町教育委員会
- 田近 淳・大津 直・八幡正弘 2004
「第五章第 5 節 厚幌 1 遺跡の地すべり堆積物」
『厚幌 1 遺跡』厚真町教育委員会
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1996
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 I』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1987
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 II』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1990
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 III』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2002
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 VII』
- 野澤 謙庵 1692 「蝦夷記」『續々群書類従第九』
國書図書館刊行会
- 花岡正光 2004 「第五章第 4 節 厚幌 1 遺跡の完新世
テフラについて」『厚幌 1 遺跡』厚真町教育委員会
(財)北海道埋蔵文化財センター 2003
『厚真町浜厚真 3 遺跡』北理調報 186
- 益富 壽之助 1987 『原色岩石図鑑』(全改訂新版)
保育社
- 松浦武四郎・吉田常吉 1962 『蝦夷日誌 上 東蝦夷日誌』
時事通信社
- 松浦武四郎・秋葉実・高倉信一郎 1985 『戊午東西蝦夷
山川地理取調日誌』中 北海道出版企画センター
- 松野久也・石田正夫 1960
『1:50,000 地質図幅説明書 早来』北海道開発庁

厚幌1遺跡(3)

写真図版

図版1



1. 厚幌1遺跡遠景 SW→



2. B1地区V層調査完了 W→



3. B1地区西壁基本土層(Tピット掘り上げ土有) E→

図版2



1. 道跡検出1 SE→



2. 道跡検出2 W→



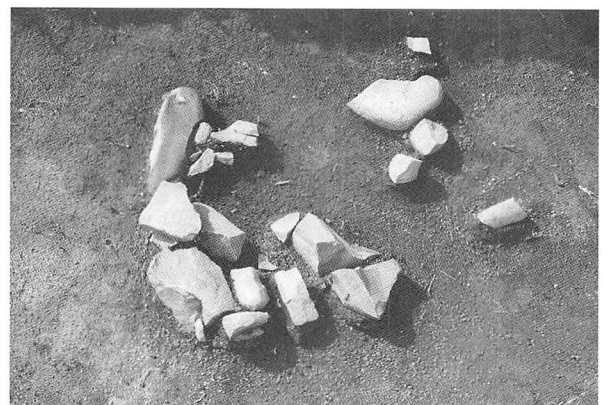
3. 道跡断面1 E→



4. 道跡断面2 E→



5. III PB-02検出 NW→



6. III SB-09検出 SE→

図版3



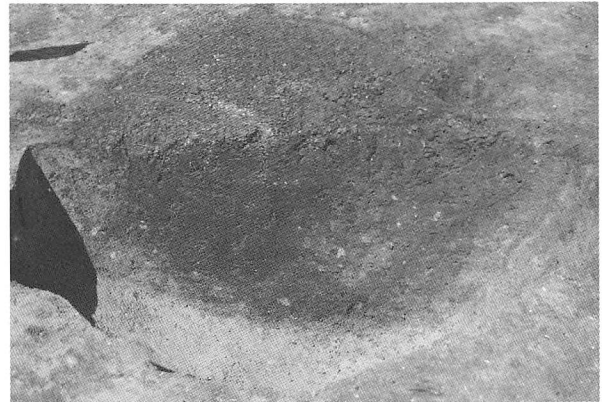
1. VP-13 完掘 SW→



2. VP-13 断面 SW→



3. VP-14 完掘 E→



4. VP-14 断面 E→



5. VP-15 断面 SE→



6. VP-16 断面 E→



7. VP-17 断面 NW→

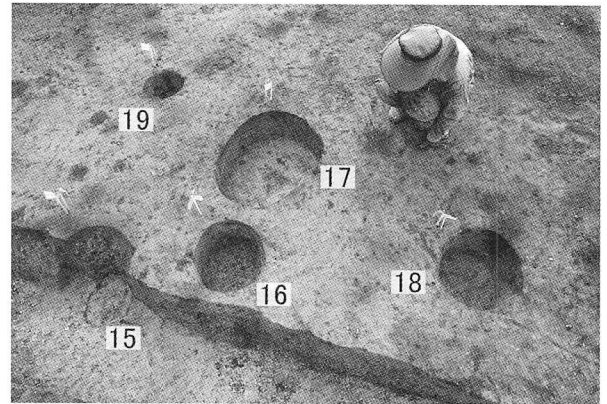


8. VP-18 断面 E→

図版4



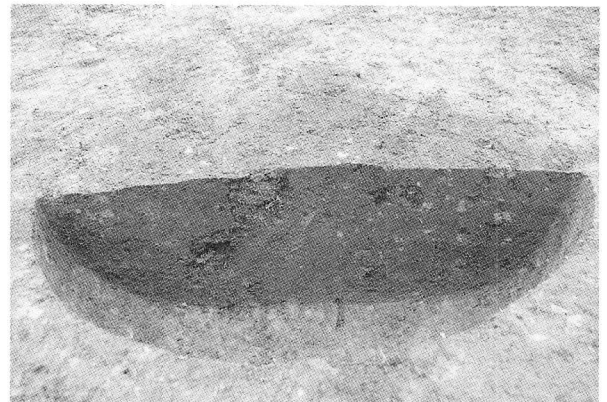
1. VP-19 断面 NW→



2. VP-15~19 完掘 S→



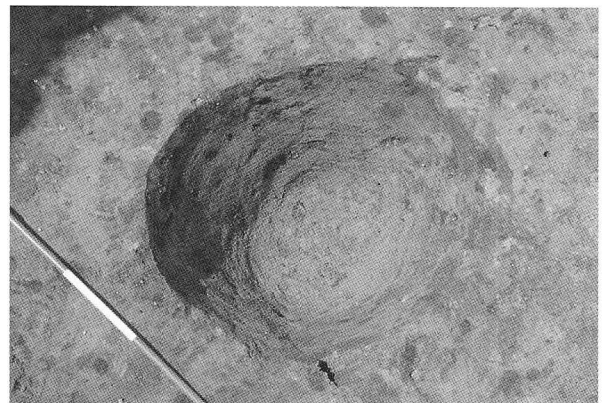
3. VP-22 断面 NE→



4. VP-23 断面 NE→



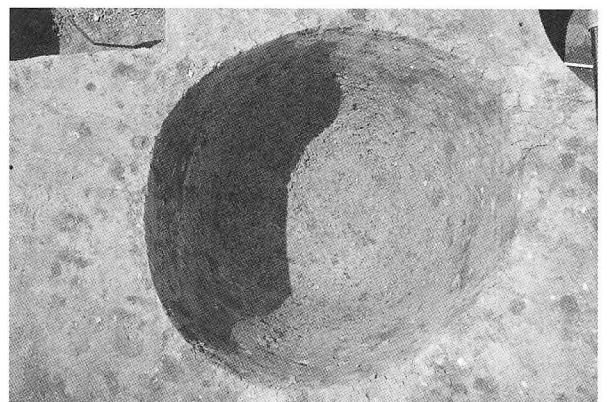
5. VP-22(左)・23(右) 完掘 NE→



6. VP-24 完掘 NE→



7. VP-24 断面 NE→



8. VP-25 完掘 NE→

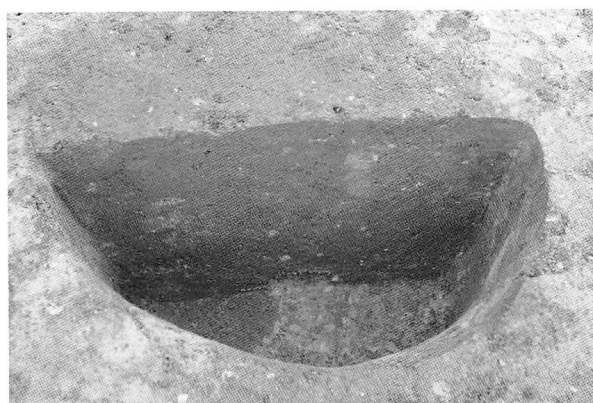
図版5



1. VP-25 断面 NE→



2. VP-26 完掘 NE→



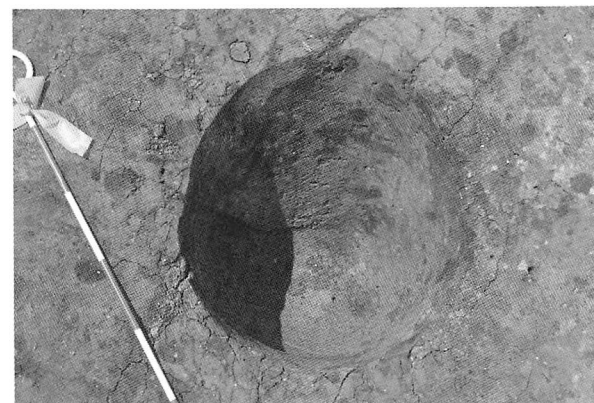
3. VP-26 断面 NE→



4. VP-27 完掘 NE→



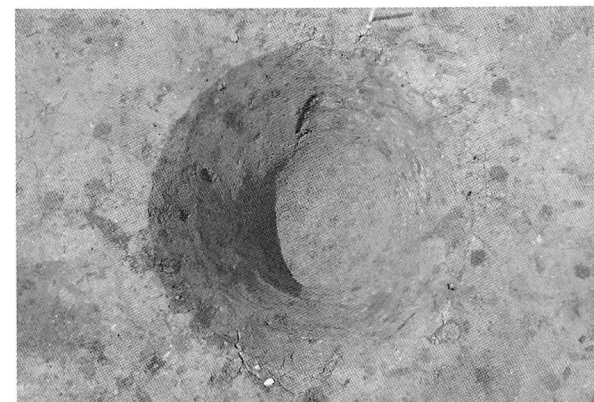
5. VP-27 断面 NE→



6. VP-28 完掘 NE→

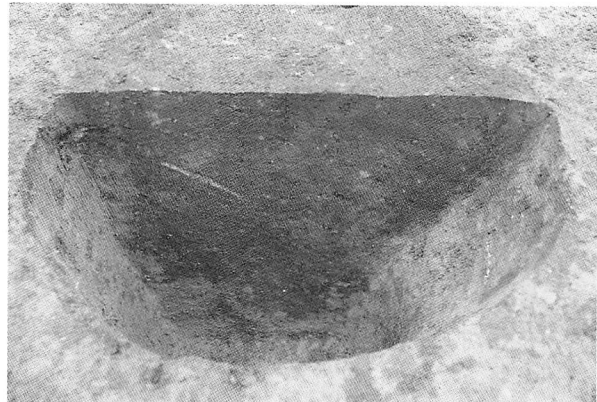


7. VP-28 断面 NE→



8. VP-29 完掘 NE→

図版6



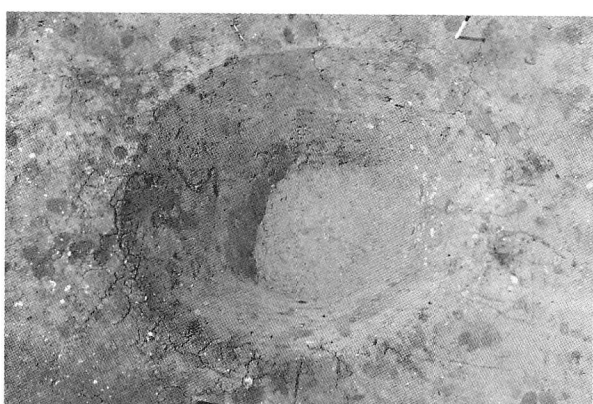
1. VP-29 断面 NE→



2. VP-30 完掘 E→



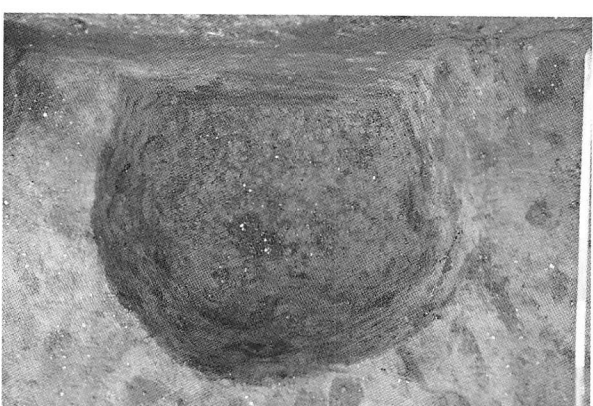
3. VP-30 断面 E→



4. VP-31 完掘 NE→



5. VP-31 断面 NE→



6. VP-33 完掘 N→

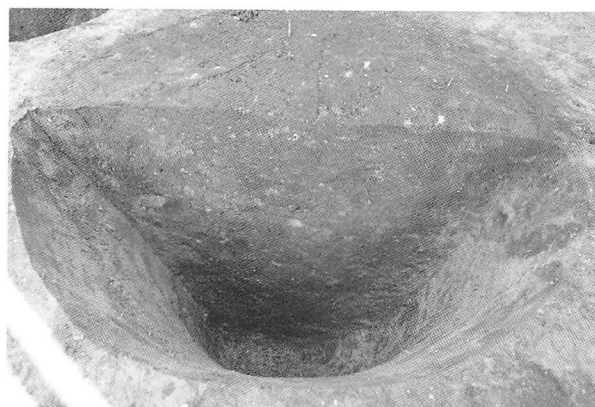


7. VP-33 断面 N→



8. VP-34 断面 SE→

図版7



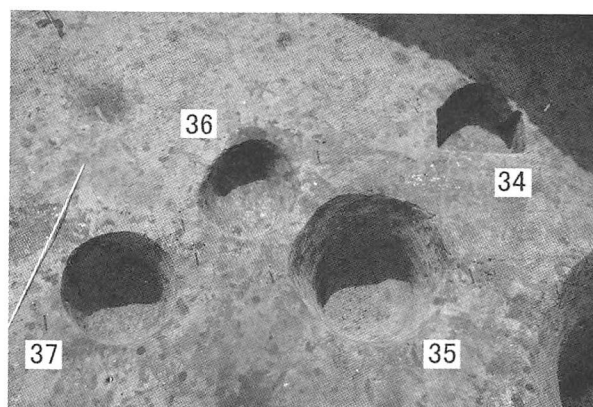
1. VP-35 断面 SE→



2. VP-36 断面 NW→



3. VP-37 断面 NW→



4. VP-34~37 完掘 NW→



5. VP-38 完掘 NW→



6. VP-38 断面 NW→



7. VP-39 完掘 W→



8. VP-39 断面 W→

図版8



1. VP-40 完掘 N→



2. VP-40 断面 N→



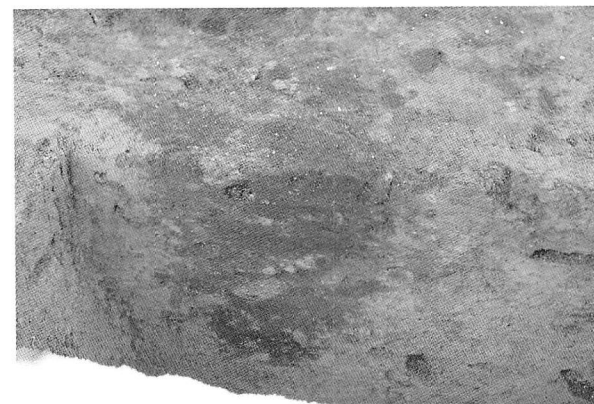
3. VP-42 完掘 E→



4. VP-42 断面 E→



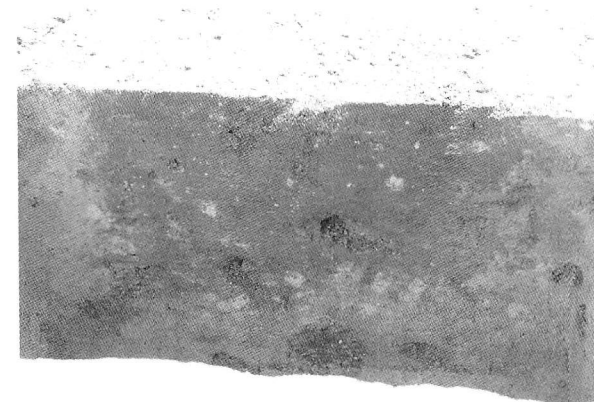
5. VP-43 完掘 NE→



6. VP-43 断面 NE→



7. VP-44 完掘 NE→



8. VP-44 断面 NE→

図版9



1. VP-45 完掘 W→



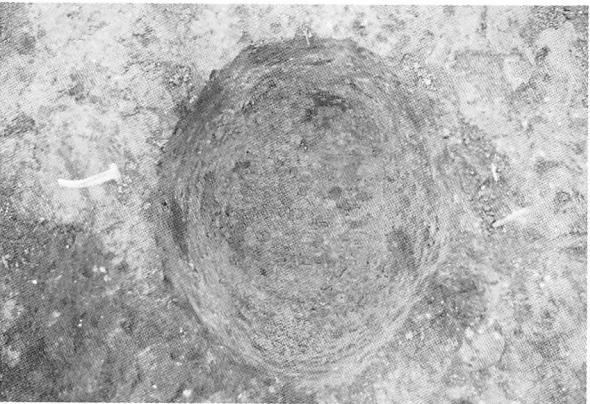
2. VP-45 断面 W→



3. VP-46 完掘 NE→



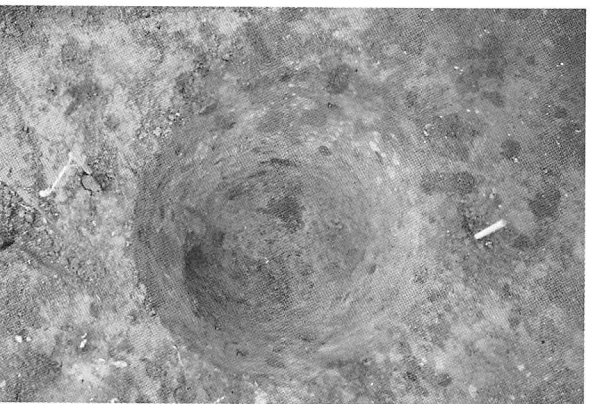
4. VP-46 断面 NE→



5. VP-47 完掘 NW→



6. VP-47 断面 NW→



7. VP-48 完掘 NW→



8. VP-48 断面 NW→

図版10



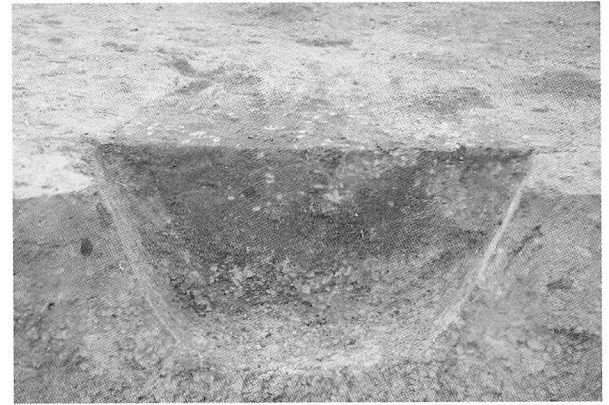
1. VP-49 完掘 N→



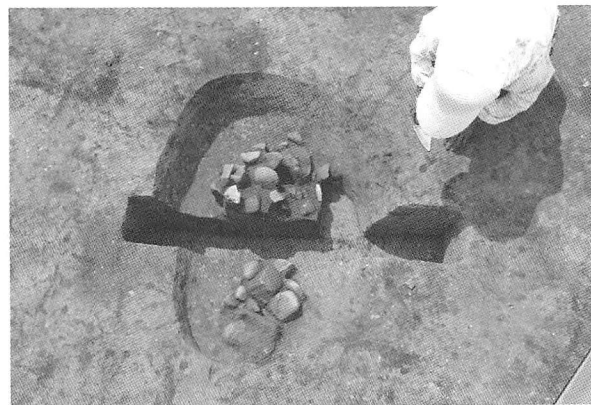
2. VP-49・51 断面 N→



3. VP-50 完掘 NW→



4. VP-50 断面 W→



5. VP-51 被熱礫出土状態 N→



6. VP-51 完掘 N→



7. VP-52 完掘 SW→



8. VP-52 断面 W→

図版11



1. VP-24~39 小ピット群 NW→



2. VF-21 検出 SE→



3. VF-21 断面 SE→

図版12



1. TP-104 完掘 NW→



2. TP-104 断面 NW→



3. TP-105 完掘 E→



4. TP-105 断面 E→



5. TP-106 完掘 NE→

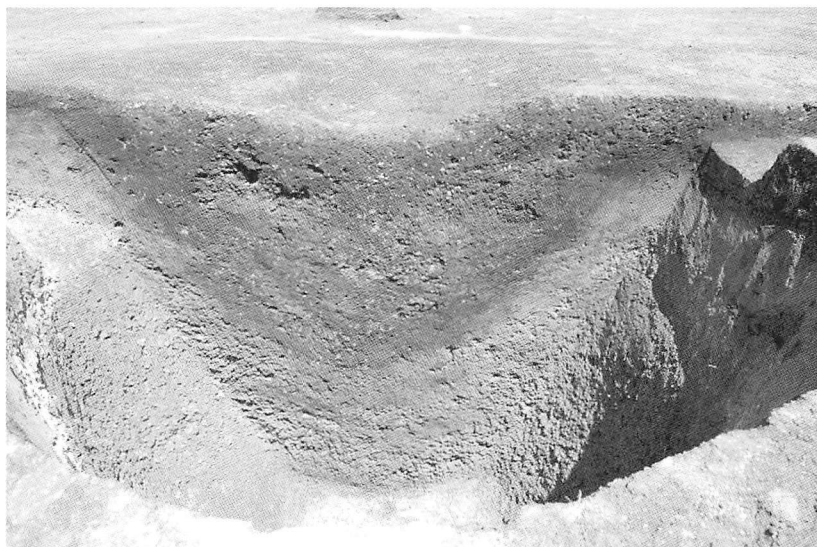


6. TP-106 断面 NE→

図版13



1. TP-107 完掘 S→



2. TP-107 断面(掘り上げ土有) S→



3. TP-108 完掘 N→



4. TP-108 断面 N→



5. TP-110 完掘 S→



6. TP-110 断面 S→

図版14



1. TP-111 完掘 SW→



2. TP-111 断面 SW→



3. TP-112 完掘 NE→



4. TP-112 断面 NE→

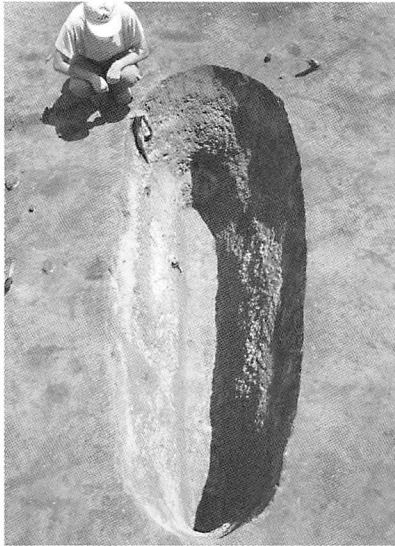


5. TP-113 完掘 NW→



6. TP-113 断面 NW→

図版15



1. TP-114 完掘 W→



2. TP-114 断面 W→



3. TP-116 完掘 N→



4. TP-116 断面 N→



5. TP-117 完掘 NW→



6. TP-117 断面 NW→

図版16



1. TP-118 完掘 W→



2. TP-118 断面 W→



3. TP-119 完掘 S→



4. TP-119 断面 S→

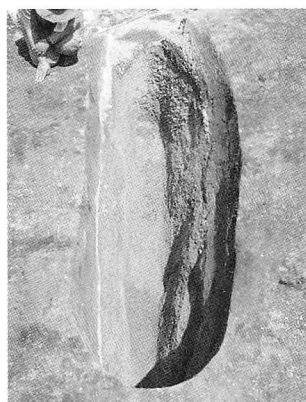


5. TP-120 完掘 SW→



6. TP-120 断面 SW→

図版17



1. TP-121 完掘 SW→ 2. TP-121 断面 SW→ 3. TP-120・121 完掘 SW→



4. VPB-04 検出 S→



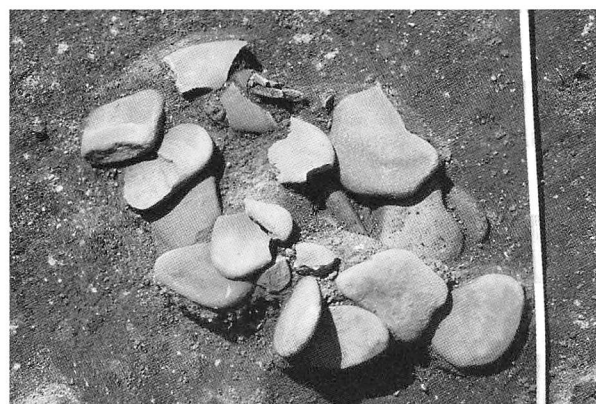
5. VPB-05 検出1 NE→



6. VPB-05 検出2 SE→



7. VPB-06 検出 NE→



8. VSB-11 検出 SE→

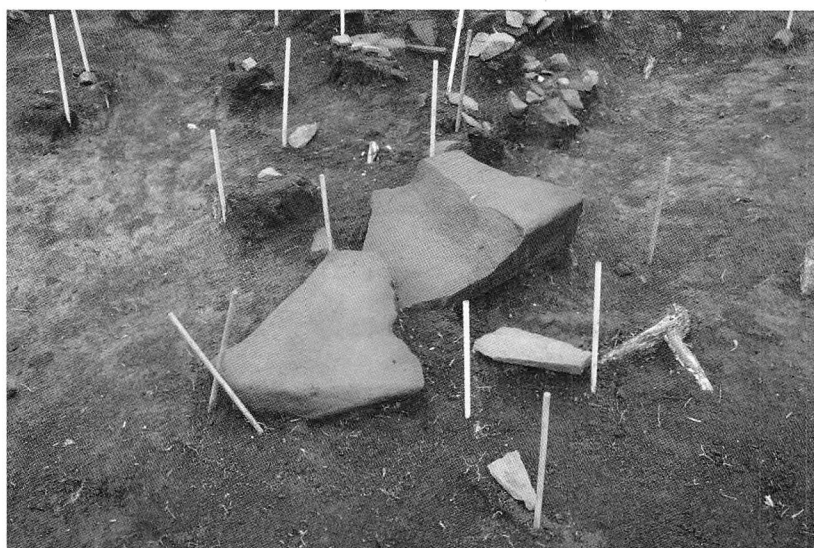


9. VFCE-10 検出 S→

図版18



1. B1地区側 VbL層遺物出土状態 SW→



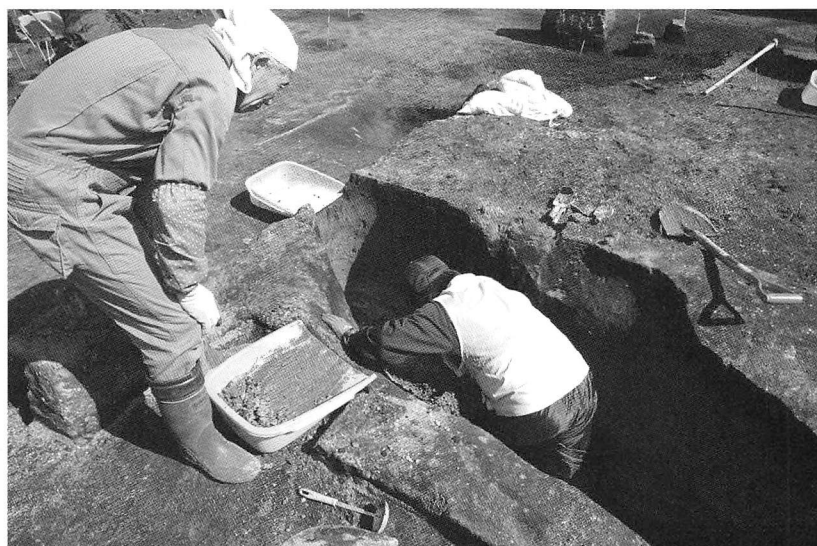
2. B1地区N-51区 石皿出土状態 N→



3. B1地区西側Vc層 遺物出土状態 SW→



1. 作業風景1 (B1地区)



2. 作業風景2 (B1地区)



3. 作業風景3 (B1地区)

図版20

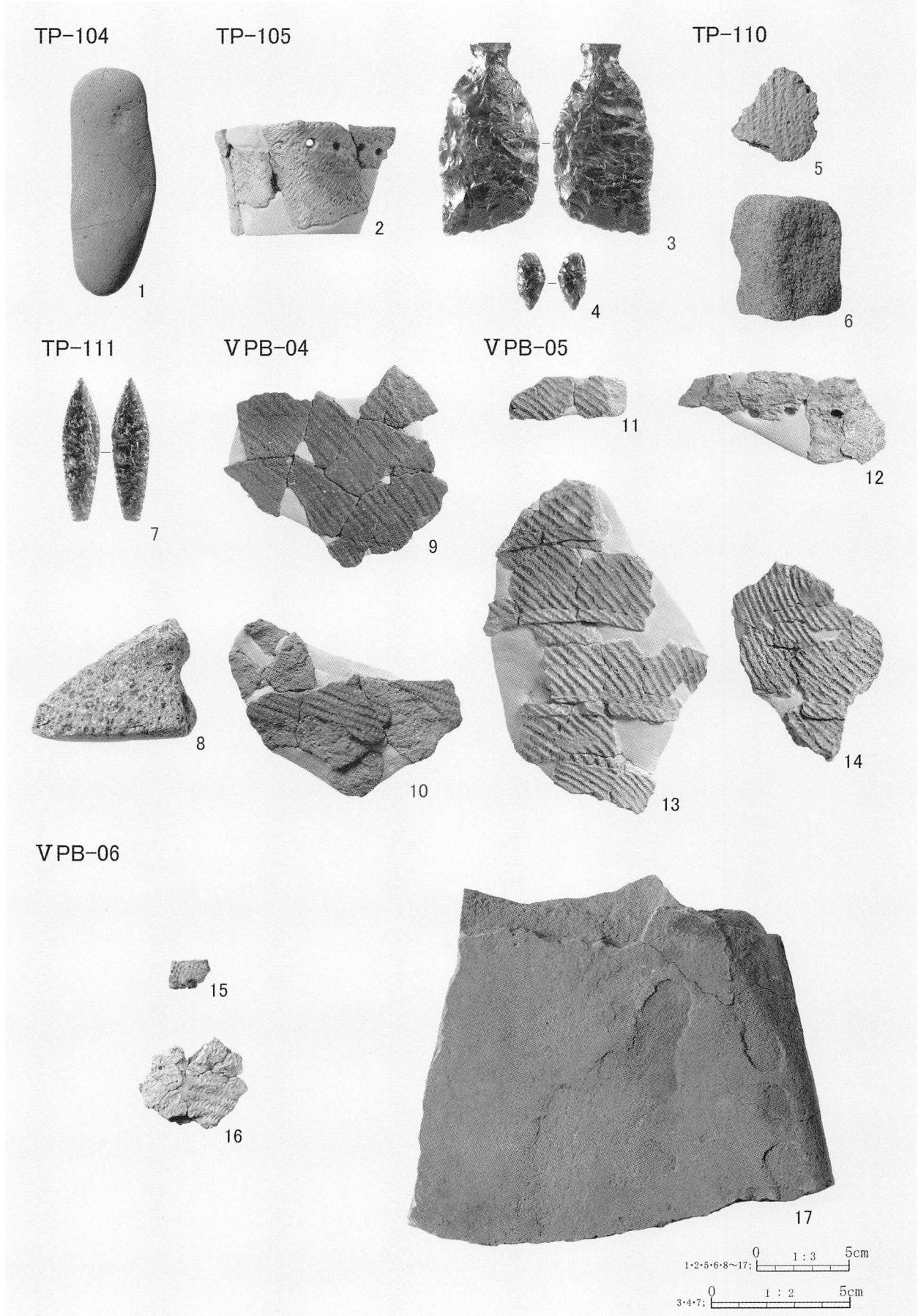


1. III PB-02出土土器



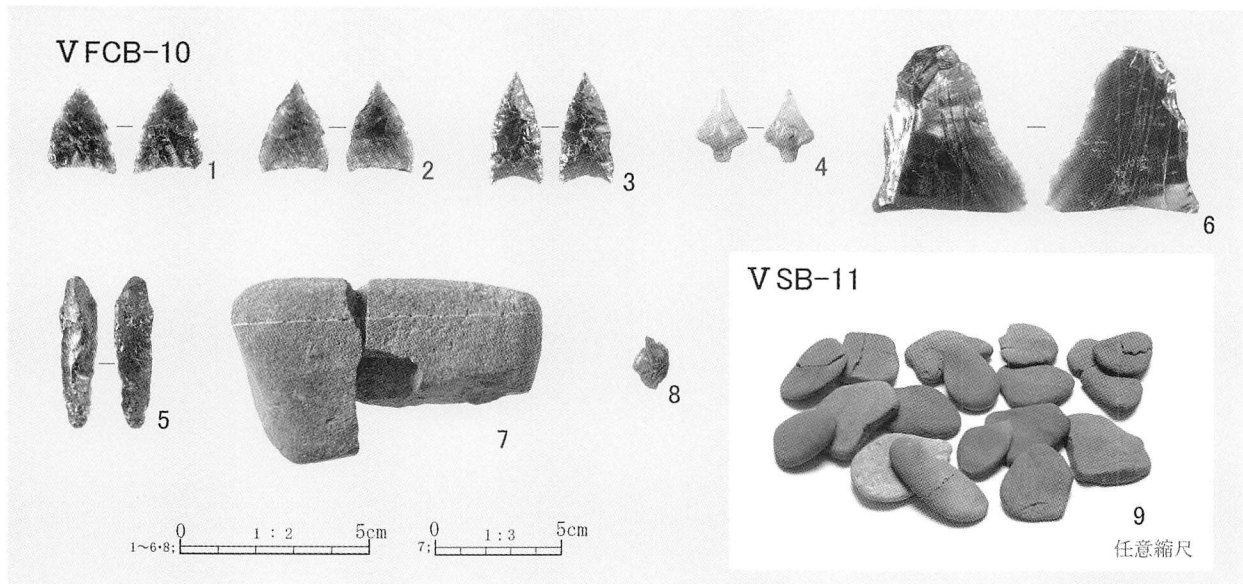
任意縮尺

2. III SB-09出土棒状礫

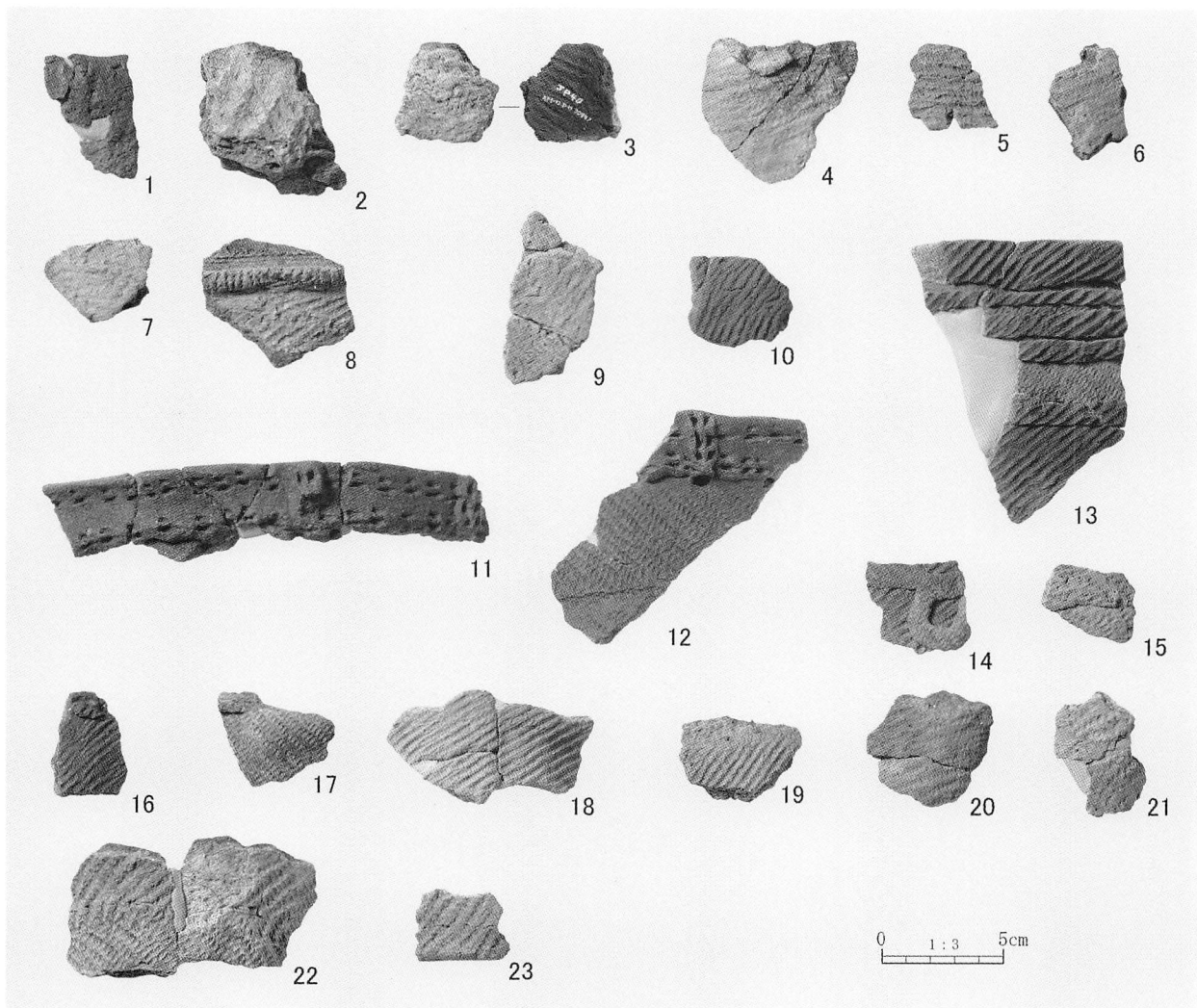


1. TPピット・VPB出土遺物

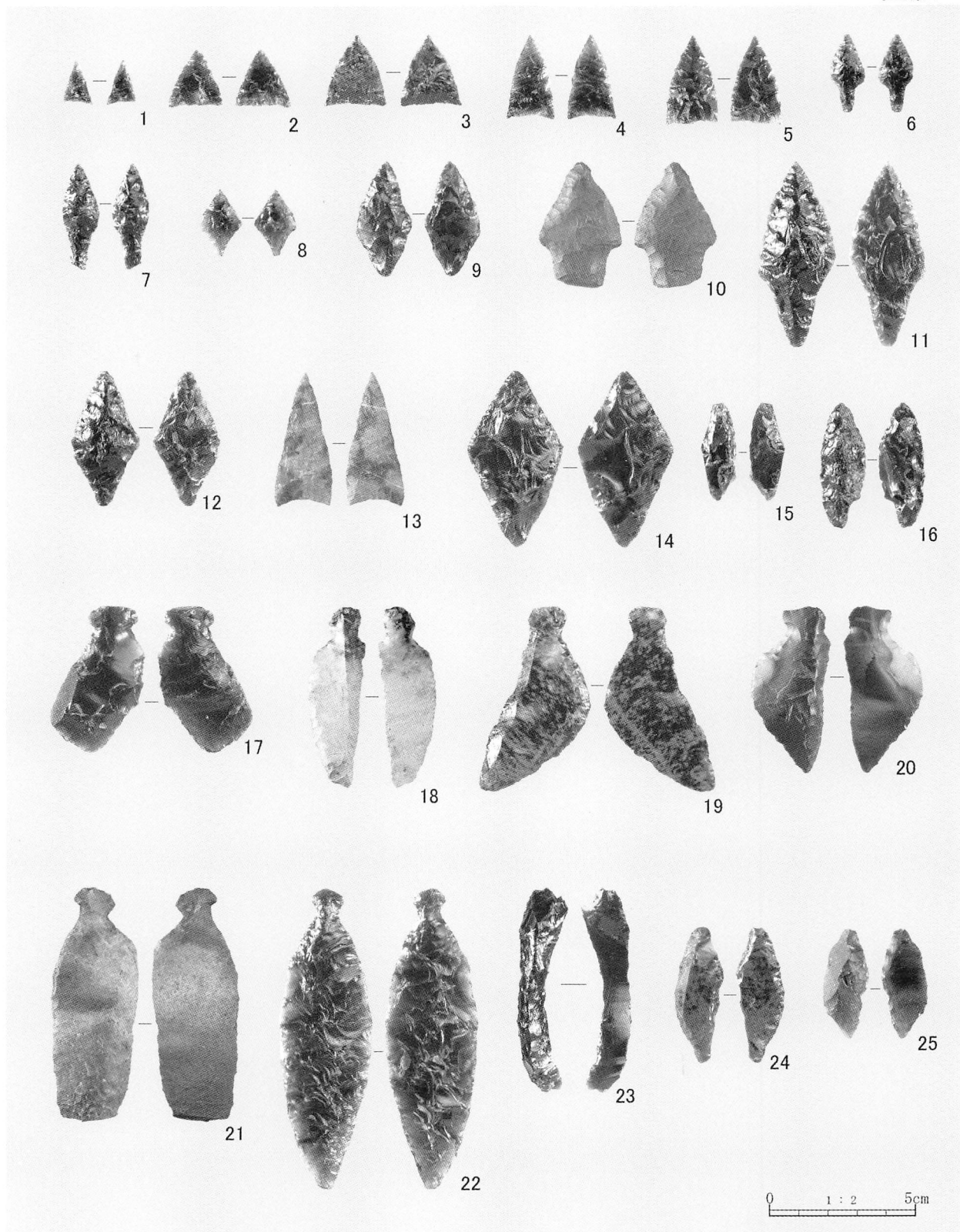
図版22



1. VFCB-10・VSB-11出土遺物

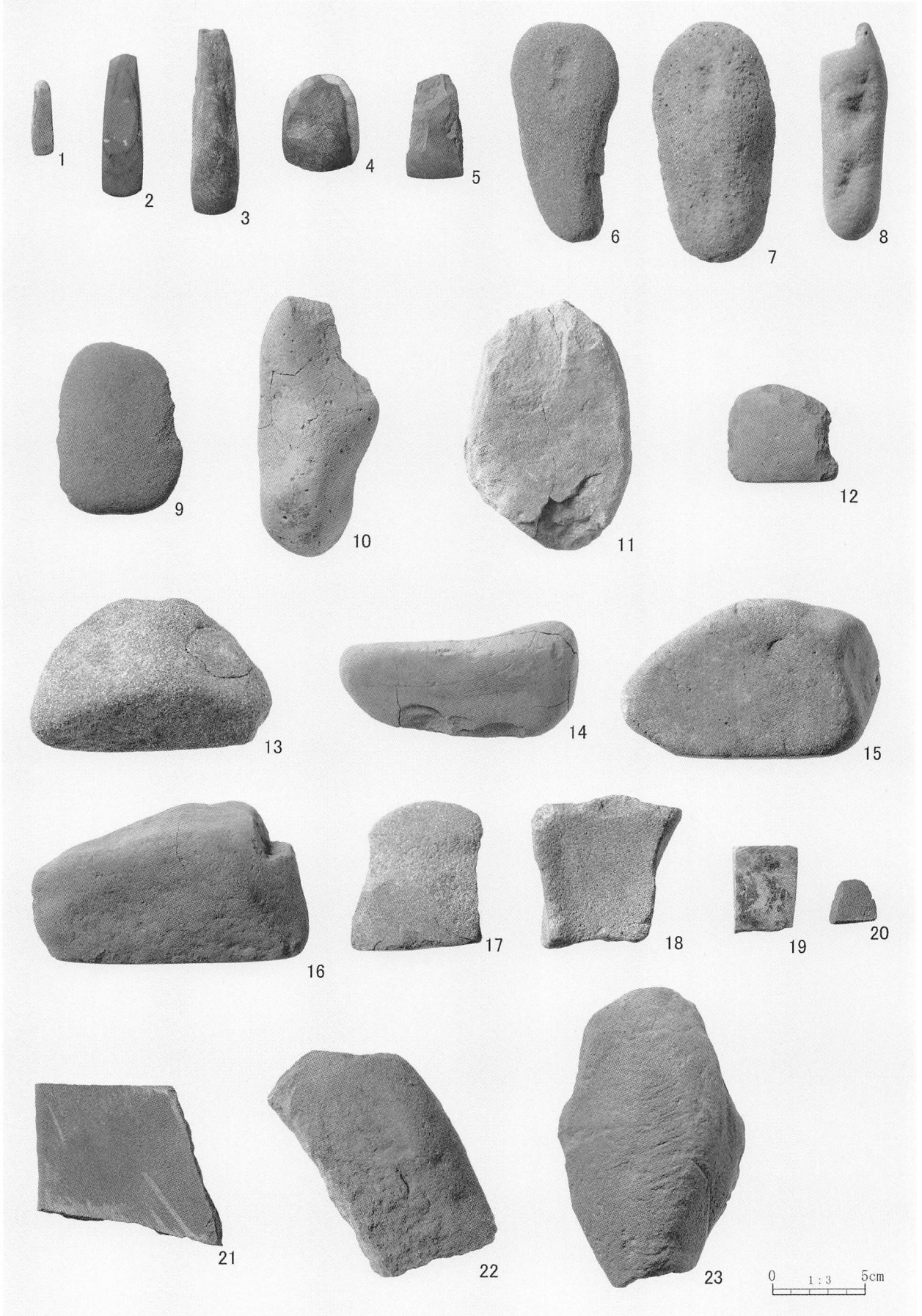


2. 包含層出土土器



1. 包含層出土剥片石器

図版24



1. 包含層出土礫石器(1)



1. 包含層出土礫石器(2)

報告書抄録

ふりがな	あつまちよう あっぼろ いちいせき(3)
書名	厚真町 厚幌1遺跡(3)
副書名	厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	7
シリーズ名	厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	7
編著者名	奈良智法・乾 哲也
編集機関	厚真町教育委員会
所在地	〒059-1601 勇払郡厚真町京町165番地の1
発行機関	厚真町教育委員会
発行年月日	2014年 3月 19日
ふりがな	あっぼろ いちいせき
収録遺跡	厚幌1遺跡
所在地	勇払郡厚真町字幌内487-6・8・9・15・18 二級河川厚真川河川敷
市町村コード	01581
遺跡番号	25
北緯	42° 45' 48"
東経	148° 59' 20"
調査期間	2012年 5月 9日 ～ 2012年 7月 20日
調査面積	2,070㎡
調査原因	厚幌ダム建設
種別	集落跡
主な時代	アイヌ文化期、統縄文文化期、縄文時代前期・中期・後期。
主な遺構	アイヌ文化期:道跡1条。擦文～アイヌ文化期:礫集中1ヶ所。 統縄文文化期:土器集中1ヶ所。 縄文時代:土坑36基、焼土1ヶ所、Tピット16基、土器集中3ヶ所、礫集中1ヶ所、フレイクチップ集中1ヶ所。
主な遺物	静内中野式・柏木川式・北筒式・余市式土器、石器、剥片類、石製品、礫。

要 約

今年度の発掘調査は厚真川本流に近い河岸段丘縁辺部の調査も行ったが、縄文時代の遺構、遺物は僅少であった。しかし、山側(南側)にはTピットをはじめ、小土坑群が密な分布を示している。出土土器については、縄文時代前期前葉に推定できる繊維を多量に含む土器、北筒式土器が少量、余市式土器が主体的に出土している。今回の調査で特筆する点としては、余市式土器(VPB-05)に直接地滑り堆積物が被覆していることによって、厚真川上流域のイベント時期がより明らかになったことが挙げられる。

厚真町 厚幌 1 遺跡 (3)

—厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7—

発行日 平成 26 年 3 月 19 日

編集・発行 厚真町教育委員会

〒059-1601 北海道勇払郡厚真町京町 165 番地の 1

TEL 0145-27-2495 FAX 0145-27-3178

印刷 ひまわり印刷株式会社

北海道苫小牧市永福町 2 丁目 1-2

TEL 0144-74-4500